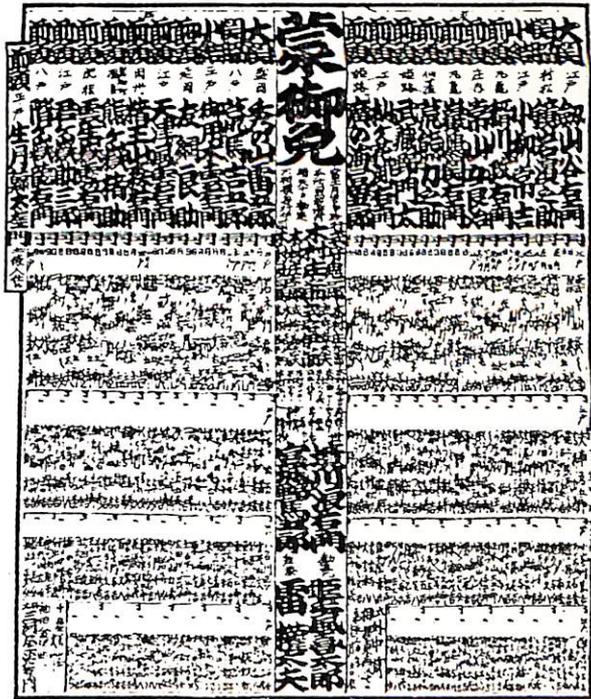


两国相撲 国技館

新国技館
開館記念







「新国技館開館記念」 相撲・両国・国技館

目次

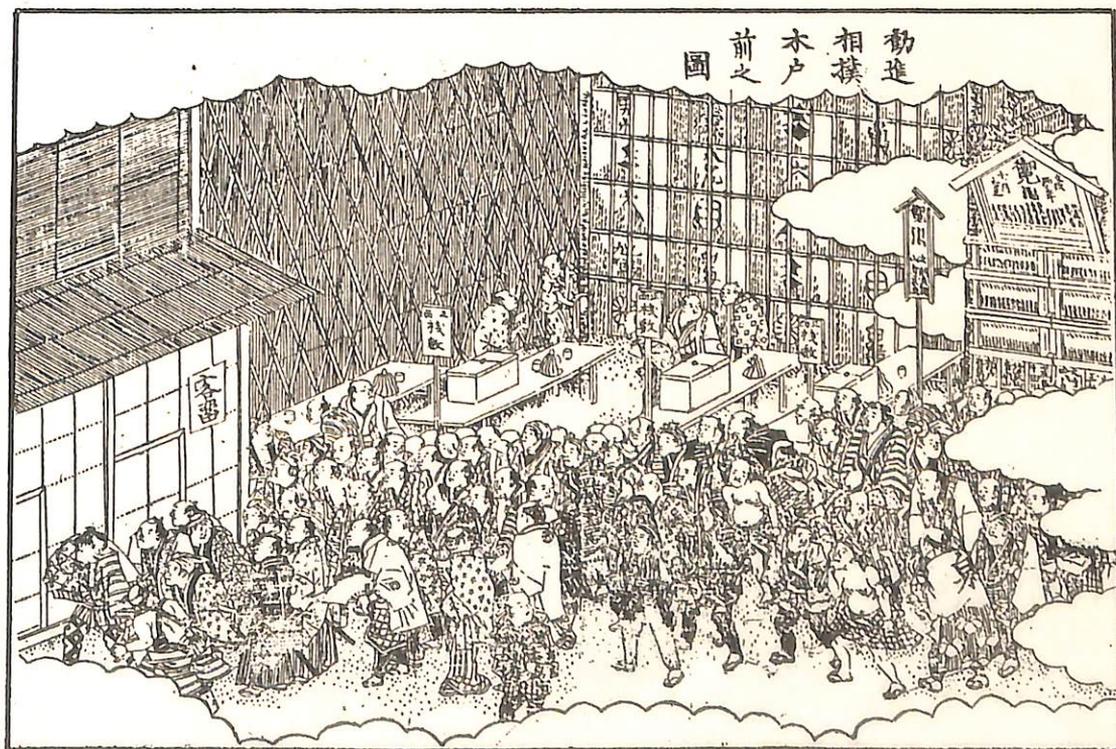
一、はじめに	2
二、国技館の変遷	3
三、新国技館案内	15
四、日本相撲史略年表	23
五、「相撲・両国・国技館」よもやまばなし	29
六、墨田区内の相撲部屋	36
七、墨田区内の相撲史跡めぐり	75
八、両国界限今昔	82



一、はじめに

かつて両国界限は、両国橋をはさんで、江戸第一の繁華な盛り場であった。食物や雑多なものをあきなう屋台店・水茶や・軽業・講釈・見世物などがぎっしり並び、宝暦十三年（一七六三）に刊行された平賀源内の「根南志具佐」にも、「誠にかかる繁栄は、江戸の外に有るべきにもあらず」とまでいわしめている。とりわけ回向院の全国有名寺院の出開帳は人々を集め、夏場の納涼・花火も人々を集めずにはおかなかつた。また、江戸勸進大相撲も、深川八幡社境内・浅草観音境内など、江戸市中場所を変えて興行されていたが、結局のところ江戸第一の人々の集まる、両国回向院境内で興行されることが多くなり、天保四年（一八三三）十月場所からは、定場所となつた。明和五年（一七六八）九月、初めて回向院境内で大相撲が興行されてから二百年余り、両国（地域）は相撲を育て、相撲はまた両国を育てて来た。そのきずなは長い歴史の中で、自然と生活の中にいきづいてきたといった方がよいのではなからうか。「相撲は両国でなければいけません」という会話を東銀座の元出羽海部屋の子が包丁を握る店で、聞くにつけても、両国に国技館が帰る喜びを隠し切れない。しかし、蔵前国技館の戦後三十五年の歴史にも、とりわけ栃若・柏嶋時代等々想い出も多いし、本当に有難とうの言葉をたむけたい。

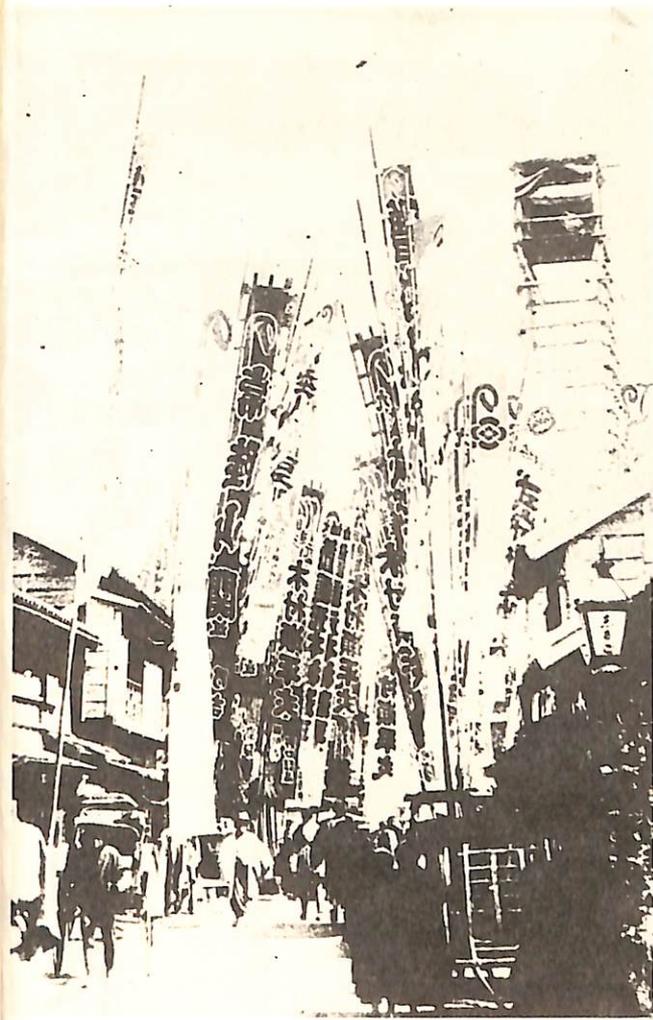
国技館が両国に帰って、多くの人達は、ここに生活していくことに誇りと、やすらぎのような嬉しさをさらに持ったのではなからうか。そこで、両国界限に生活するものの一員として、新国技館開館にあたり、ささやかなこの小冊子を記念としたい。



現存する最古の番付は宝暦三年（一七五三）のもので、晴天八日間深川八幡宮境内での興行で、この時代は主としてここで催されるが多かったが、他の場所としては浅草御蔵前八幡社境内、芝神明社、神田明神社境内などで行なわれていた。明和五年（一七六八）九月、初めて本所回向院境内で興行された。以後寛政年間まで、市ヶ谷八幡境内、芝西久保八幡社、市ヶ谷佐内坂上長竜寺、深川三十

三間堂、本所一ツ目八幡宮御旅所、茅場町薬師、深川元町神明宮、浅草観世音境内、麹町心法寺境内、蔵前大護院境内、芝青松寺、愛宕山円福寺、湯島天神社内、平河天神など江戸も広い範囲で興行されていた。回向院境内での相撲は明和五年以後、安永元（一七七二）、二・六年と続き、さらに天明元年（一七八一）から寛政・享和・文化年間を経て、文政十三年（一八三〇）天保元）までの五十年間に

●回向院前にはためく相撲のぼり：明治初期



●最初の国技館…建設中の鉄骨のみえる小泉町大通り(現京葉道路)明治41年頃

興行回数が多い場所になっていた。しかしまだ定場所ではなかった。天保四年（一八三三）十月場所から、定場所となり、毎年二回の興行が行なわれるようになった。明治四十二年（一九〇九）の常設館ができるまでの七十六年間、小屋掛けであるが本所回向院境内で相撲が行なわれたことになる。



●工事中の国技館…明治42年

江戸時代の相撲興行は春秋二回
おこなわれたが、その時期は一定
せず、春は二・三・四月の間、秋
は十・十一・十二月の間に行なわ
れ、秋の興行は冬場所と称されて
いた。



●開館記念にだされた錦絵(玉波)…明治42年

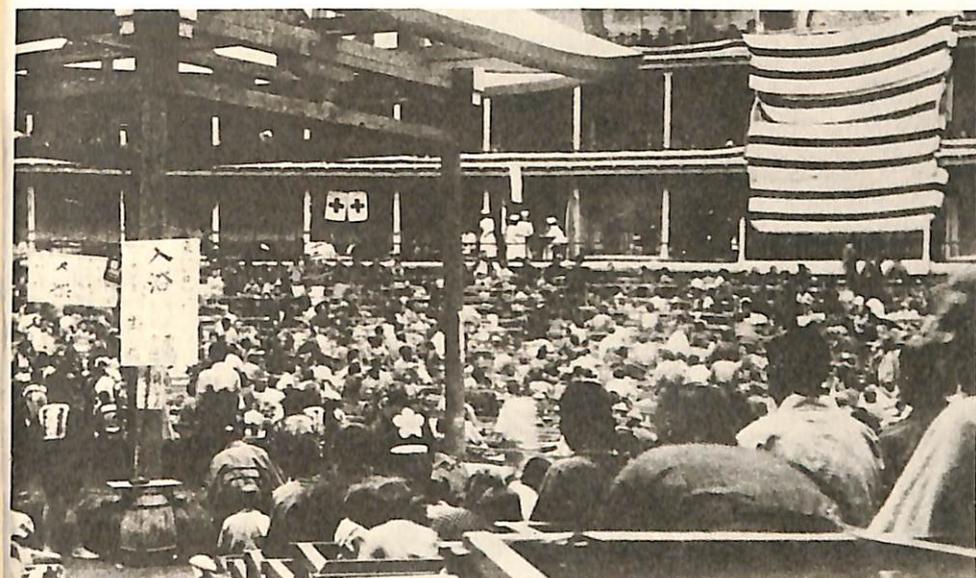
明治九年からは本場所を一月と
五月の春・夏二場所と定めている。
また、勧進相撲の一興行の日数は、
初め一定したものでなく、晴天八
日が多かったが、安永七年以降晴
天十日となり、これは大正十二年
(一九二二)の十一日間となるま
で続いた。文政十年(一八二七)
十一月の小屋掛けの記録では、間
口十五間、奥行十八間の規模で、
平土間より一段高くなった一階席

●開館まもない頃の国技館

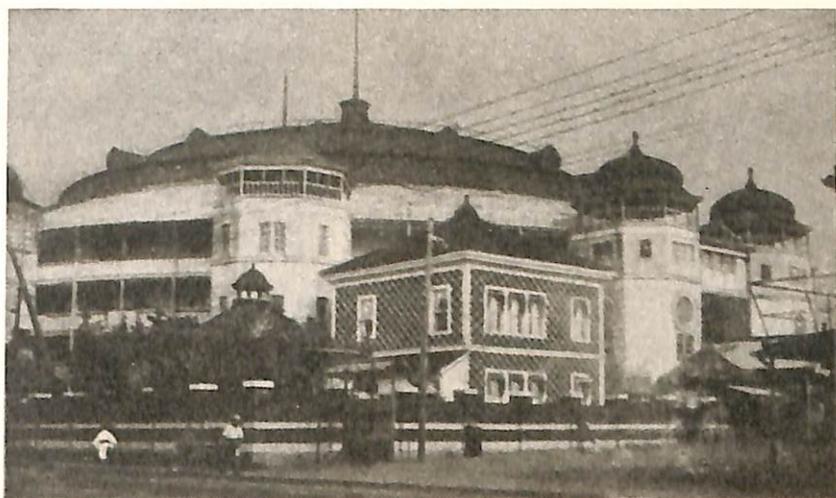


と二階席の棧敷が組まれていた。
後には間口十九間、奥行二十間、
収容人員五、〇〇〇人以上ともな
るような規模のものになった。も
ともと小屋掛けは、一時的なもの

で、江戸時代には將軍の通行がある時などは、取り払うようになっていた。また、雨天では興行することができず、晴天十日となっても、五月場所などは雨が降ったりして、のびのびの開催で期間



●明治43年の大水で避難場所となった国技館…明治43年8月



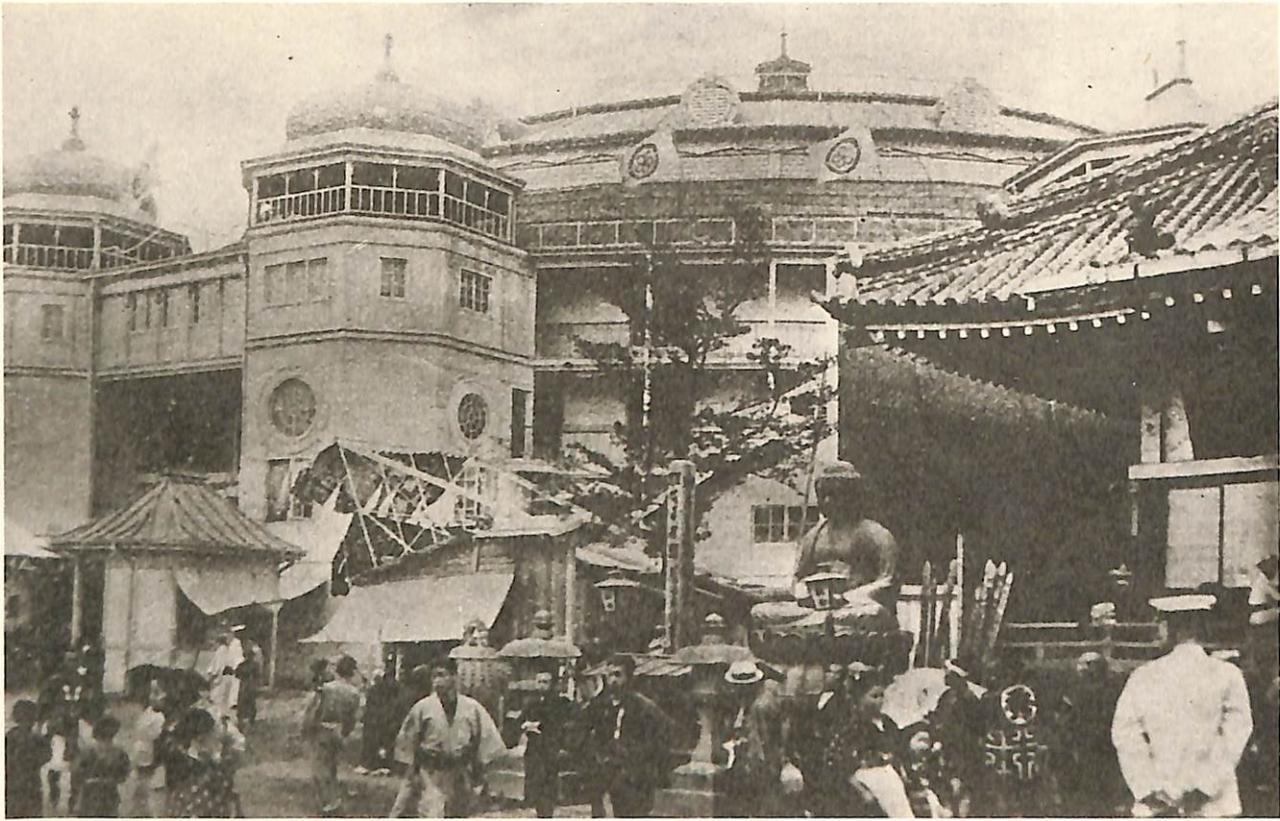
●全景もとのつた国技館…明治末期

が一月にも及ぶこともあった。明治維新を迎えると社会の混乱を反映して相撲界も苦境にたたされ、明治十年十一月九日付の「郵便報知新聞」には、「東京大相撲と称するものは、旧く明和年間より両国回向院境内に於て、春夏二

●東京名所となった国技館…明治末期



季の興行免許を得て連綿今日に至りしが、先頃御詮議の筋ありとて同寺境内の諸見せ物を始め相撲興行を差留められしが、他所に移転せば従来相撲を目的の商家難渋するものも少なからねば、引続き同所に於て興行いたし度と年寄惣代



●回向院本堂側からみた国技館…明治末期

●きれいどころも並びにぎわうマス席…明治末期



待乳山より出願せしに、当季興行
丈けはお聞届けになりしと云う」
の記事などもみえている。しかし、
十九年には、「角觥（すもう）興
行ハ両国回向院、其他ハ公使館及

ヒ学校病院ヲ距ル二町以外ノ他ニ
非レハ之ヲ許サス。二町以外ト雖
モ土地ノ状況ニ依リ或ハ之ヲ許サ
ス。角觥報知ノ太鼓及ヒ櫓ハ回向
院春秋二期ノ興行ニ限りテ之ヲ許

ス」(警視庁史稿)と、回向院境内の興行が全面的に許され、同十二年には東京大相撲協会の設立もみて、さらに明治中期以降多くの名力士に富まれたこともあって、また相撲界も活気を取りもどすことができた。

常設館建設の念願は、明治三十九年一月場所後に具体化され、同



●相撲場所以外の時は色々な興行がかかった…「菊花大会」

●大正6年の火災により再建中の国技館…大正7年



●両国界隈航空写真…大正11年



年三月の第二十二回帝国議会にも、「大相撲常設館国庫補助に関する建議案」なども提出されたりした。そして同年五月に起工式を行ない、三年後の明治四十二年五月に落成し、六月に開館式が挙行され、続いて本場所の興行が行なわれた。この常設館——両国国技館は辰

野金吾・葛西万司氏が設計・監督に当たったもので、総坪数約一、〇〇〇坪、穹窿円壱形(きゆうりゆううえんちゆうけい)と呼ばれる柱のない形式で、三十二個の弓状鉄骨が中央に集まるようになっていた。建物の内径は二〇〇尺、中央の高さ八〇尺であった。内部は四



●関東大震災の被害にあった国技館…大正12年9月

階まで観客席があり収容人員は一三、〇〇〇人であった。相撲興行のないときは、菊人形展や色々な博覧会が催されるのが常であった。しかし、国技館は完成後まもない大正六年十一月二十九日、催し物の開催中に失火し全館焼失してしまった。相撲興行はこの間九段の

●震災直後であろうか、両国橋から国技館を望む…大正12年9月



靖国神社境内の仮小屋で四場所を過しているが、さっそく再建にとりかかり、焼失前の国技館同様なI型とし、鉄骨の上をコンクリートで包み、坪数が幾分増した程度で、外見上は屋根の明通りの窓の部分と階段塔の屋根の形が少し変わっただけで復興、同九年一月に



●博覧会でにぎわう国技館、上図は「日光博覧会」…昭和10年代



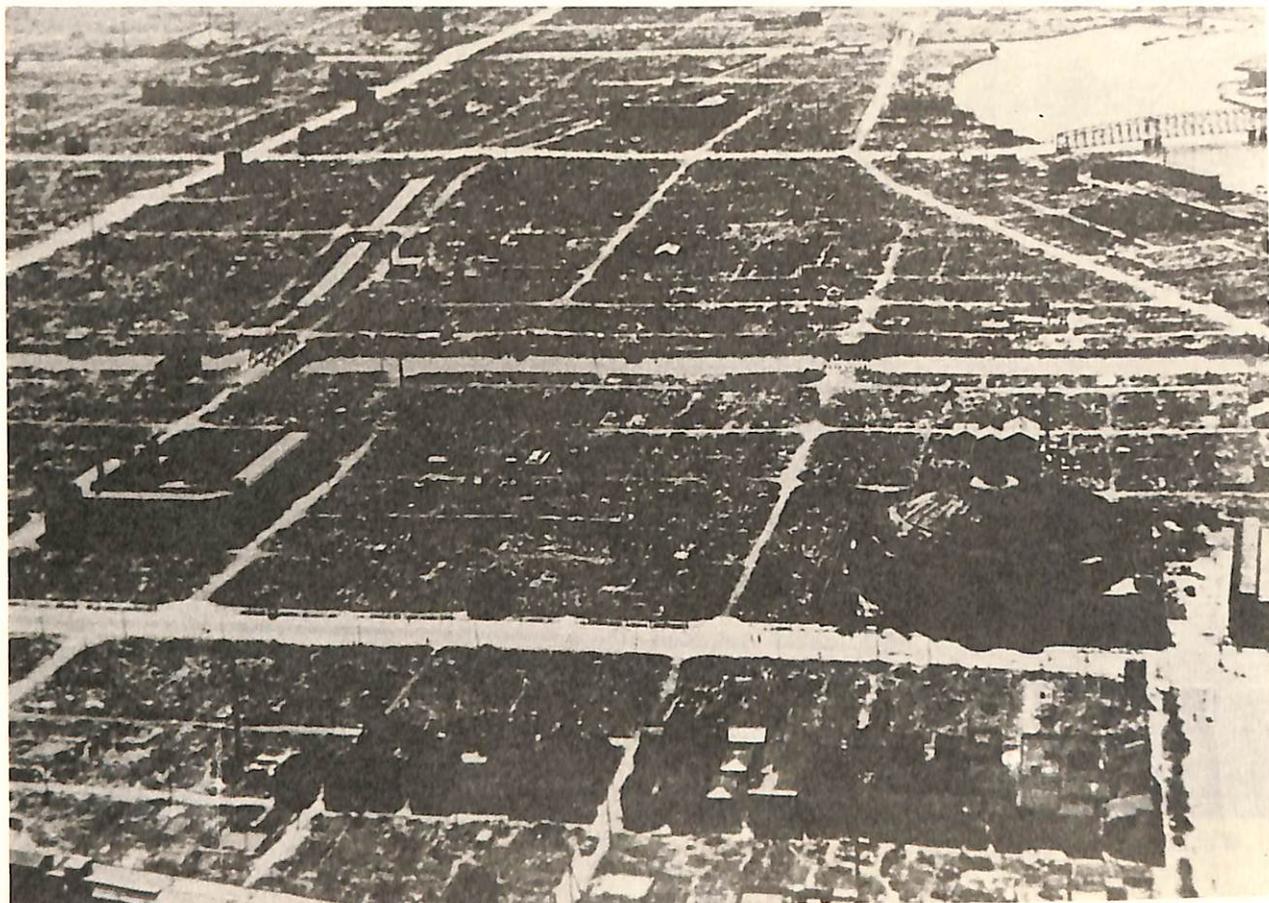
●イルミネーションのかがやく夜の国技館…昭和10年頃



は再建興行で幕開けをした。大正十二年九月一日の関東大震災では外型を残して再度焼失した。しかし、はやくも翌年夏場所では再興行を行なったものである。昭和二年一月場所で大日本相撲協会と合併し、大日本相撲協会が結

成されている。またこの時から本場所は年四回となり、一月と五月は東京で行ない、三月と十月は関西場所として大阪・京都・名古屋・広島・福岡で興行することになった。興行日数も昭和十二年五月から十三日間となり、さらに十四

年五月に十五日間の開催日数となつて今日に続いている。だが太平洋戦争の戦況の悪化にともない、昭和十九年一月の春場所を最後に、国技館は軍部に接収され、風船爆弾の風船作業工場となった。その間十九年の夏・秋場所は後楽園球



●昭和20年3月9日の大空襲で焼野原となった中に目立つ国技館…昭和20年3月

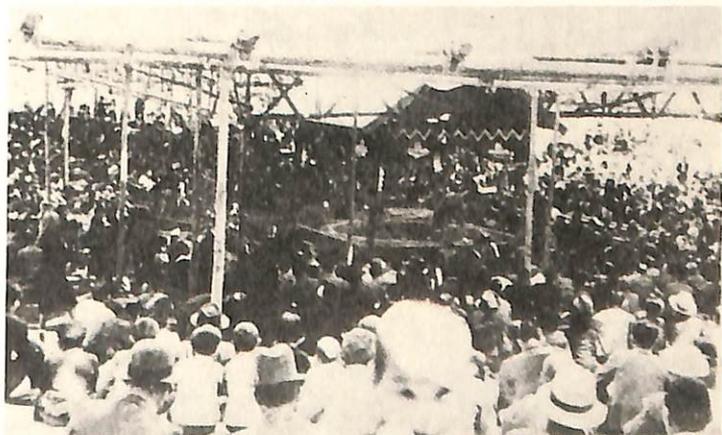
●戦災にあったままの国技館…昭和20年5月



場で十日間興行で行なわれたが、二十年三月九日夜半の東京大空襲によって、またまた国技館は焼失する羽目に遭った。



●米軍接收中の両国国技館、
「メモリアルホール」が目にしみる
…昭和25年

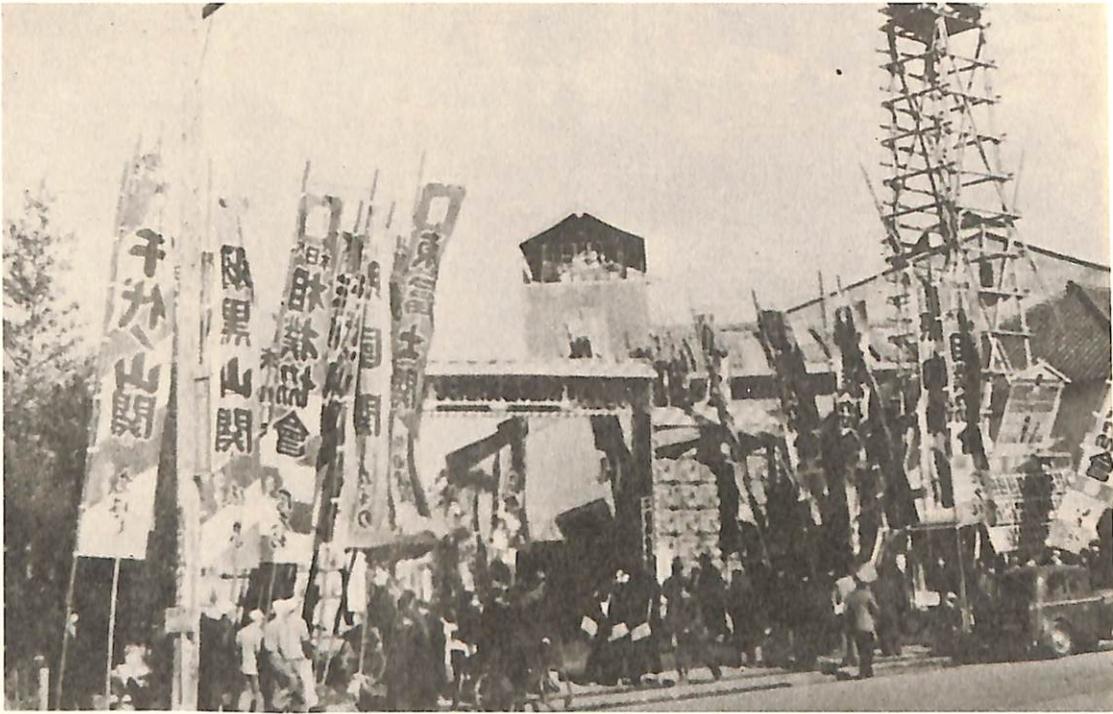


●明治神宮外苑相撲場での興行…昭和21年

昭和二十年八月の敗戦をむかえ
ると、その秋場所は焼けた国技館
で開催された。しかし、翌年の九
月、進駐軍の娯楽施設として接收
され「メモリアルホール」と改称
された。接收は昭和二十七年三月
まで続いた。大相撲興行は、明治
神宮外苑相撲場を主たる場所とし
ながらも、野天のジプシー興行と
いったものとなった。二十四年一
月になって、浜町仮設国技館がで
き、続く二十五年一月蔵前仮設国



●浜町仮設国技館…昭和24年春場所

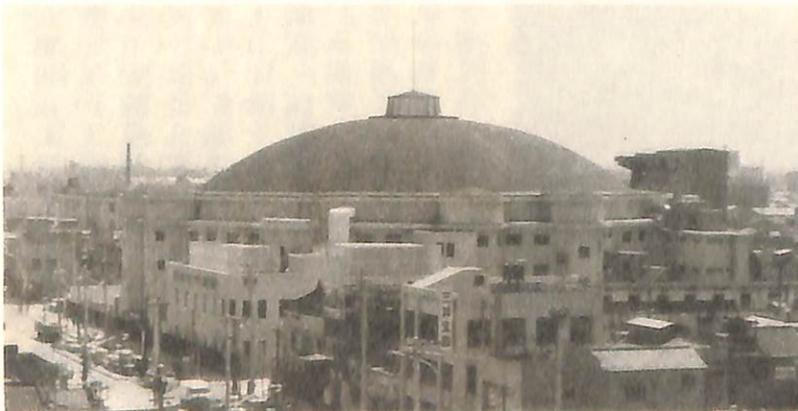


●外装もととのった蔵前国技館…昭和27年1月

●米軍接收解除後、ローラースケート場として再開した旧国技館…昭和32年



●日本大学の講堂として再整備された旧国技館…昭和42年



技館で開催することとなった。国技館が接收中であることと、返環後の施設の安全保安等の問題から、蔵前に新国技館を建設することとし、二十六年一月から工事を続けながら興行し、二十九年九月に蔵前国技館は落成開館式を迎えた。

一方、昭和二十七年に返還された旧国技館は、ローラースケート場などにも利用され、貸ホールと

してプロレスや拳闘の会場にもなっていたが、三十三年六月日本大学に譲渡され、日本大学講堂となった。しかし、やはり安全・保安上の問題もあって利用しにくくなり、やがてその利用生命を閉じることになった。そして昭和五十八年に解体され、現在は江戸の母た



●最後の場所開催中の蔵前国技館…昭和59年9月



●屋根の部分からはじまった解体工事中の旧国技館…昭和58年2月

●仮設駐車場となっている旧国技館跡…昭和59年12月



る川隅田川に近く、江戸一番の繁華街であった両国の地にふさわしい「江戸東京博物館」建設の候補地の一つとして、仮設駐車場となっている。他方蔵前国技館も老朽化しはじめたこともあり、伝統ある両国へ国技館が帰る話しが決まり、両国駅北隣の国鉄用地に、六十年初場所開場をめざし、昭和五十八年四月一日、新国技館建設工事が着工された。

三、新国技館あんない

●新国技館の工事が着工された：

昭和58年4月1日

新国技館建設工事

刃

施工 鹿島建設 株式会社

KAJIMA CORPORATION

建築計画のお知らせ	
建築物の名称	仮称：新国技館建設工事
所在地	東京都墨田区船場1-20-20
用途	興行場 敷地面積 18,290 m ²
建築面積	13,000 m ² 延べ面積 38,000 m ²
構造	SRC造 基礎工法 明地盤成坑
階数	地上 地下 高さ 39.6 m
着工予定	58年4月18日 完了予定 59年11月30日
建築主	新国技館建設委員会 電話 5611-2201
設計者	新国技館建設委員会 建築士事務所 電話 5641-1211
施工者	鹿島建設株式会社 電話 64-5411
積算設置年月日	57年 11月 6日
*この積算は、東京都中高層建築物の建築に際する事前の事前と 調整に関する条例(第5条第1項)の規定により設置したものです。 *上記建築計画についての説明の申出は下記へ御連絡下さい。 (連絡先) 建築部 申出係 電話 56-2041	

建築物の内容	柱宅	戸	柱宅以外
敷地面積	公団・緑地等 緑地 1569 m ²	公団空地 259 m ²	
柱宅	倉庫	防災水利 100TONK2-1	
その他	防災用倉庫 150 m ²		

●国鉄跡地の整地が始まった：昭和58年4月8日



両国橋にかかる、その突当りに、ひときは大きく円型の大屋根がみえた。旧両国国技館であった。そして、新国技館は、かつての国技館と対称に、総武線両国駅の北側に、屋上広場をもつ基壇と、隅を切った方形の力強い和風大屋根でお目みえした。大屋根の緑青が隅田川に映え、とりわけまばゆい。

蔵前国技館からは隅田川を渡って、南へ五百メートル足らず、両国駅北側の旧国鉄用地約一万八千平方メートルに建てられた。工事は昭和五十八年四月一日から、鹿島建設によって始められ(起工式は四月二十七日)、五十九年十一月三十日に完了し、相撲協会に引渡された。「相撲の新殿堂」は、地上三階地下二階、延べ三万五千七百平方メートル。蔵前国技館のざつと倍の広さである。最高高さ三十九・六メートル。しかし、場内の雰囲気は蔵前とほとんど変わらないし、収容人員も同じ一万一千人である。蔵前で別棟だった相撲博物館、相撲教習所、相撲サービス会社と関連施設など、すべて緑の大屋根の下に収容したほか、新たに大広間や百六十畳敷きの日本間



●起工式 春日野理事長の鍬入之儀：

昭和58年4月27日

●起工式 横綱地鎮之儀：北の湖土俵入



なども設けたからである。さらに伝統を内部にも生かし、館内で見上げる大屋根を支える千七百トンの鉄骨は、むき出しになって、旧両国国技館の大鉄傘にならっている。一方土台部分は、二百六十七本の長い脚に支えられている。長い脚は、地盤の固い地下三十八メートルまで打ち込んだ鉄筋コンクリートのくいである。また、新しい土俵づくりは九月二十五日に行われたが、一見したところ蔵前のものとまったく変わらないが、実は土俵は舞台の上にあるようなもので、舞台のせりと同じ機構で、土俵は電動式で奈落に沈む。そのあと横からふたが滑ってきて、土俵の上をふさぐ。ます席のうち、土俵に近い七列目までがやはり電動式に折り畳まれ、後方の固定ます席の下に収納される。場内の中央に、四十メートル四方の平らな空間が出現する。こうすればプロレス、ボクシングなどのスポーツにも大いに利用できる。新国技館館での大相撲は年間三場所、四十五日間だけなのである。ケヤキとヒノキでつくられ、随所に純金を

● 起工式
山崎墨田区長の玉串奉奠



● 基礎工事と雨水貯蔵タンク工事も進んだ
：昭和58年7月30日

散りばめた神明造りの吊り屋根も、昇降式である。また、新国技館は防災館仕立でもあり、いざという時の避難場所ともなっている。館内のあちこちに計百六十平方メートルの備蓄倉庫があり、約八千三百平方メートルの大屋根に降る雨は、床下の千トンの雨水槽に貯溜して、館内の冷房用水、下水に使用し、同時に防災用水としても利用できるようになっていいる。また、完べきな空調、自家発電、防災設備など最新技術をぞんぶんに駆使した、現代建築の典型である。

昭和五十八年四月二十七日

「起工式」

昭和五十六年八月二十五日

「立柱式」

昭和五十九年四月二十七日

「上棟式」

昭和五十九年十月四日

「定礎式」

昭和五十九年十一月三十日

「引渡式」

昭和六十年一月九日

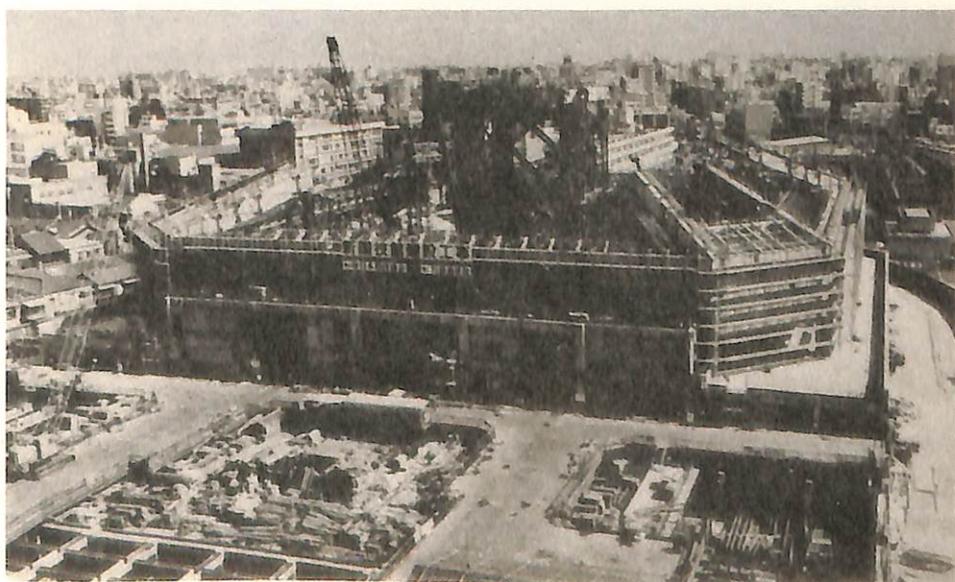
「落成式」



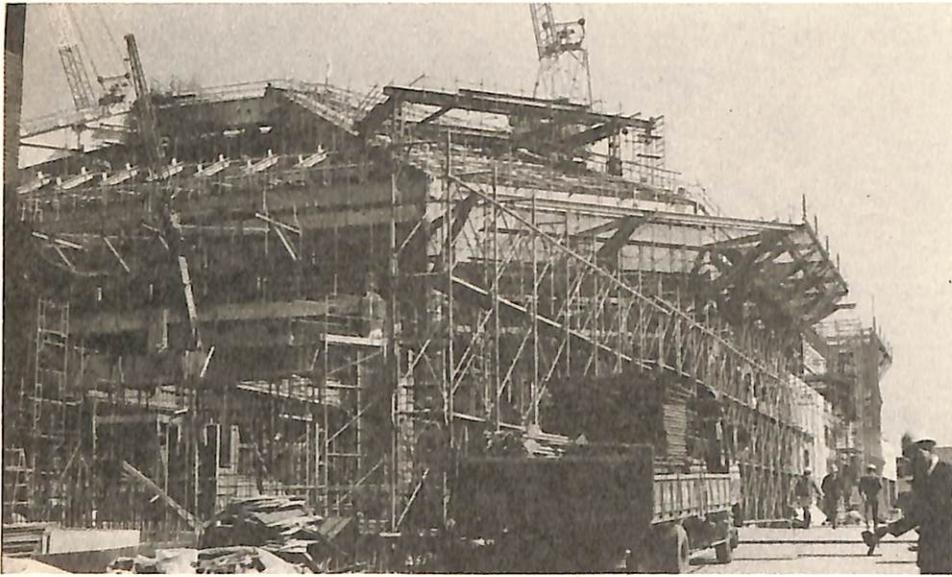
●内部の観客席も姿をみせてきた：
昭和58年10月14日



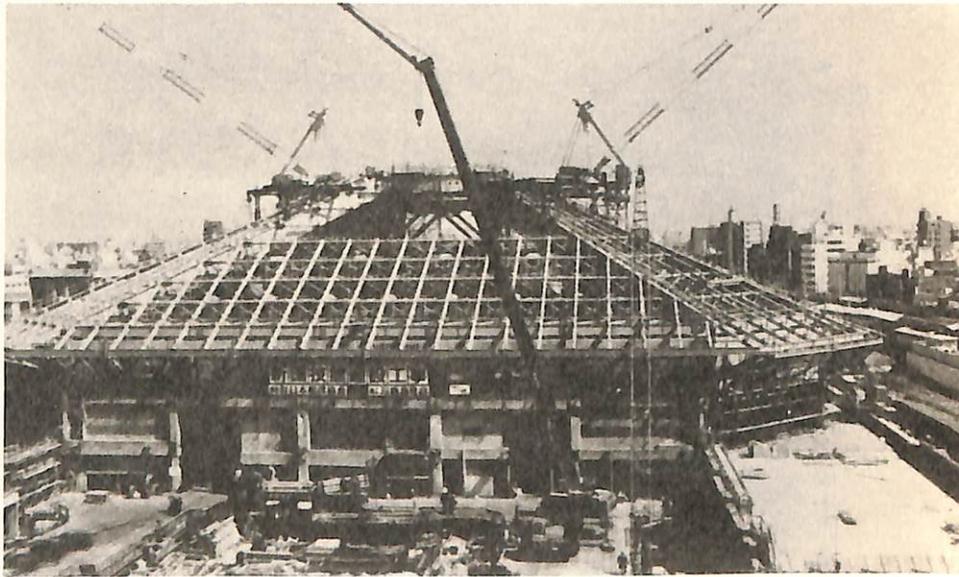
●館内と外廻りの進行にともない大鉄傘の
屋根工事のための檣が組み立てられた：
昭和59年1月6日



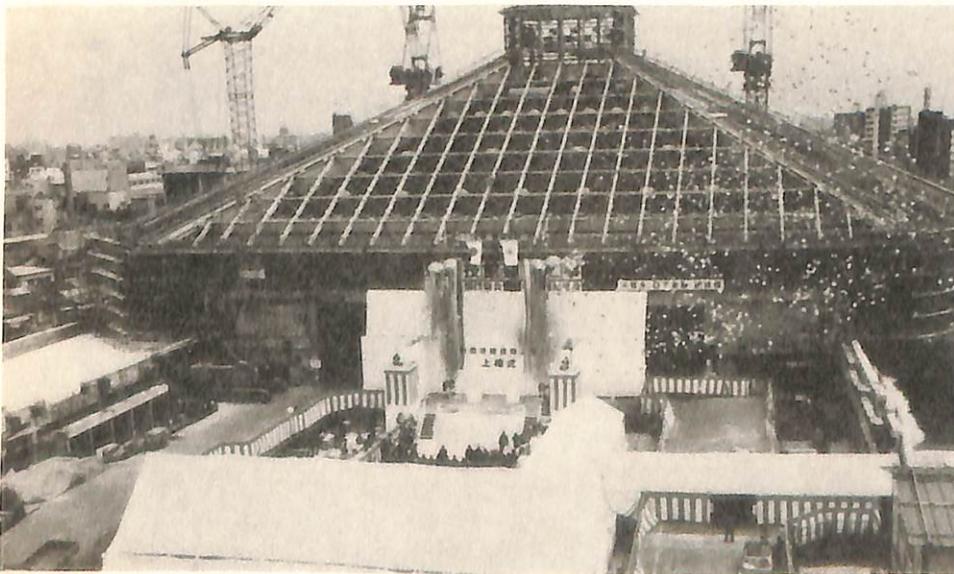
●屋根を支える大鉄傘はどんどん組み立て
られていく：昭和59年2月8日



● 外部の足場が組みあひさしも付けられた
 ……昭和59年2月末



● いそがしくクレーンがいきかう…
 昭和59年3月22日



● 上棟式 起工式から約一年、最後の鉄骨
 にビヨウが打たれ、最終梁が吊りあげら
 れた……昭和59年4月27日



●屋根に断熱材も貼られ、非常時に開いて換気孔にもなる、頭冠(あたまかざり)も進行している：昭和59年6月6日

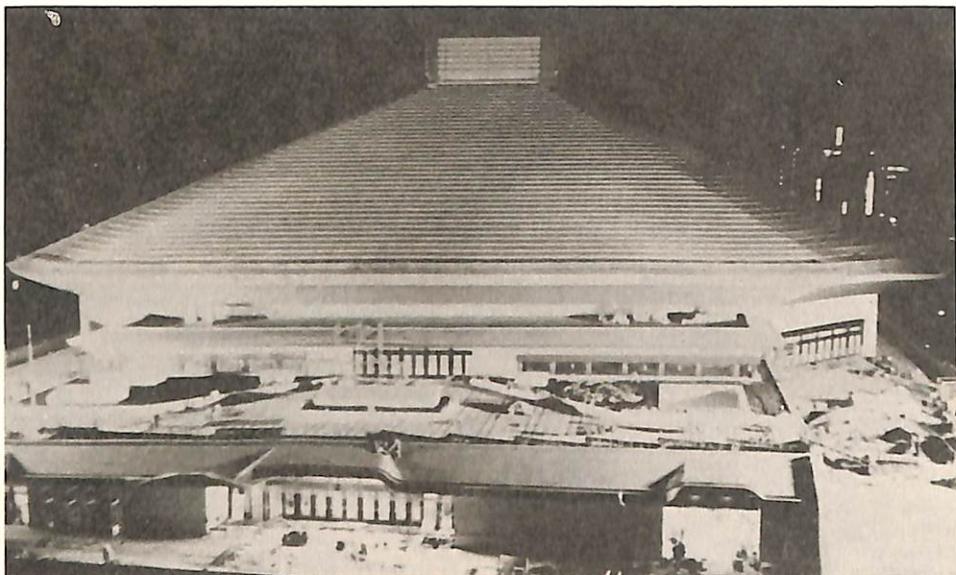


●屋根の銅板も貼れ、玄関入口の姿も形を成してきた：昭和59年8月31日



●江戸川区に移転し、整地中の江東青果市場跡から国技館を望む：昭和59年9月1日

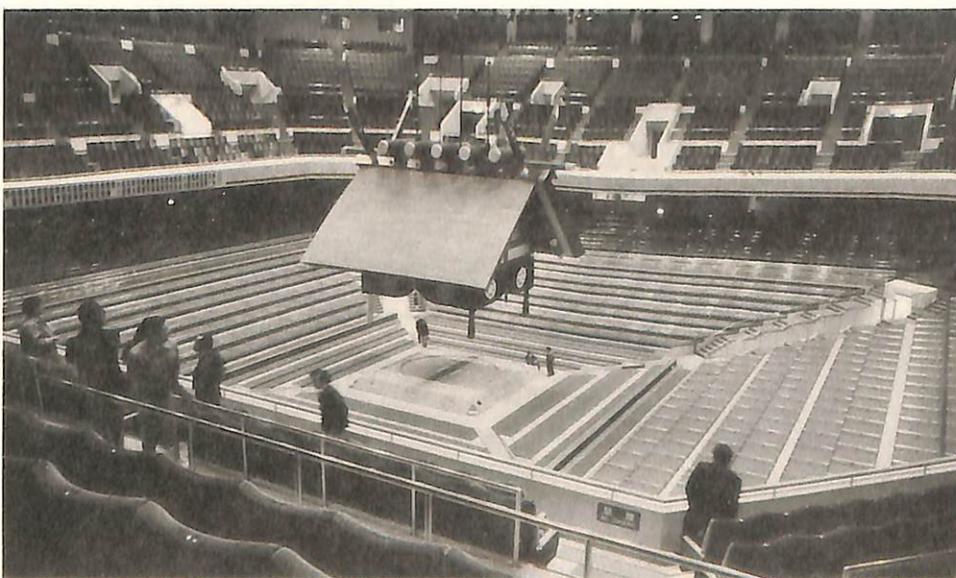
●外装工事もほとんど完了し、電気がともった：昭和59年9月17日



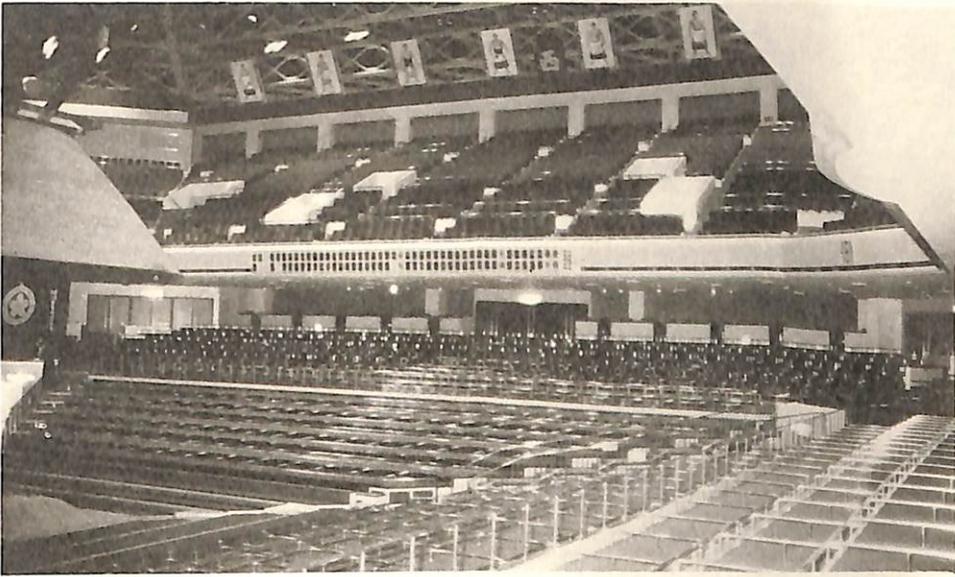
●外階段・屋上広場・植込みと工事も最終に近づいた：昭和59年10月



●二階席から土俵を望む、土俵も神明造りの吊り屋根も昇降式である：昭和59年12月7日



●マス席から優勝者の額のかかる大鉄傘を望む：昭和59年12月7日



●玄関内より門を通して外を望む：

昭和59年12月7日



●屋上広場をゆったりととり、隅切りの方形の屋根もすつきりと、新国技館は完了し、相撲協会へ引渡された：

昭和59年10月30日



四、日本相撲史

略年表

奈良・平安時代

皇極天皇元年（六四二）七月二二日 百濟（くだら・古代朝鮮国家）の使者饗応のため建児（こんでい・兵士）を招集して相撲をとらせる（日本書紀） 史実における相撲記事のはじめ。

養老三（七一七）七月 はじめて抜出の司（ぬきでのつかさ・相撲司）をおく（続日本紀） 相撲儀式制度のはじめ。

神亀三（七二六）前年諸国旱害のため、聖武天皇は、伊勢大廟をはじめ二十一社に勅使を派遣し、このとし豊作により、諸社神前において相撲を奉納する。 神事相撲記録のはじめ。

同五年四月 聖武天皇は諸国の郡司に対して、相撲人を貢進する旨勅令される（続日本紀）。

天平七（七三四）七月七日 聖武天皇相撲戯を御覧になる（続日本紀） 奈良朝末期のこの頃より、相撲節会（すもうせちえ）儀式の端緒が開かれた。天覧相撲の最初の記録。

延暦一二年（七九三）七月七日 桓武天皇相撲天覧。平安朝の宮廷における相撲天覧の催しは、この頃から、毎年恒例となる。

弘仁元年（八一〇）嵯峨天皇相撲天覧 弘仁年間、内裏式のなかに相撲節の儀式制度定める。例年の節会相撲ますます盛大となる。相撲節の言葉はこの頃より使用される。

天長一〇年（八三三）五月 仁明天皇は「相撲節はただ単に娛樂遊戯のためではなく、武力を簡練するのが、中心の目的である」と勅令を出し、諸国に腕力のすぐれた相撲人をさがし求めた。

貞観一一年（八六九）四月 貞観格式（きやくしき）において、相撲節儀を制定する。

延喜五年（九〇五）五月 この月に延喜式を頒布せ、一二月に延喜格を施行。射礼（じやらい）、騎射（うまゆみ）、相撲を「三度節」と定め、宮中の重要な節日となり相撲節は隆盛をきわめる。

保元三年（一一五八）六月二七日 後白河天皇相撲天覧 三〇余年ぶりに相撲節復活するが、再び保元の乱により翌年から停止。

承安四年（一一七四）七月二七日 高倉天皇相撲天覧 一五年ぶりに相撲節が行われたが、源平合戦がおこり、三〇〇余年におよんだ相撲節の典儀はまったく廃絶する。



大日本相撲史
野見宿禰神像
上原 蘇門 蘇門 蘇門

武家時代（鎌倉・室町・織豊）

安元二年（一一七六）一二月 伊豆柏崎において、河津三郎と俣野五郎の相撲（曾我物語）。

文治五年（一一八九）四月三日 源頼朝鎌倉八幡宮において將軍上覧相撲（吾妻鑑）。

正嘉元年（一二五七）一〇月一五日 宗尊親王（將軍家）、北条時頼、上覧相撲（吾妻鑑） 此の上覧相撲をさいごに、鎌倉末期より約三〇〇年間相撲沈滞期に入り、その間地方相撲の分布的育成時代（一三三八〜一五七三）となる。

足利時代（一三九〇〜一五七三） 將軍の上覧相撲なく、相撲を主題にした能狂言が民間に行われる。

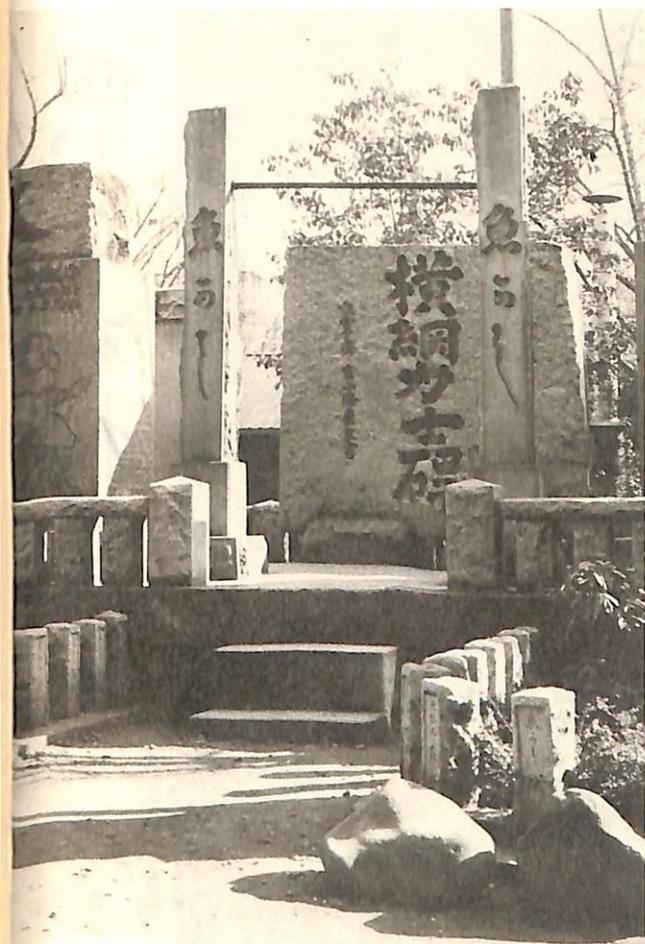
元亀元年（一五七〇）三月三日 織田信長、常楽寺において相撲上覧（信長公記）。

天正六年（一五七八）二月二九日 信長安土の城において上覧相撲。

文祿五年（慶長元年・一五九六） 関西の職業相撲団一〇人ばかり九州筑後に巡業（義残後覚） 足利末期より職業相撲発生する。

江戸時代

慶長一〇年（一六〇六）七月二三日 山城醍醐で勸進相撲（義演准后日記）
 正保二年（一六四五）六月 京都糺森（ただすのもり）において、公許勸進相撲（古今相撲大全）
 慶安元年（一六四八） 勸進相撲興行に際し、浪人・俠客闘争のため、辻相撲・勸進相撲の禁止令発せられる。
 貞享元年（一六八四） 江戸深川八幡境内において雷権太夫勸進相撲を興行する。
 同一年、宝永四年（一七〇七）、享保四年（一七一九）、しばしば辻相撲の禁令が出る。
 元禄一二年（一六九九） 五月 京都岡崎天王社において勸進相撲興行（大江俊光記）
 同一年四月 大阪堀江勸進相撲公許興行。
 享保九年（一七二九）六月 深川八幡社地興行。及び同一年一〇月新材木町杉森稲荷社興行が、記録に残る。
 宝暦七年（一七五七）一〇月 江戸相撲どくとくの縦番付はじめて発行。大阪・京都は横番付。このころより江戸相撲の制度組織がととのいはじめる。これ以前は関西相撲が中心。



同一年一〇月 この場所の番付から、勸進相撲を勸進大相撲と記す。星取表はこの場所より現存す。
 明和五年（一七六八） 九月 初めて本所回向院境内で、勸進大相撲興行が行われた。
 寛政元年（一七八九） 一月 谷風棍之助、小野川喜三郎へ吉田司家より横綱免許。現在の横綱はこのときより始まる。
 同三年四月 この春場所より幕内力士は千秋楽に登場せず。幕下力士以下のみ取組みが常例となり、明治四二年に及ぶ。
 同六月 江戸城吹上で、一代將軍徳川家齊上覧相撲。
 天保四年（一八三三） 一〇月 この場所より本所回向院境内が定場所になる。
 同四年二月 嘉永事件。力士一〇〇余名回向院念仏堂に籠城、取組日数の不公平を抗議。
 同七年二月 ベルリの黒船来航、横浜において力士一同米俵を運び、怪力を誇示する。

明和五年（一七六八）
 九月五日
 於本所回向院境内
 勸進大相撲興行
 勸進元 諸嶋八百八
 差添 伊勢海五木夫

明治時代

慶応四年（明治元年・一八六八）四月一七日大阪市座摩神社において、明治天皇京都力士の相撲を天覧。

明治二年（一八六九）三月 大阪相撲は江戸時代よりの東西二枚横番付を、初めて縦一枚番付に改めて発行。

同六月 藩籍奉還により、大名抱え力士は召抱えを解かれる。

四年三月 京都において初の三都（東京・大阪・京都）合併相撲を興行。

六年一月 高砂浦五郎は相撲改革を迫り、相撲会所より除名され番付面より名を削られる。高砂は改正組を組織し関西にいく。

一一年二月 角力・行司取締規則が、警視庁より発布される。力士・行司・年寄は営業鑑札をうける。

同五月 高砂の改正組復期して合併、別に小番付発行。

一九年一月 申合規則を改正、筆頭（ふでがしら）を取締、筆脇を副取締に、組頭は組長、組下は歩持年寄に改称。

二二年一月 申合規則を改正。江戸時代よりの相撲会所を東京大角力協会と改称、年寄名儀八八名に限定する。

同五月 番付の十両（十枚目）を、一名ずつ前頭と頭書し、また肉太に書き幕下と十両関取格を判然と区別する。

二三年五月 初代西ノ海、初めて番付に横綱の文字を冠す。

二九年一月 中村楼事件。西方力士大戸平はじめ三二名、協会（高砂）に対し報告文を送り改革を迫る。

同二月 協会申合規則、中村楼事件によって改正される。

四〇年五月 大角力組合新規約一八条を定め、興行収支の合理化をはかる。

四二年二月 大角力協会規約追加。横綱大関の称号は従来最高級力士と称したが、今後は最高位力士と改称、地位であることを成文化す。

同六月 国技館開館。江戸時代よりの晴天一〇日間興行が晴雨にかかわらず一〇日間興行と改め、幕内力士の千秋楽休場を、一〇日間皆勤出場に改正する。個人優勝制度と優勝額の掲揚を定める。東西對抗の優勝制度を定め、優勝旗をつくる。投げ祝儀を禁ず。関取の場所入りには、羽織袴を着用することになる。

四三年一月 大阪力士大木戸の横綱問題で東京・大阪両協会絶交す。

同五月 行司装束を袴姿から烏帽子直垂に改める。

同七月 朝鮮・満州へ初の相撲巡業。

四四年一月 新橋クラブ事件。場所前に給金値上げ問題で幕内力士新橋クラブに籠城。和解なつて二月四日初日開幕。

四五年一月 大阪大角力協会と和解なる。

大正時代

二年（一九一三）三月 東京・大阪両協会和解の東西合併相撲を開催す。

六年一月 国技館失火により全焼す。

七年一月 靖国神社境内にて春場所興行（以後三場所）。

八年三月 再建工事中の国技館大鉄傘、旋風のため崩壊す。

九年一月 再建なつた国技館の開館式挙行。

一〇年五月 国技館は資本金六〇万円の株式会社組織となる。

一一年一月 株式組織を解散、制度を旧に復す。

一二年一月 三河島紛擾事件。場所前の力士会で養老金の増額などを決議し、協会に要求し三河島に籠城す。

同五月 三河島事件の養老金捻出のため、この場所より一日間興行とす。引分け、預りの取組みは、千秋楽に取直す内規を設ける。

同九月 関東大震災で国技館炎上、全焼す。

一三年一月 春場所を一〇日間、名古屋市に移して興行。

一四年四月 赤坂の東宮御所において、摂政宮殿下（今上天皇）の誕生日を祝賀し台覧相撲を行う。その際の御下賜金により、後に摂政杯（優勝賜杯）を作成する。

長別 梅吉 勝郎

筑前国の國崎の生まれ
て大坂湊田長次東門の人
ありあふあふ（登りぬ人玉
垣家）助門人となり
あふあふとあふあふあり
昭治十七年横濱発行し得る





〈両国〉 〈玉錦〉

同五月 取組表に行司の名が出る。勝負付にきまり技をいれる。
優勝旗の返還式を行なうことになる。
同九月三日 東京大角力協会より財団法人設立を申請。

東京・大阪大角力協会合併の準備として、両協会の合同番付編成のため、資格審査の第一回東西連盟相撲を京都にて開催。引分け、預りは廃止とし、取直し制度にする。
同二月 財団法人設立を文部大臣より認可され、財団法人大日本相撲協会誕生す(一月二二日)。
同五月 従来は東京・大阪両協会は解散し、大日本相撲協会結成の調印が大阪大角力協会取締役小野川宅で行なわれた。
同一月 従来は相手力士の休場は、双方とも休みのところ、以後休場力士は不戦敗、出場力士は不戦勝とす。(幕内力士のみ内規)

昭和時代

二年(一九二七)一月 東西両協会は合併大日本相撲協会となる。
春、夏の東京場所のほか三月、一〇月の二回関西場所を設け、年四回本場所を興行する。
年寄定員八八名のところ大阪方一七名(うち二名は一元年寄)を加えて、一〇三名に増員する。
同三月 大阪で晴天一日間の本場所興行。番付は発表せず一月東京場所のをそのまま使用。なお成績も五月の東京場所番付には影響しないことになっていた。
同一月 京都で晴天一日間の本場所興行。
三年一月 仕切時間を幕内一〇分、十両七分、幕下五分と制限。仕切線の設定。ラジオの実況中継放送開始。十両力士は、従来は六日間出場者及び十両上位例外者とともに一日間の連日出場となる。

同三月 名古屋において晴天一日間の本場所興行。
不戦勝制度の確立。大正十五年一〇月の連盟相撲における内規を、幕内・十両・幕下の全力士に適用。不戦勝力士も土俵上で勝名乗りをうけることになった。
同五月 四本柱を背に土俵上の検査役、当場所より土俵下におり、取締一名が検査長の格で加わり五名となる。

同一月 福岡仮設国技館にて一日間本場所。
同五月 横綱宮城山引退し、明治三二年五月以来はじめて番付面に横綱の名が消える(以後七年十月まで四場所)。
四月の天覧相撲を機に、土俵の直径一三尺を一五尺に、二重土俵を一重に改め、土俵の屋根を神明造りにする。
七年一月 春秋園事件。相撲道改革を唱え西方出羽海一門の力士は新興力士団と称し大井町春秋園に籠城。これに呼応して東力士の一部も革新力士団をつくり、脱退す。そのため一月場所は興行不可能となる。

同二月 残留力士により改正番付を作る。東西制を廃止し、部屋別総当り制で八日間興行す。
八年一月 二枚番付発表。脱退力士の大半が帰参したため、別番付を製作し別格で出場する。
同二月 脱退組は大阪に関西相撲協会を結成。これを機に東京協会は関西本場所を廃し、春夏二回の東京本場所のみにもどる。
二年五月 一三日間興行になる。
同二月 関西相撲協会解散す。

同四月 一五日間興行になる。協会映画部を設立。
同五月 東西制復活。優勝旗手は関脇以下の最優秀力士があったる。
一六年五月 横綱一代年寄制決定。
一七年一月 仕切時間短縮。幕内七分、十両五分、幕下三分となる。
一八年二月 国技館、軍部に接収される。

同五月 後楽園球場で七日より晴天一〇日間の本場所興行。
同一月 空襲激化のため、二〇年春場所をくり上げて後楽園球場で晴天一〇日の興行を行う。
同三月 空襲のため国技館被災。各相撲部屋焼失する。
同五月 無料公開で明治神宮にて興行のはずのところ、初日に大空襲あり中止。

同六月 被災の国技館において非公開にて七日間本場所開催。
同一月 被災破損の国技館で戦後初の晴天一〇日間本場所興行。土俵を一六尺に拡大(力士会の意見により当場所一箇所限りで廃止)。
仕切時間の短縮。幕内五分、十両四分、幕下以下三分。
同二月 占領軍により改修されたメモリアル・ホール(国技館)において、十三日間の秋場所を興行す。相撲くじ発売。大蔵省・勸銀・相撲協会が協力、横綱・大関取組を中入前と結びにわけける(当場所のみで廃止)。

二年六月 明治神宮にて晴天一〇日間夏場所興行。
同一月 明治神宮外苑で晴天一日間の秋場所を興行。部屋別総当り制となる。殊勲賞、敢闘賞、技能賞の三賞を設定す。
同七月 協会仮事務所は墨田区千歳町に移る。

同一年一月 大阪假設国技館において、戦後初の本場所一日間興行。
 同四月一月 浜町假設国技館で一日三日間興行。
 同五月 浜町假設国技館で一日五日間夏場所興行。呼出し、世話人の名が初めて番付にのる。
 同五月一月 蔵前假設国技館にて一日五日間興行。幕下以下の同点優勝決定戦を廃止、上位優勝となる。
 同五月 横綱審議委員会設置。委員長酒井忠正氏。
 同九月 仕切時間短縮。幕内四分、十兩三分、幕下二分
 同六月一月 新たに副立行司をもうけ、紫白房の軍配を使用する。場所中の一四日目に吉田司家代表者と協議の結果、長年に亘る司家の権限を改革す。
 同五月 前場所優勝の照国より優勝額復活し戦後初の掲額となる。
 同五月 年寄根岸家、廃家となる。
 同六月 高砂は八方山、大ノ海、藤田山の三名と渡米す。
 同八月 秀の山一行ブラジル邦人相撲連盟の招きで渡伯。
 同七月一月 力士職の復活、明治四十二年一月の回向院以来四三年ぶり。千秋楽のみ行っていた弓取式は連日行なうことになる。
 同四月 接取中のメモリアル・ホール解除される。
 同九月 四本柱の撤廃。代りに吊屋根に四色の房を下げる。
 同八月一月 初・春・夏・秋の四場所となる。春(三月)は大阪。
 同五月 テレビ中継放送開始。
 同九月 蔵前国技館開館式挙行。相撲博物館開館す。館長酒井忠正氏。
 三〇年六月 国技館内に相撲道場を開く。
 三一年一月 二一年秋以来中絶していた前相撲制度を六日目より復活。それまでは番付外としている。
 三二年一月 一月に九州本場所を設け、年五場所制とする。本場所呼称は各月名を冠し、正式には一月場所等の呼称を用いる。
 同三月 幕下以下の同点決勝戦制度復活す。
 同五月 新弟子検査規定改正。二〇歳以下身長五尺七寸、体重二〇貫、二一歳以上身長五尺八寸、体重二一貫となる。力士及び年寄の給与改正、月給制度となる。力士整理案実施。幕下まで二〇場所以上の者は廃業のこと。取締の検査長制度を廃し、幕内検査役を五名とする。
 同九月 相撲茶屋名を廃止、一号より二〇号までの番号になり、相撲サービズ株式会社となる。二階東西席を全部椅子にする。一協会運営審議会設置。会長菅礼助氏。
 同四月 協会運営審議会設置。養成期間六ヵ月間。
 同一年一月 相撲教習所を設置。養成期間六ヵ月間。
 同一年一月 新弟子検査規定改正。二〇歳以下は五尺六寸五分、一九貫、二一歳以上は五尺七寸五分、二〇貫と引き上げる。初土俵より二五場所を経て幕下になれない力士は整理の対象であったが、明年より五年三〇場所とする。
 三三年一月 七月に名古屋場所を設け、年六場所制となる。財団法人日本相撲協会と改称し、大日本の(大)をとる。行司部屋独立。同六月 両国の旧国技館を日本大学に譲渡。
 同四月 行司の年寄襲名制度を廃止。
 三四年一月 木村庄之助・式守伊之助両家を年寄名より除く。
 同九月 横綱一代年寄制廃止。ただし引退後五年間は年寄株なしでも年寄として役員待遇をうけることができる。

同一年一月 新弟子検査基準改正。年令にかかわらず、身長一・七三メートル、体重七五キロとする。
 三五月一月 行司定年制実施、十兩格以上二五五名を一九名に減員。副立行司の名を廃止。立行司二名、三役格三名、幕内格七名、十兩格七名とする。三役格にぞうりを許可の特例もつける。呼出し、世話人の名が番付面より消える。
 同六月 幕下以下の取組みは従来の八日制を改め七日制とする。
 三六年一月 年寄、若者頭、世話人、呼出し、床山の定年制実施。
 同五月 控え力士座布団は、各個人用のをやめる。
 三七年六月 高砂団長、大鷲、柏戸一行三六名ハワイ巡業。
 四〇年一月 部屋別総当制実施(一門系統別廃止)。
 三三年より検査役の物言い物議に使用のマイクをやめ、正面検査役からその経過を、発表係を通じて説明することになる。
 同七月 出羽海団長は、大鷲、佐田の山、柏戸、栃ノ海の四横綱三六名から一行四八名を引率してソ連モスクワ、ハバロフスクにて興行す。
 四二年五月 枚数削減を実施。幕内は六人減って三四人、十枚目は十人減って二六人の定員とす。
 四三年一月 総理大臣賞新設幕内優勝力士におくる。
 同二月 理事、監事は立候補制とし連記制を単記制に変更す。取締制度を廃す。勝負検査役の名称を審判委員と改む。新体制により指導普及部、教習部、審判部、地方場所部、巡業部、事業部の職務分担をきめる。
 四三年一月 時津風理事長死去、国技館にて協会葬。
 同四月 新理事長に武蔵川就任する。
 同二月 横綱審議会委員長に舟橋聖一氏就任する。
 同四月 相撲博物館館長に石井鶴三氏就任する。

《巴湯》

《男女ノ川》



同五月 勝負判定についてVTRを参考資料として使用する。
 新弟子検査規定改正。満十八歳までのものは身長一七メートル、
 体重七〇キロ以上。
 同七月 大関は連続二場所負け越しで関脇に降下する。なお、内規
 として翌場所三勝以上した場合は大関に復帰できると改正する。
 同八月 大鵬の三〇回優勝の功績に対し、大鵬の一代年寄名跡を認
 め、表彰する。
 四五年六月 控え力士の場所座布団復活する（幕内のみ）。
 同六月三月 協会運営審議会会長に金子鋭氏就任する。
 同五月 取組編成要領を決定し、幕内下位でも大きく勝ち越した力
 士を横綱大関と取り組ませることができるとした。
 幕内人数は従来の二十四名以内を二十八名以内と改正する（十
 枚目は従来通り二十六名以内）。十枚目の昇進発表は番付編成会
 議で決定した当日とする。
 四八年四月 武蔵川理事長を団長とする幕内十枚目力士全員日中国
 交正常化を記念して中国を訪問。北京、上海において相撲公演。
 同五月 行司部屋を解散して旧に復す。
 四九年一月 新理事長に春日野就任。
 五〇年十二月 財団法人設立五十周年記念式典を東京会館にて挙行。
 五一年一月 横綱審議会委員長に石井光次郎氏就任する。
 同二月 相撲博物館館長に市川国一氏就任する。
 同七月 君ヶ浜他二名は、ブラジル相撲連盟の要請で相撲指導のた
 め渡伯。
 五六年九月 横綱審議会委員長に高橋義孝氏就任する。
 五七年三月 運営審議会会長に永田雅一氏就任する。
 同五月 新弟子検査基準改正。年齢にかかわらず身長一・七三メー
 トル以上、体重七五キロ以上。
 同七月 定年退職規定の一部改正。呼出し、床山、若者頭、世話人、
 職員は満六十三歳にて定年とする。
 同九月 運営審議会会長に安西浩氏就任する。
 同二月一九日 月末から取りこわし工事の始る両国旧国技館で、
 「両国旧国技館に別れを惜む集い」が、約二千人を集めておこ
 なわれた。
 五八年四月二十六日 大関にも公傷を適用する。（三場所連続負け越
 すと関脇に降下）
 同四月二十七日 新国技館の「起工式」。
 同一月三日 蔵前国技館閉館式。三十五年の幕を閉じた。
 同一月五日 深川八幡社境内に「大関碑」が完成し、除幕式がお
 こなわれた。（江戸時代の雪見山から二代目増位山まで、九十八人）
 五九年一月三日 新国技館完成。（「引渡式」）
 六〇年一月九日 新国技館「開館式」。
 一月十三日 新国技館での最初の場所始まる。
 二月十七日 新国技館歓迎祝賀、墨田区民五〇〇〇人「第九合唱」
 演奏会

参考・日本相撲協会編「相撲手帳」



西園勸進大相撲晴天大當録景昌圖 板元 鶴屋



五、「相撲・両国・国技館」

よもやまばなし

「旧国技館は明治村に

持っていきたかった」

市川 国一

(相撲博物館長・元武蔵川理事長)

旧国技館は東洋一の建物であったと思う。外観はロマネスクを取り入れ、クラシックだが、技術の面では当時の最高の水準で作られたもので、ドームの一番上は、いわば一本のピンでとめてあり、梁を支えた柱も裾の方はボルトでとめられて、全体が軟構造になっていた。大きさ・高さ・形といい、誰れもが目する、他にみられないものにチャレンジし



たといえる。設計者の一人である辰野金吾氏のご子息で、審議会委員にもなって貰っていた、辰野 隆さんもいつていたが、「目で測量する」という日本古来の感覚も取り入れ、あの土俵で相撲をとった者も少なくなってしまうが、土俵から栈敷を見上げて、また上から土俵をみても谷底をみるような感じではなく、両者の角度が丁度頃合いで疲れなかった。夜ともなると屋上のイルミネーションが輝き、隅田川にゆらめいたし、東京湾の海からもみえたそう。名古屋の明治村へ移築でもしたかったが、なにしろあの大きさだから、残念だった。

当時の国技館での場所は年二回だから、東京角力協会が主催して、夏は納涼大会、秋は菊人形大会を盛大におこなったものである。菊は草加に協会の菊畑を持っていて、そこで色々工夫して作っていた。堀切にも小さいのがあった。読売の正力さんが事業部長の頃、菊人形は移管したのかな。納涼大会もだいたい、氷なんかまだ貴重な時に、冬の鴨緑江の場面などを、真夏に氷をいっぱい積んでつくったもんだ。

わしが部屋に入る頃は、出羽海部屋は今の両国小学校の並びで、その頃は相生小学校といつていたが、町も相生町で、天野さんという大きな屋敷の隣りにあった。大震災で焼けて、部屋は隅田川沿いに越すんだ。大相撲も大正十三年の一月と五月場所は、現在の渋谷公会堂のところをやった。部屋が現在の両国二丁目に移るのは、戦後もしばらくしてからだ。

相撲に関することは、意外と間違えて伝えられたり、不正確なことが多い。また面白おかしく興味本位のこともあるので、新国技館もでき、相撲博物館も装いも新に開館するので、基本的なことを中心に、資料を収集して、相撲のことを皆んなに理解して貰いたいと思っている。

(談)



「名力士が目に見る」

泉 林 八

(元二十二代・木村庄之助)



国技館ができる前は晴天十日間の小屋掛興行であった。雨が降ったら中止になる。

で、翌日晴れたらやるかという、そうはいかない。初日の前の日と同じように、ふれ太鼓がまわって、その次の日にやる。だから一日おきに雨が降ったら、いつまでたってもその場所は終わらない。実際に一カ月以上もかかった場所もあった。小屋掛け時代、雨はそれほどに大敵で、カサを持っていった客が、木戸口で「エンジの悪い客だ」となぐられたというウソのようなホントの話が新聞に載っている。そのころの角界には、屋根つき相撲場は夢の実現だったのである。

明治四十二年、両国国技館を建てたとき、協会の蓄えはゼロだったという。大雷(おお

いかずち)といわれた初代梅ヶ谷(十五代横綱)の雷親方が、信用で今のお金に直すと百億円近い三十万円の大金を借りたという。梅、常陸(十九代横綱常陸山と二十代横綱二代目梅ヶ谷)の対立で、相撲が黄金時代を迎えていたからこそその話である。

国技館ができて変わったことは、晴天十日間が「晴天にかかわらず十日間」になったことその他に、優勝制度ができたことである。はじめは、団体優勝の方が重く見られていて幕内の東西対抗の形で、総勝ち数の多い方に優勝旗が与えられ、次の場所、東方とするこゝとなっていた。個人優勝は時事新報が優勝額をつくって天井に掲額するというこゝで、表彰することになった。またこの頃相撲は制限時間がない時代で、立つまで三十分以上かかるこゝもあった。

それから、国技館ができてから投げハナも禁止されている。小屋掛け時代はひいき力士が勝つと客がハオリなんかを土俵めがけて投げる。付け人がそれを返しにいくと、引き換えに祝儀をくれた。だが、これからは皇族や宮様にも見に来ていただくんだから、みっともない事はやめようということになった。

相撲に最初の黄金時代をもたらした梅、常陸が、国技館を建てる大きな力になったわけだが、出来上がった時はもう晩年で、間もなく太刀山時代になった。太刀山が九枚目の額を掲げたのが大正五年五月だが、この場所の

八日目、栃木山が太刀山の連勝を56でストップさせている。そして、小さな大力士、栃木山が引退するころは世の中が不景気で、国技館の入りもあまりよくなかった。それに、常の花ははじめ出羽一門だけが強くて、相手方が弱い、そうなる、今のような部屋別総当たりではないため、好取組が少なくなったという事も影響していた。横綱常の花・宮城山が引退したあとは、ついに横綱がいなくなってしまう。それに出羽一門の力士がそろって脱退する春秋園事件もあり、国技館のドン底時代だった。国技館はガラガラになってしまったが、やがて玉錦が横綱になり、双葉山が出てきて、また黄金時代を迎える。その間を支えたのは、出羽ヶ嶽の人気であった。

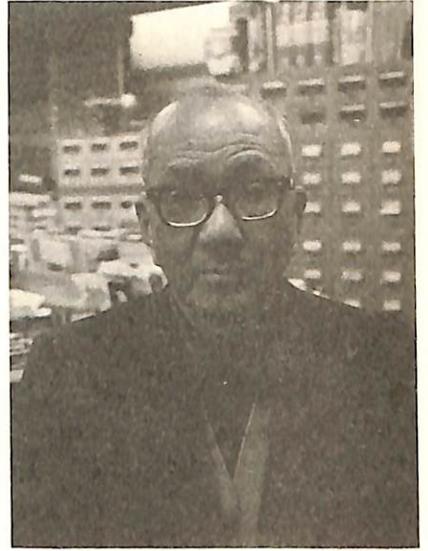
(談・両国三丁目住・94才)

「両国の思い出」

小泉 国 太郎

(元両国与兵衛主人)

江戸前握り鮨の元祖と伝える両国与兵衛に、明治三十三年生まれました。両国元町といわれた頃で、回向院の門前、隅田川畔の横丁を少し入ったところ。近所には鳥料理のぼうずしゃも、鰻の神田川、いのししのももんじや、菓子の三橋堂、履物の伊勢甚などもあって、両国が現在の錦糸町のような賑いでした。回向院にも毎日露店が出ていまし



た。大徳院の夜店も賑やかでした。相撲の最初の想い出も、回向院境内にテント張りであったと記憶しています。

亀沢町に江東幼稚園があつて、そこにかよひ、現在の両国小学校の相生小学校に入りました。あとで、同窓会で小学校の先輩にあたる芥川竜之介さんと話したこともありました。震災前の店は土蔵つきの座敷が十部屋ぐらゐある二階建て、中庭がついていて、離れもありました。立ち喰いのできるようなカウンタ―はなく、みな座敷になつており、あがつていただいて貰うようになっていました。与兵衛ずしは、おそばやさんにそば料理をやるどころがありますが、丁度あんなような、すし料理というようなもので、にぎりずしの元祖といわれていますが、押しずしがあつたり、変り巻きずし、くるみ玉子ずしとか色々に変化に富み、趣向がこらしてありました。国技館が出来てからも、相撲茶屋の大和さん、武

蔵屋さんを通して、白木のすしおけでマス席まで出前をしたものでした。打出しの太鼓がなると、国技館からどっと人がはけ、店にも相撲帰りの人達が沢山まいりました。なかには、徳川さんとか、近衛さんとかもおみえになつたものでした。冷蔵庫のなかつた頃は、生ものを扱いますので、夏場は店は夏休みをしておりました。大通りを舟で通つたという明治四十三年八月の大水の時、丁度夏休み中のことだつたことをおぼえています。

国技館の思い出というと、相撲のない時の博覧会や菊人形が印象に残っています。一階からぐるぐる廻つて三階の方まで、それは大したものでした。

(談・83才・江戸川区北小岩住)

「カメラを通してみた相撲」

工藤 明

(両国・工藤写真館主)



昔の国技館のことと言えば、まず、明りの入つた国技館が目につぶね。戦災で焼けるまでは、相撲茶屋の西隣りに店があつて、まわりには土俵は無かつたが若松・富士ヶ根・伊勢ヶ浜部屋等々沢山の部屋があり親方が住んでいた。富士ヶ根さんのところにいた、後に横綱東富士になる謹ちゃんなんかつかしいね。それに、国技館の北東の角に、大きなちよりの木とお稲荷さんがあつて、初午の時は、この配り物は相撲茶屋がやるので、ごうせいでよくいったものだ。

写真というと、双葉山関が羽黒山、名寄岩をいつも一緒に連れて来て、写真館で化粧まわしをして、土俵入の写真も撮つたもので、今頃はこつちから出向くことが、ほとんどになつているがね。玉錦さんは、瞬間に写真を撮らないと、いやがつたそう、大変苦労したと父が言っていました。彫像などを作る時の元になる人体を八方から撮る八体撮りの時など考えて、当時はガラス版だつたそうです。写真機を八台用意してあらかじめセットし、真中に立つて貰つて、駆け足で、ひとまわりして、撮つたと聞きました。

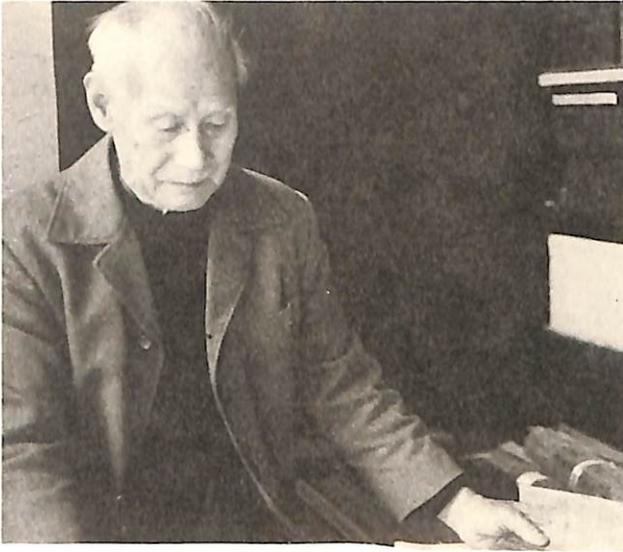
私の写真の思い出というと、昭和三十五年にした協会二十五周年記念の盛大な行事を、みんな撮つたことと、今度の親方が大関になつた頃かな、三保ヶ関部屋にいつて、横綱北の湖さんの持つている化粧廻しを取り換えて、十四本あつたのを、撮つたことかな。前々から相撲

さんの写真は、よく撮っていたのだが、昭和45年からは、協会から頼まれて本場所ごとに、全力士の化粧まわしの姿を撮ってきているのが、貴重な資料となって来ているのではないかな。しかし、撮るのは土俵入の前に撮るのだが、全員撮るのには一週間ぐらいかかってしまうのが大変ですね。

(談)

「開荷(明荷)づくり三代」

(両国・大村つづら店) 大村 銀之助



力士が髷を結ったら、伝統を尊重しなければ様にならない。そんな一つに、化粧まわしや締め込み、ぞうり、バスタオルなど、力士

の七つ道具を運ぶつづら、即ち開荷(明荷)がある。その開荷を祖父・父と三代、両国で作り続けている。自分だけでほぼ六十年たった。

真竹を寸法に合わせて切り、水につけておき、割り、薄くはいでいく、縁にする皮のついた竹は、ローソクの火であぶって曲げ、あとは電気コンロで曲げ、編む材料の下ごしらえをする。箱の型に編みあがったものを、二・三日天日で干し、和紙を貼り、「かきだし」というささらのような櫛で、貼った和紙の上を編目が出るようにこすり、その上に蚊帳の布地を貼り更に和紙を貼る。それに漆を塗り仕上げる。金具で縁どりの木枠を取り付け、塗りをかさねる。お相撲さん用は濃い緑色に塗り朱の文字で、芝居その他に用いるものは朱塗り、昔から色が決っている。形もお相撲さんのものはひとまわり大きいものである。更に藤で上下の縁を巻き仕上げる。

和紙も昔は古い大福帳などを買い、蚊帳の古るいものもたやすく入手できたものが、今頃は和紙も新しいものを買ひ、蚊帳もなかなかなくなってしまった。材料ばかりでない、職人も減る一方で、戦前都内に五・六十軒あった店も、三・四軒になっている。今では年に百五十個余りの注文を受けるが、その大半は力士・行司さん達のものである。しかし、女房は手伝ってくれているが、息子はサラリーマン、娘も嫁いで、祖父から父へ、父から子

へと受け継がれた技術も、私限りでおしまいになりそうである。

(談)



「力士の足袋」

緑一丁目・足袋店「喜久屋」

ウインドーには紙に描いた大きな足形が並び、「日本一の大足」の十七文は戦後の十両能登ノ山、それに大鵬の十四文半などだ。緑一丁目の足袋店「喜久屋」の店頭は、行きかう人をびつくりさせる。父親の実太郎さんがここに店を開いたのは六十年以上も前の大正十年。相撲部屋が集中している場所柄、力士が上得意となり、角界の足袋仕立てをほぼ一手に引き受けてきた。

最初の注文の時、足を紙の上に置いて貰い鉛筆で足形を取る。力士の足形だけで千五百人分ほどにもなっている。巡業先から電話で注文があっても、足形を基にすぐ仕立て、速



「大判のライオン堂」

両国四丁目京葉道路と清澄通りの角、ライ

達で送ったりする。既製品でも十六文まで用意している。実太郎さんに木づちなどでたたかれながらの修業を経て三十四年、二代目の宮内梅治さんは、長年の経験から、将来強くなりそうな力士を足形を取ってみると、何んとなくわかるそうである。宮内さんによると、横幅が広く親指が太いほど強い力士になるという。

オン堂は、並の大判ではない、力士サイズの大判の下着がそろっている。胴廻り一一五センチから始まり、一二二、一二七、一四〇、一五二センチと大きくなる。最近まで一六五センチが最大だった。巨漢高見山がもつぱら愛用した。しかし、小錦の出現で更新され、最大サイズは一八〇センチに書き改められた。力士が日常パンツを用いるようになったのは戦後という。相撲部屋の近くにあった洋品店ライオン堂が、その需要にこたえるようになった。最初は普通サイズと同じ縫い方をした。

「へそが出て困る」「しやがんだら破れた」。苦情が絶えなかった。またがみを深くし、おしりの部分を二重にするなど、改良を重ね、

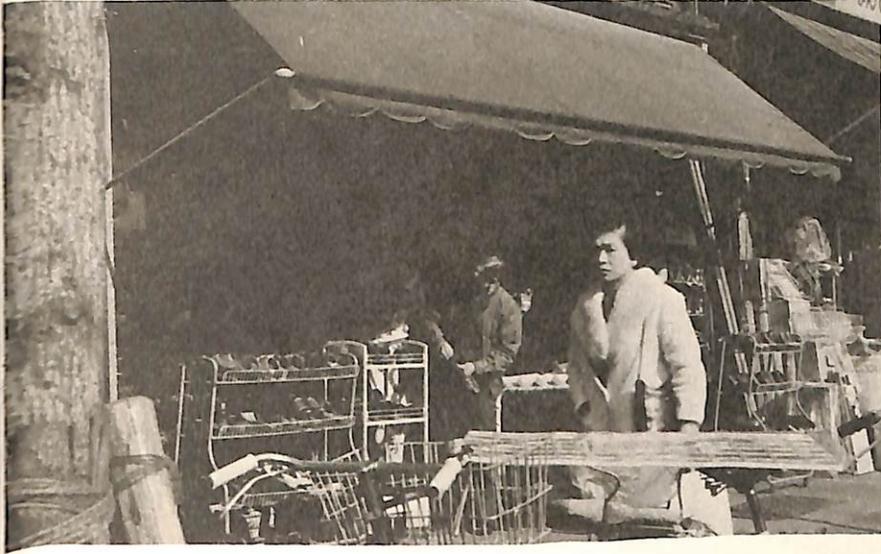
アンコ型の力士にも無理なくはけるようなものを作るには四・五年かかった。部屋で間違えないように、しこ名や本名の刺しゅう入りパンツである。この頃は、デパートのLLコーナーからみだす人も増えたせいかな、力士以外の人も訪れている。



「力士の履物」

緑一丁目・岡田屋本店

着物姿の力士の履物は、下駄が雪駄と決ま
っている。序二段までは下駄、三段目になる
と雪駄が履ける。その雪駄も畳張りは幕下か
らときびしいが、相撲社会では必需品である。
緑一丁目の「岡田履物店」は、明治初年の創



業から力士用の下駄・雪駄を扱っている。主
人の岡野耕二さんは三代目。店頭に並んだ力
士用の下駄は、普通より大きいのはもちろん
だが、重さも二倍ある。巨体に乗せても減ら
ないように歯が厚くて高いし、よく締まった
桐を使っている。特に重い下駄を、持ちがい
いから選ぶ力士が多い。鼻緒は粋な江戸小紋
が好まれる。しかしこの頃は、トレーニン
グウェア愛用の力士も増え、岡野さんの店でも
四・五年前から力士用のサンダルも置くよう
になっている。また、厚手のゴムぞうりも新
弟子達に好まれている。

「両国界隈のちゃんこ料理店」

ちゃんこりょうり ちゃんこ料理 釜鍋料
理とも書く。いわゆる相撲(すもう)料理の
総称。元来(ちゃんこ)とは、江戸時代初期、
長崎に伝わった板金製の中華鍋(なべ)(釜鍋)
の唐音である。約三〇〇年前の寛永・正保年
間に、当時の力士たちはしばしば長崎へ巡業
して、中華鍋による諸種の料理に親しむ機会
が多く、ここにヒントを得た彼らは、野菜や
魚・鳥・獣肉類の栄養価をそこなうことも伝
染病や寄生虫の心配もなく、多量にかつ簡単
に調理しうる鍋料理に重点をおき、さまざま
のくふうをかさねるうち、必然的にこの名称
ができあがったものとおもわれる。ちゃんこ
料理の中心は、前記の材料を水たきしてポン

ス(ダイダイをしぼった汁。酒石酸を代用す
ることもある)で食べる(ちり)であるが、
ほかに鳥のがらを煮出したスープで野菜類、
豆腐、肉、魚類をたく、寄せ鍋式の(ソッ
プ)だし、けんちん汁式にしようゆ・酒・砂糖の
混汁で新鮮な小魚を煮ながら食べる(ごった
煮汁)などがあり、またふつうの(鳥鍋)の
中へささがきゴボウや油揚げを入れるのも独
特のものとして知られている。そしてこれら
に用いられる鍋その他の器物や材料のこなし
方などことごとく大ぶりで大ざっぱなところ
が特色である。修業力士はすべてこの料理に
習熟しなければならず、材料の鮮不鮮を的確
にみわけることから訓練される。

●ちゃんこ「川崎」：両国一

平凡社「世界大百科」より





●ちゃんこ料理「大内」…両国二



●ふぐちゃんこ「かりや」…両国一



●番付が気になる「珈琲オンニ」…両国二



●ちゃんこ「巴湯」…両国二



●力士もなかもお目見得」とし田」…両国二



●ちゃんこ「道場」…両国一

墨田区内の相撲部屋





新国技館

片男波部屋

九重部屋

大島部屋(仮)

間垣部屋

立浪部屋

若松部屋

時津風部屋

宮城野部屋

春日野部屋

大島部屋

二所ノ関部屋

井筒部屋

出羽海部屋

立田川部屋

三保ヶ関部屋

(1) 春日野部屋

東京都墨田区两国一ノ七ノ十一
中田 清 (元栃錦) (大14・2・20)



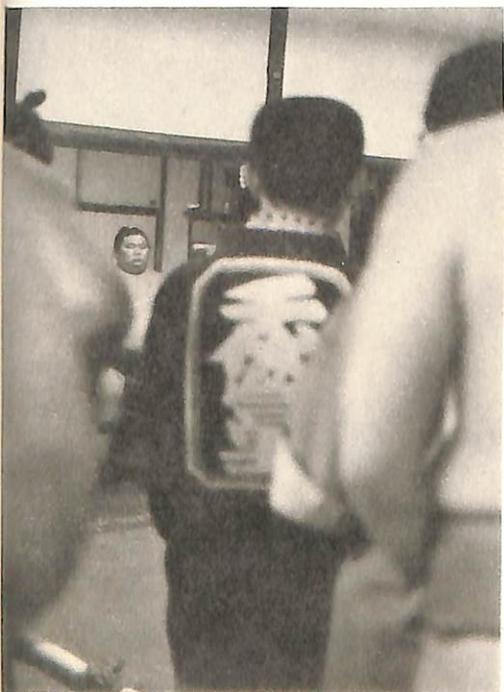
春日野部屋の創立は、寛永四年といわれ、江戸相撲の組織制度が整備される二〇〇年以前にさかのぼることのできる年寄名であるが、相撲部屋としての活躍は、横綱栃木山が八代春日野を襲名してからといえる。昭和元年常陸山が出羽海部屋から分家して始まり、栃木山・栃錦と二代にわたる春日野親方によって、名門としての基盤を築いた。現在の時津風部屋の前あたりにあったといわれる部屋を、八代の時に本所元町（現在地）に移したものである。昭和三十五年栃錦が九代目春日野を継ぎ、昭和四十九年初場所後、協会理事長に就任し今日に至っている。

幕内	舛田山 石川県七尾市和倉町日部	舛田 茂 昭26.4.10
蜂	矢 岐阜県本巣郡根尾村東坂	蜂矢敏行 昭25.11.16
柘	劍 名古屋市中昭和区御器所二二〇	平野展秀 昭30.4.26
柘赤城	群馬県沼田市中乙三三八三	金谷雅男 昭29.10.31
十	西	
柘	光 宮崎県児湯郡高鍋町北高鍋	金城興福 昭28.2.21
柘	司 名古屋市中川区赤仁町一三四	後藤哲雄 昭33.4.25
柘	經 川崎市幸区柳町六三五	今井勇治 昭34.1.30
幕下		
柘	泉 大阪府泉佐野市南中岡一五〇	中山隆幸 昭34.11.26
柘	華 中華民国台北市華亭街二二号	劉 朝惠 昭37.9.4
柘海山	川崎市多摩区福河原二二二六	寺田浩一 昭36.2.22
柘常陸	茨城県久慈郡金砂郷村	黒羽敏夫 昭35.7.17
柘	湊 神奈川県横須賀市池上五二七	松田広行 昭33.1.17
能登の海	石川県鳳至郡穴水町川島	山岸正幸 昭34.4.17
三枚目		
秋	本 東京都葛飾区立石五二四三二七	秋本久雄 昭40.5.5
信	夫 神奈川県相模原市若松五二	池田重信 昭39.3.1
西	塚 青森県南津軽郡浪岡町女鹿沢	西塚佐登志 昭38.5.16
谷	本 神奈川県茅ヶ崎市出口町七三七	谷本 久 昭40.11.17
宮	内 群馬県伊勢崎市上蓮町五四	宮内輝和 昭35.7.6
絹	川 川崎市川崎区池上新町二六二	絹川 宏 昭38.8.21
島	方 群馬県高崎市浜川町二二七一	島方 守 昭42.2.19

芭	原 山形県最上郡金山町金山	芭原竜人 昭39.3.29
柘	双葉 福島県双葉郡浪江町荻宿	吉田浩毅 昭35.11.4
福	江 鳥根県松江市上乃木町二四四七	福江敏純 昭41.11.10
柘	濱 伊豫川県横須賀市田浦町二八四	渡辺良明 昭39.9.17
大	幸 青森県弘前市桔梗町三〇一	永井孝幸 昭41.1.2
清	水 静岡県清水市能島一九七一	中島豊秀 昭35.11.26
笹	沼 栃木県河内郡上河内村関白	笹沼照彦 昭40.7.6
柘	山 栃木市倭町二八八	渡辺仁志 昭37.10.7
序二枚		
柘	羽 岐阜市永楽町二二四二〇	武蔵智之 昭38.2.15
井	戸 福島県双葉郡双葉町	井戸川栄隆 昭41.10.12
水	野 愛知県春日井市気噴町北二七六	水野伸次 昭40.11.21
柘	赤 栃木県下都賀郡藤岡町大前	船田和美 昭41.1.26
丸	山 川崎市川崎区小田栄一三	丸山和哉 昭41.8.8
茂	渡 福岡市東区大字下和百二六五	茂渡泰幸 昭40.9.28
柘	彰 福島県相馬市塚部字内城三五	沖野 純 昭38.5.1
津	軽 青森県津軽郡西目屋村	三上重美 昭39.8.9
浅	野 宮城県登米郡南方町原屋敷	浅野文夫 昭38.7.16
藤	川 福岡県三潴郡三潴町玉満	藤川 剛 昭41.7.6
序一口		
曾	我 東京都世田谷区弦巻四二二一七	曾我 明 昭40.9.29
柘	豊 千葉県市川町六二八三八	吉田貴司 昭40.10.29
能	勢 鹿児島県鹿屋市寿一四四二	能勢将竟 昭40.10.28
井	崎 鹿児島県曾於郡大崎町野方	井崎輝文 昭42.6.10
柘新井	井 群馬県高崎市我峰町三九九	新井 進 昭43.12.31

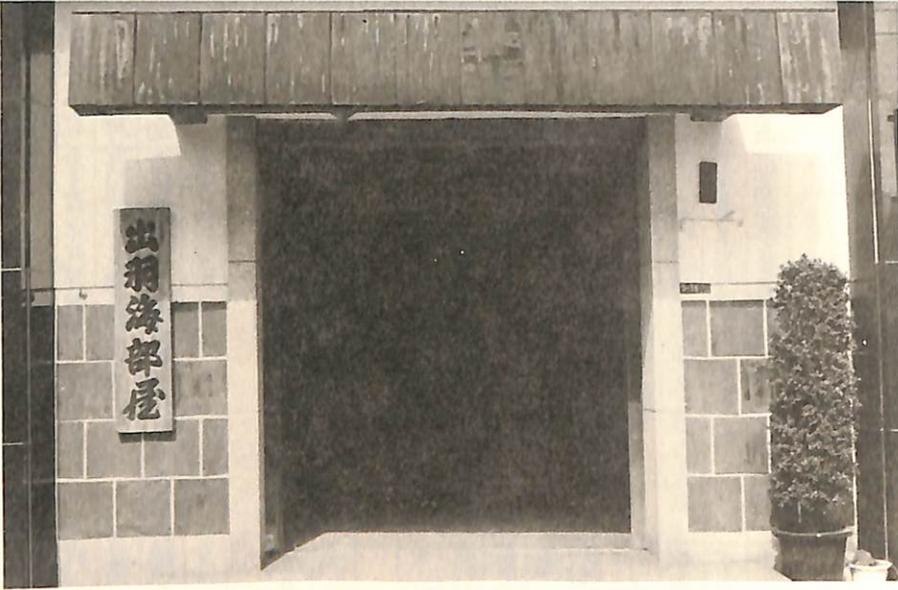
番付外		木村山	熊本市本莊一五	木村 忍	昭28.8.21	
寺		田	千葉県勝浦市川津一六三〇	寺田慶一	昭23.6.1	
年寄						
中		立	(元柄海)	花田茂広	昭13.3.13	
竹		繩	(元海門海)	武岡一行	大15.1.1	
玉		ノ	井	(元柄東)	志賀駿男	昭19.9.3
入間川			(元大江元)	小林 勇	大12.11.22	
千田川			(元若鴨門)	居内徳夫	昭14.2.7	
山		分	(元柄富士)	小暮晴男	昭21.6.8	
山		友	(元柄勇)	阿保鉄雄	昭22.10.2	
行司						
木村庄太郎		東京都足立区竹塚三七一・二〇六		福井 栄三	昭3.7.18	
木村庄二郎		千葉県市川市大和田一七九・二		茶原 宗一	昭2.10.22	
木村善之輔		埼玉県草加市瀬崎町二四七・九		池田 貢	昭10.8.28	
木村孔一		千葉県磯辺六一・四		入枝政次	昭16.3.3	
木村春夫		横滨市鶴見区寺尾		森田善光	昭38.9.12	

差者頭	津輕海	千葉県市井砂四三三・一〇八	宇野伝三	昭3.5.13
呼出	善三郎	東京都江戸川区南小岩七〇・一五	杉本善三郎	昭5.8.18
米	吉	千葉県市川市大和田一五一・九	安藤米一	昭12.8.31
床	山			
床	邦	東京都足立区六月町一八三・三二七	渡辺邦雄	昭18.7.8
床	松	北海道函館市元町三一・三二	松井 博	昭29.8.1
床	和	東京都墨田区両国三二四・七	酒井和美	昭26.8.6



(2) 出羽海部屋

東京都墨田区両国二ノ三ノ一五
市川 晋松 (元佐田の山) (昭13・2・18)



幕内	出羽の花 青森県北津軽郡中里町	野村双一 昭26.5.13
大錦	新泻県佐渡郡羽茂町	尾堀盛夫 昭28.9.11
佐田の海	大隈府堺市八田寺町	松村宏司 昭31.7.19
十両	鷺羽山 岡山県倉敷市児島赤崎九二一	石田佳貞 昭24.4.2
幕下	志州山 三重県鳥羽市菅島町六〇	木下昌考 昭34.6.22
扇鳳	名古屋港区油屋町四三三	大橋秀和 昭35.5.6
出羽の洲	東京都新島本村七	前田 聖 昭37.11.3
駒勇	和歌山市有本一九〇一	鈴木 誠 昭39.5.5
成山	兵庫県洲本市由良三丁目	成山明秀 昭38.1.22
山崎	静岡県田方郡函南町	山崎喜章 昭40.5.22
佐田嵐	東京都江戸川区平井四一九六	加藤久雄 昭34.2.23
若鷺	広島県比婆郡西条町	中元輝清 昭33.2.17
福龍岳	福岡県嘉穂郡嘉穂町	中尾茂生 昭34.5.8
三枚目	西の龍 鹿児島県西之表市国上八四三	下和重和 昭38.1.29
出羽の邦	埼玉県川口市東本郷二二五三	畔蒜敬人 昭39.1.15
武蔵海	横浜市中区錦五七.七〇七	梅原栄治 昭36.7.13
岩の海	岩手県和賀郡東和町	菊池淳一 昭34.5.5
出羽ノ灘	東京都板橋区深町十二	古口孝治 昭35.5.19
亀山	栃木県安蘇郡田沼町	亀山弘章 昭30.7.18
出羽翠	東京都品川区大井三三三九七	加賀美延幸 昭35.6.8

序二枚	川西 青森県むつ市新田名部町	川西勇逸 昭42.1.9
小城錦	佐賀県小城郡三日月町長神田	池田宗徳 昭40.10.28
佐田の嶋	長崎県佐世保市大宮	室 信一 昭41.3.7
石谷	神奈川県大田区東雲通り四二二七	石谷 裕 昭40.11.19
小岩井	千葉県市川市大野町二四七〇十二	小岩井昭和 昭42.11.18
佐田の花	長崎県島原市萩原町七六三二	松尾光高 昭42.8.8
小貫	埼玉県川口市前上町三二	小貫幸夫 昭42.4.6
山田	神奈川県藤野市堀西七三三ノイ号	岩田昌久 昭44.1.9
前川	宮城県栗原市将監七ノ九	前川 淳 昭42.7.18
佐田の国	静岡県伊東市大原一十一二七	花塚高広 昭42.2.28
佐田の竜	長崎県諫早市金谷町九六	相浦一男 昭41.3.18
序ノ口	山岩乃本 熊本市国府二一七三三五	岩本裕司 昭43.11.16
丹野	福岡県嘉多方市見項通り下	丹野 誠 昭39.4.3
宮田	大隈府堺市浜寺元町六九九九	宮田一人 昭42.6.22
高橋	千葉県柏市逆井二六三八	高橋慎一 昭40.11.3
番付外	出羽東 東京都板橋区高島平三三四九三	渡辺三成 昭41.7.27
年寄	田子ノ浦 (元出羽錦)	
高崎	東京都世田谷区宮坂三四六一七 (元小城花)	奈良崎忠雄 大14.7.15
高崎	千葉県市川市大野町二四七〇十二	小岩井正昭 昭40.11.29

何武松(元大晃)	東京都港区赤坂一ノ四・三	柴田定行	昭29.24
関ノ戸(元福ノ花)	東京都墨田区亀沢二二・七	松井孝一	昭19.7.1
稲川(元義ノ花)	東京都江東区福住二ノ八・十 秀和レジデンス・九。五号	相河成典	昭18.9.4
松ヶ根(元羽島山)	東京都港区三田四二・一六	山内昌乃武	大11.4.23
峰崎(元那智山)	東京都台東区浅草三ノ一八・六	柏木佐平	大9.8.15
山科(元吉の谷)	東京都墨田区両国二二・一五	吉谷作利	昭24.4.23
行司			
式守伊之助	千葉県長沼町一七三・四四	後藤 悟	昭3.12.15
木村林之助	東京都足立区佐野二ノ三〇・一〇	鷯池保介	昭13.2.1
木村成喬	埼玉県春日部市中央一ノ六・十一 ライオンピア春日部三三・三〇・二	沢田郁也	昭16.2.13
式守晋一郎	京都市左京区岡崎天至町六ノ二四	金沢 洋	昭41.3.26
若者頭			
出羽ヶ崎	東京都墨田区両国一ノ五・四	尾崎富二郎	昭10.12.3
呼出			
照夫	東京都国分寺市谷保 矢川園地 六六五二・八	高柳照雄	昭22.2.19
勲	茨城県北相馬郡藤代町宮和田	佐々木 勲	昭19.6.7
浩次郎	新浮市鐘木六八七	杉山浩二	昭42.4.9
床山			

床	清	東京都荒川区東尾久四三七・一三	佐々木清養	大12.10.10
床	勇	東京都墨田区業平二一・三五	岡田 勇	昭10.11.19
床	三	千葉県幸町(丁目)十(御)十五(弟)五八	佐藤三夫	昭21.7.11
床	安	千葉県千種町一八三・一五・三三	西村安士	昭29.7.6

初代は谷風時代の人氣力士出羽ノ海金蔵で、初代・二代ともに出羽国の出身であった。二代以後幕末まで名跡がとだえ、三代から常陸出身の常陸山が継いだ。十九代横綱常陸山が部屋を継ぐと、一代で横綱三・大関三・三役十二人を育て、番付の片側を出羽海部屋で占めるほどの、角界きつての大部屋になった。その後、常陸山・大錦・栃木山・常ノ花・武蔵山・安芸ノ海・千代の山・佐田の山と八人の横綱を輩出している。七代目出羽海(常ノ花)の死去により、元出羽ノ花の武蔵川(前理事長)が八代目を襲名する。昭和四十二年初場所後、元千代ノ山の九重親方が部屋を出て独立し、現在は女婿の元佐田の山が九代目を継いでいる。

(3) 三保ヶ関部屋

東京都墨田区千歳三ノ二ノ十二
沢田昇(元増位山)(昭23・11・16)



大阪相撲に代々続く古い名門で、初代は宝暦ごろの三保ヶ関梶右衛門である。東京相撲との対抗の合併興行を催すなど、大部屋として隆盛をほこってきた。昭和二年東京に合流してからは、昔の隆盛さを欠いてきたが、昭和二十五年先々代増位山が引退して、八代目三保

ヶ関を襲名し、本格的に部屋作りに取組みだした。そして、昭和四十年デラックスな五階建の部屋を新築する大部屋となり、面目を一新した。また実子が小結増位山となり、引退後は年寄小野川をついでいたが、先代の隠居により昭和五十九年九代目三保ヶ関を襲名している。

龍	空	福岡県田川市伊由二七二一	一色輝入	昭39/10/13
名瀬錦	鹿島郡名瀬市石橋町一三五	昭30/10/15	宮田 誠	昭40/12/15
紀峰山	和歌山県松江市東四四二九九	昭40/12/15	前田敦生	昭40/12/15
国竟山	兵庫県加古川市西神吉町辻	昭38/4/30	福田典洋	昭38/4/30
西希山	名古屋市中区新栄一〇一七	昭38/6/15	大西正高	昭38/6/15
序二役				
水間	神奈川県平塚市中堂三三二九	昭39/10/11	水間重博	昭39/10/11
松本	京都府宇治市五ヶ庄梅林六〇	昭40/6/8	松本信一郎	昭40/6/8
小沼	福岡県田村郡常葉町常葉	昭41/6/30	小沼吉宏	昭41/6/30
福錦	福岡市中央区天神五四六	昭29/8/24	白石道則	昭29/8/24
増飛竜	奈良市杏町二一	昭32/1/4	蔵内敏嗣	昭32/1/4
三役目				
秀乃の龍	大阪府堺市長曾根町三七七	昭32/11/12	吉本明彦	昭32/11/12
黄金錦	北海道室蘭市香川町二一八	昭31/8/25	村上友一	昭31/8/25
播竜山	兵庫県豊野市神岡町上横内	昭26/5/4	田口孝晴	昭26/5/4
幕下				
聞竜	兵庫県加古川市米田町平津	昭33/12/19	田中賢二	昭33/12/19
幕内				
北天佑	北海道室蘭市石川町七一	昭33/8/8	千葉勝彦	昭33/8/8
大関				
北の湖	北海道有珠郡壮瞥町滝之町	昭28/5/16	小畑敏満	昭28/5/16
横綱				



泰山	山 東京都葛飾区白鳥町二二三七	市川泰夫	昭32.6.22
増の浜	兵庫県姫路市四郷町見野六一	本田直貴	昭36.7.27
村井	秋田県大館市大館北三三八二	村井修二	昭42.4.25
御船山	和歌山県海南市船尾七〇四	張井雄次	昭33.12.3
龍鳳	兵庫県加古川市加古川町西河原	木森建太	昭41.8.15
松田	愛媛県伊予郡砥部町宮内	松田 豊	昭40.5.10
龍の海	兵庫県加古川市別府町中街町	内海健二	昭40.8.6
小川	岡山県英田郡英田町福本	小川 学	昭40.5.21
橋山	愛知県岩倉市宮前町三五七	橋 秀樹	昭42.11.26
橋山	愛知県岩倉市宮前町三五七	橋 綾二	昭41.1.15
序ノ口	名古屋市中川区打出二二三	狩野正浩	昭40.12.2
狩野	広島県三市阿賀中央九十三	永瀬良信	昭43.11.25
永瀬	大阪府和泉市池上町五四七	西川義成	昭43.5.29
西川	静岡県藤枝市志太八八六五五	大草真也	昭43.4.3
大草	宮城県仙台市太白二九四三〇五	金田光一	昭42.9.26
金田	福岡県いわき市小名浜花畑町	須藤 剛	昭42.12.18
須藤	滋賀県甲賀郡水口町八坂	金田幸太	昭43.10.9
賀位の山			
年寄			
待乳山(元増己山)	東京都江東区新大橋二六六六	石谷昌治	天11.1.17
清見泻(元大竜川)	東京都墨田区五川二二六六五	和田一男	昭21.1.21
小野川(元橋竜山)	東京都墨田区西国三三四九 ケイコボラス七〇二号	田口孝晴	昭26.5.4

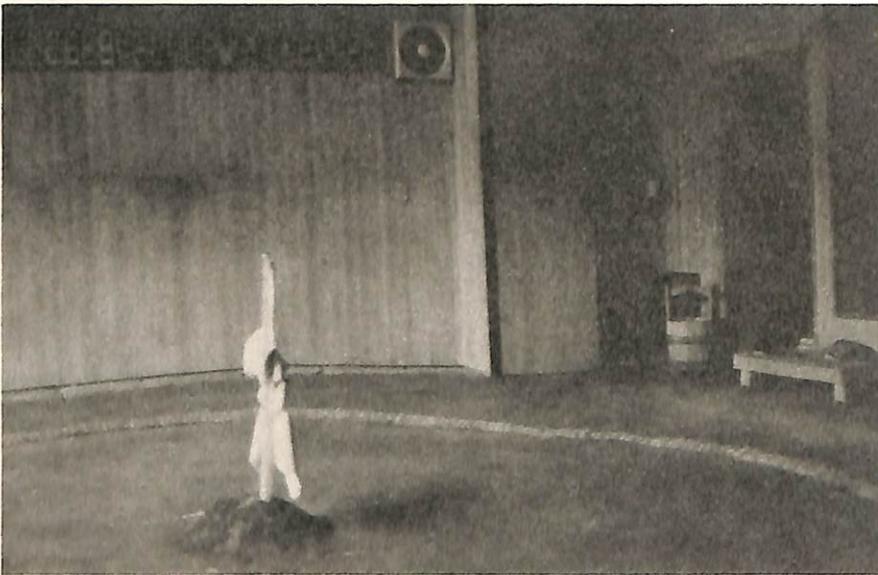


●昭和42年頃の三保ヶ関部屋

呼出			
拓郎	千葉県市川市南八幡二四〇五	花里拓郎	昭32.2.24
次郎	東京都墨田区千歳三二二七十二	西出和夫	昭35.1.19
保介		岩田英之	昭43.3.25
床山			
床山	東京都墨田区緑四一三二〇二	高橋 明	昭20.10.7
床山	東京都南九条南松木町五三二	関 朝雄	昭37.11.27
床山	大阪府堺市土塔町二〇二八	西尾修一	昭43.3.16

(4) 間垣部屋

東京都墨田区亀沢三ノ八ノ一
下山 勝則 (元若乃花) (昭28・4・3)



幕下

本松 北九州市八幡西区鳴水二一九 本松哲浩 昭37.2.27

序二致

本田 熊本県宇土市岩古曾町三三〇三三 本田孝男 昭43.5.12

若田川 福岡県田川郡川崎町米田 山本哲也 昭43.6.29

脇田 鹿児島県日置郡伊集院町竹之内 脇田栄治 昭44.1.18

福地 鹿児島県日置郡那山町川町 福地正一 昭39.11.16

序ノ口

若山口 鹿児島県西之表市西之表六三八三 山口博之 昭42.5.7

林 鹿児島県始良郡始良町東鎌田 林 栄二郎 昭43.4.2

柳谷 札幌市白石区厚別中央四二二一 柳谷英樹 昭44.3.11

五十嵐 札幌市東区北三条東七ノ一 五十嵐直次郎 昭42.7.3

多田 兵庫県神崎郡福崎町西田原 多田博文 昭38.11.20

間垣部屋の初代は、享保十一年

(一七二六)と伝えているが、年

寄名跡として続き、昭和四十二年

頃の各部屋一覧をみると、伊勢ヶ

浜部屋の明瀬川が継いで、三保ヶ

関部屋に近い、千才三丁目部屋を開

いた。現在の間垣親方は、二子山

部屋の若三杉から横綱となった、

二代目若乃花であるが、引退後、

間垣を襲名し、昭和五十八年十二

月に序ノ口五十嵐をもって、二子

山部屋から独立したものである。

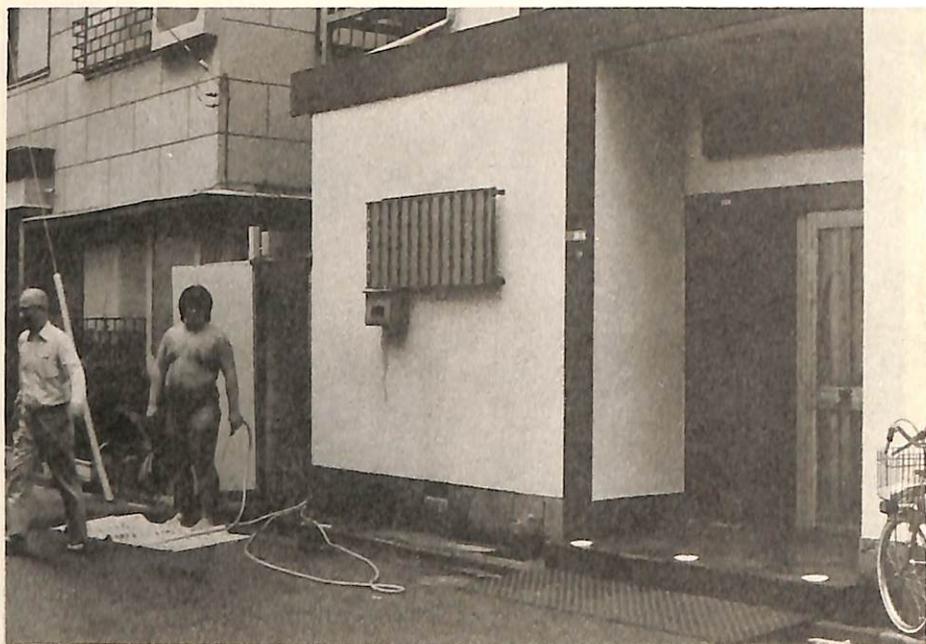
昭和42年の間垣部屋

「阿佐ヶ谷の方から蔵前に通って
いた時に、両国に住んでいた人た
ちがともうらやましかつたので、
新国技館に歩いていける、近いと
ころがいいと思った」と、旧南割
下水の広い通りの突きあたりに新
国技館を見る亀沢三丁目に、明る
いタイル張りの部屋を建設し、地
域の子ども達を集めてもちつき大
会を開くなど、大部屋への期待を
感じさせる。



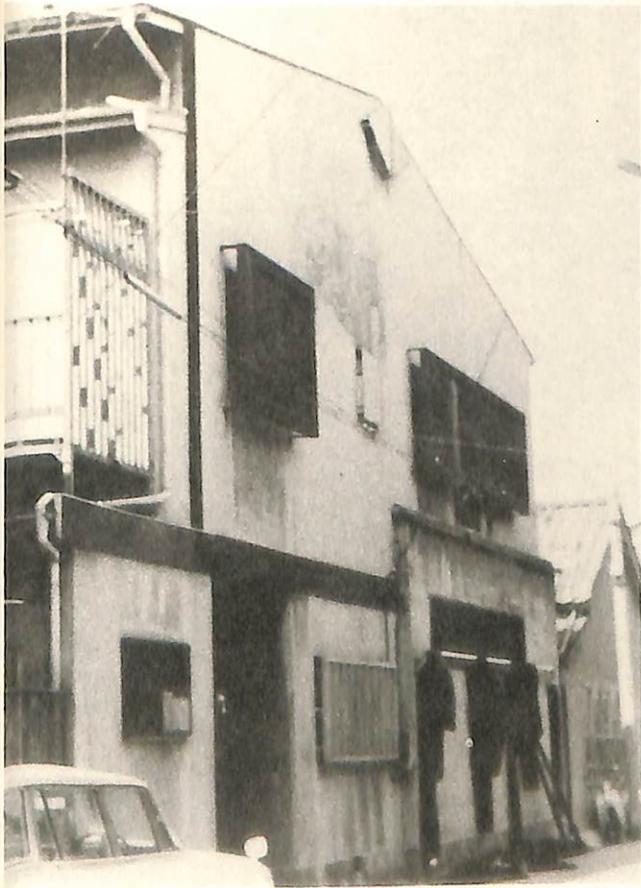
(5) 片男波部屋

東京都墨田区石原一ノ三三ノ九
三浦 朝弘 (元玉乃海) (大12・1・2)



片男波は力士名として元禄時代からあり、約百年後の宝暦の頃には、年寄名として番付にでてきている。緑図書館所蔵の「相撲細見起解」(嘉永六年)でも、何代目になるのか「雷門人温海嶽改 片男波岸右工門」とみえる。「片男波」の出典は、山辺赤人の和歌の浦で詠んだ、「わが浦に潮満ちくれば濁をなみ芦辺をさしてたづ鳴き渡る」の古歌からと伝え、和歌の浦にも、片男波の地名が残っている。一時元神風も片男波を継いでいるが、現在の片男波親方は、荒法師の異名をとり、昭和三十二年九州で黄金の廻しを締めて平幕優勝した玉之海が三十六年二所ノ関部屋から分離独立したものである。弟子の移籍をめぐって本家とのトラブルもあつたが、弟子の玉乃島が横綱になり、「玉ノ海」と改名している。しかし、玉ノ海は二十七才の現役中に急死した。部屋のシヨツクは大きかったが、再建も再び軌道に乗っている。

年寄	玉 龍	長崎市田守名四三二	永田大蔵	昭29.7.22
	玉 風	奈良市中町一七六四	大井克也	昭36.7.9
番付外	玉 桜	東京都墨田区石原	河辺幸夫	昭41.7.16
	太 擁	愛媛県松山市和気町	浜田正敏	昭27.4.13
三役目	蕨 川	高知県宿毛市橋上町奥名路	蕨川和宏	昭28.6.4
	広 竜 山	山梨県玖那郡錦町広瀬	沖 竜徳	昭39.11.7
序二役	玉 乃 波	愛知県海部郡甚目寺町西今宿	三瓶利一	昭36.4.1
	玉 竜 馬	東京都目黒区緑ヶ丘一三〇五	鈴木新平	昭40.7.11
序ノ口	玉 響	福岡県糸島郡志摩町岐志	谷 和幸	昭42.8.7
	玉 乃 山	兵庫県西宮市植之流町一三一四	中山佳則	昭41.11.12
前 山	玉 昇	東京都杉並区高円寺三〇四〇十一	大沢健司	昭42.11.26
	玉 若	福岡県浮羽郡吉井町八和田	原 繁春	昭42.6.4
前 山	徳島県海部郡日和佐町奥河内	前山 肇	昭43.9.29	
	玉 乃 国	東京都板橋区高島平二六六二〇	三浦義夫	昭43.6.5
玉 飛 龍	東京都港区芝五ノ八八一三三七	原 京一	昭43.5.18	
	玉 姫 島	大分県東国東郡姫島村六三二	藤永隆行	昭42.1.28



●昭和42年頃の片男波部屋

床	志 山	千葉県君津市西坂田二七〇四	高橋忠造	昭13.8.22
床	北 陣	東京都墨田区吾妻橋一三五 編照院ビル七〇二号	萩尾正則	昭26.4.29
床	川 (元玉富七)	東京都墨田区石原一三三九	阿久津 茂	昭24.11.24

(6) 佐渡ヶ嶽部屋

東京都墨田区大平四ノ一八ノ一三
鎌倉 紀雄 (元琴桜) (昭15・11・26)

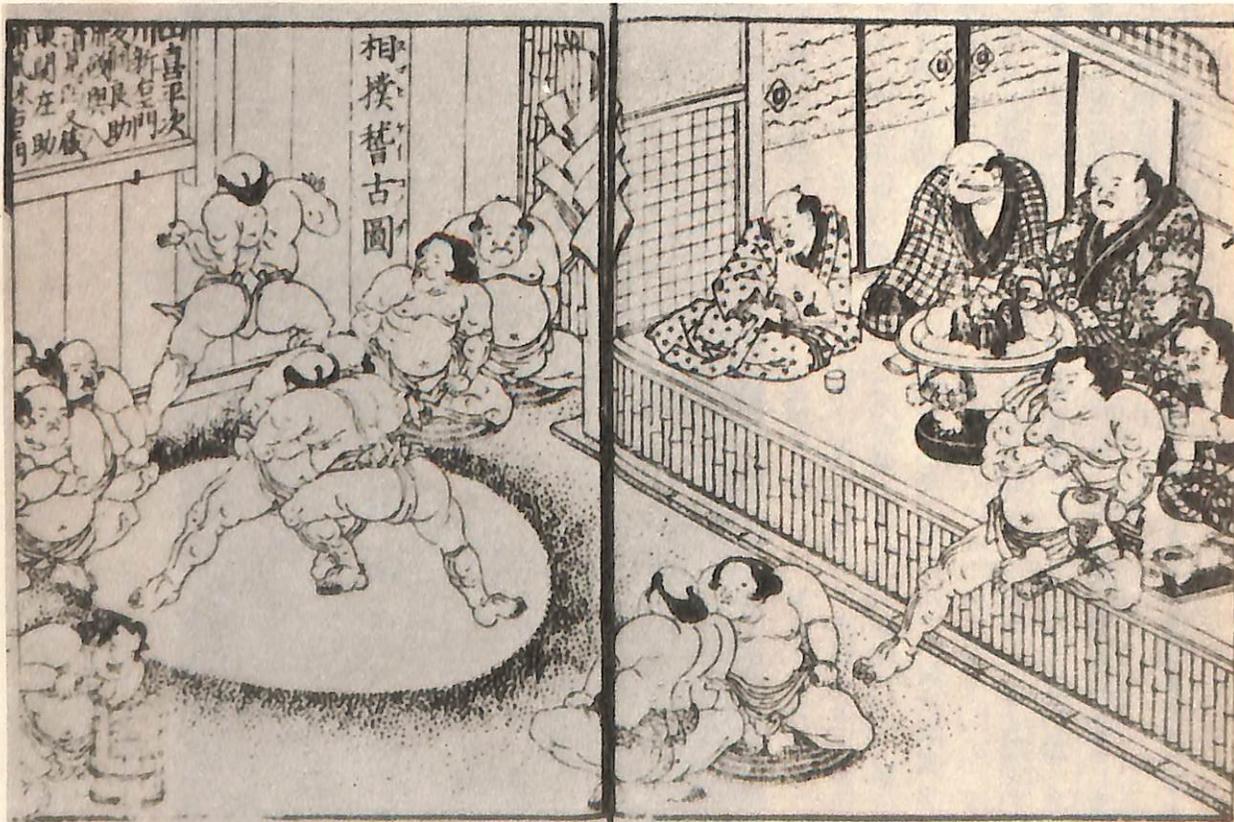


名跡としては天明元年(一七八二)にはすでにみえる部屋である。先々代は高砂系の元阿久川で、横綱男女ノ川を育て、相撲の普及に熱心でした。先代佐渡ヶ嶽は右四つの寄りで千代の山をしばしば破った小結琴錦。二所ノ関部屋から分離して、横綱琴桜、大関琴ヶ浜、関脇長谷川を育てた。三十二才で横綱になった琴桜は引退後年寄白玉を名乗り、部屋作りの準備中に先代が急逝。一転して佐渡ヶ嶽部屋の後継者になり、十二代目を襲名した。そして、部屋を大平に新築した。真面目で勤勉な親方は精力的に動き回り、新弟子の確保に着々と成果をあげ、琴風が十九才で入幕し、大関として活躍するようになった。指導面では親方の先輩にあたる元琴ヶ浜の尾車や現役時代のライバルでもあった元長谷川の秀ノ山親方とのチームワークもよくとれ、一層の躍進を期待されている。

大 園		琴 風	三重県津市栄町一・二	中山浩一	昭32.4.26
十 函		琴ヶ梅	富山県婦負郡八尾町黒田	北山 聡	昭38.10.5
		琴千歳	北海道千歳市千代町一・一〇	山本 稔	昭32.4.22
幕 下		琴ヶ岩	北海道岩内郡岩内町大浜	齊藤孝二	昭36.6.7
		琴 差	北海道増毛郡増毛町岩尾	香島春男	昭29.4.7
		琴稻妻	群馬県利根郡新治村猿ヶ京	田村昌弘	昭37.4.28
		琴乃花	青森県西津軽郡深浦町金十沢	古川誠悟	昭33.8.13
		琴 昇	北海道上川郡当麻町中央六区	外石利文	昭36.5.30
		琴大杉	千葉県市長作町一六六九	小林孝也	昭39.10.28
		琴 椿	沖縄県那覇市住吉町一四二	渡嘉敷克之	昭39.12.6
		琴三笠	神奈川県横須賀市衣笠四栄町	山田行也	昭39.9.1
		琴大和	福岡県山門郡大和町中島	古賀 剛	昭37.11.5
		琴白山	石川県小松市安宅町三三	釜野俊也	昭39.6.1
三 段 目		琴江户	東京都葛飾区細田町一三三・一八	滝本隆志	昭32.9.25
		琴久松	鳥取市西谷治五八・一	中原博明	昭36.12.13
		琴東郷	鳥取県東伯郡東郷町久見	山辺昭宏	昭39.11.27
		琴東伯	鳥取県東伯郡東伯町徳万	岩本俊文	昭37.11.11
		琴大菜	鳥取県東伯郡大菜町大字原	池田 求	昭38.2.16
		琴の里	北海道室蘭市東町四一九	加藤俊英	昭38.5.25
		琴ノ洋	北海道新野郡新野町新菜	西尾源正	昭41.2.2

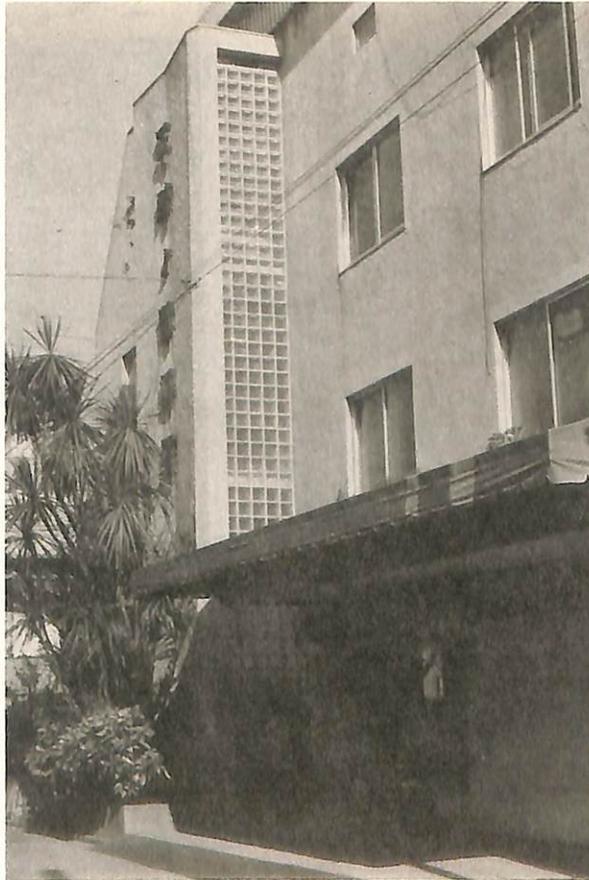
序 二 段		琴 柳	愛知県春日井市八事町三五五一	西本重熙	昭39.7.9
		琴今野	山形県尾花沢市尾花沢三九六一	今野満也	昭43.5.15
		琴南州	鹿児島県薩摩郡植木町	新 正信	昭38.5.26
		琴大島	鹿児島県大島郡和泊町国頭	坪山 勉	昭40.9.25
		琴宇草	東京都杉並区下井草一九九五	宇草琴人	昭41.4.8
		琴八潮	埼玉県八潮市鶴ヶ曾根富岡	林 菜二	昭42.1.22
		琴松沢	群馬県群馬郡美郷		昭
		琴弁慶	鳥取県東伯郡大菜町由良宿	長谷川義文	昭38.11.12
		琴 石	山形県市町新庄町宝泉一五六一	丸林 範明	昭38.11.2
		琴 晃	岡山県九幡町二	井上房雄	昭33.3.21
		琴 湊	茨城県那珂湊市和町二二七七	市川義勝	昭40.4.8
		琴 凰	熊本県十津寺町四八二	川上 功	昭39.10.14
		琴 甲	山梨県甲府市和戸町四〇四八	太田富貴	昭40.11.9
		琴日向	宮崎県神宮町四五二	田中秀明	昭34.4.11
		琴天旭	東京都杉並区天沼一三三・一二	角田博日	昭39.12.4
		琴宮城	沖縄県島尻郡貝志頭村年座	宮城清秀	昭39.11.16
		琴ノ浦	千葉県浦安市当代島	相馬文雄	昭40.11.22
		琴朝日	北海道旭川市九条西三三〇・二	檀上武則	昭34.3.30
		琴 劍	福岡県田川郡香春町中津原	宮田 登	昭39.7.6
		琴野川	千葉県市川市新田三三七・一六	会沢健三	昭38.9.8
		琴ノ城	沖縄県島尻郡豊見城村長堂	金城 清	昭37.1.2
		琴の島	札幌市南区澄川条二丁目	幾島久賀	昭40.11.30
		琴浪花	大阪府東成区南津守一四四・三〇	新出一郎	昭39.9.27
		琴別府	大分県別府市蓮川浜町四二一	三浦要平	昭40.10.17
		琴鶴見	大分県新見六組	鶴原勝利	昭40.5.29

琴ノ山	広島県佐伯郡佐伯町峠久保田	三島	緑昭40.10.4
序ノ口			
琴勝間田	静岡県御殿場市印野一六五〇三	勝間田	浩昭43.9.16
琴神谷	岐阜県可児市瀬田二四〇一	神谷正光	昭43.5.24
琴奈良	長野県上田市中央六六一	琴奈良靖司	昭43.6.1
琴干場	大分府尋常市金田町六一二九	干場初生	昭43.2.10
番付外			
琴黒沢	岩手県上閉郡大槌町赤浜	黒澤隆洋	昭43.10.1
年寄			
秀ノ山	(元長谷川)		
尾	東京都江東区猿江一六六五	長谷川勝敏	昭19.7.20
	(元琴乃富士)		
	東京都江東区猿江二二二〇〇六五	藤沢宗義	昭26.11.7
白			
	(元琴ノ嶽)		
	東京都墨田区横川四十二十三	竹内孝一	昭27.9.24
	G.H.M.シン、三〇三		
呼出			
琴	二 東京都墨田区大平田一八一三	上江田勝二	昭34.2.4
床山			
床依渡	東京都墨田区大平町一十一	安田秀一	昭41.11.11
	若菜七、四〇一号		
床良	福岡市東区馬出二九五六	松本祥一	昭41.4.12



(7) 二所ノ関部屋

東京都墨田区両国四ノ一七ノ一
北村 正裕(元金剛)(昭23・11・18)



初代二所ノ関は文化四年(一八〇七)、大関錦木塚右衛門が名乗ったものである。以後二所ノ関は南部系統の部屋であったが、四代目二所ノ関が明治三十七年に死亡すると、四代目と関係なく友綱部屋の海山が名跡をつぎ、部屋を創設した。横綱玉錦が現役との二枚鑑札で二所ノ関を襲名してから、大部屋の土台を築いたといえる。玉

錦の死後(昭和10・12)関脇玉ノ海が継ぎ、プロレスにいった力道山、芳の里や琴ヶ浜(佐渡ヶ嶽)を育てた。戦後関取衆の合議制をへて大関佐賀ノ花が八代目を継いだ。その後花籠・佐渡ヶ嶽・片男波がそれぞれ分家独立している。二所ノ関親方は横綱大鵬を育て、部屋をビル形式にして相撲部屋高層化に先鞭をつけた。大鵬が独立して

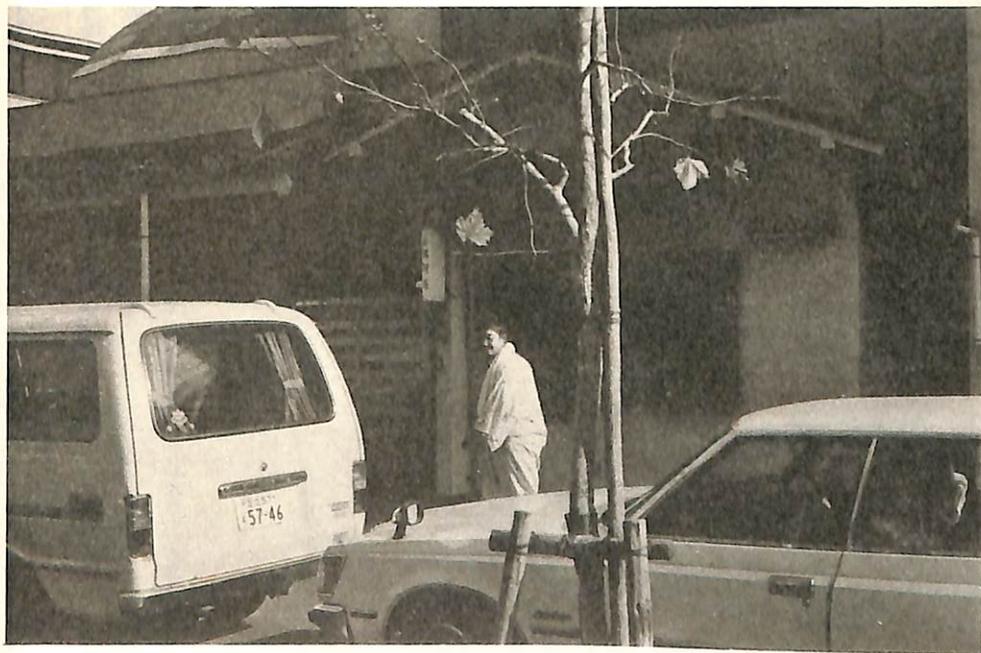
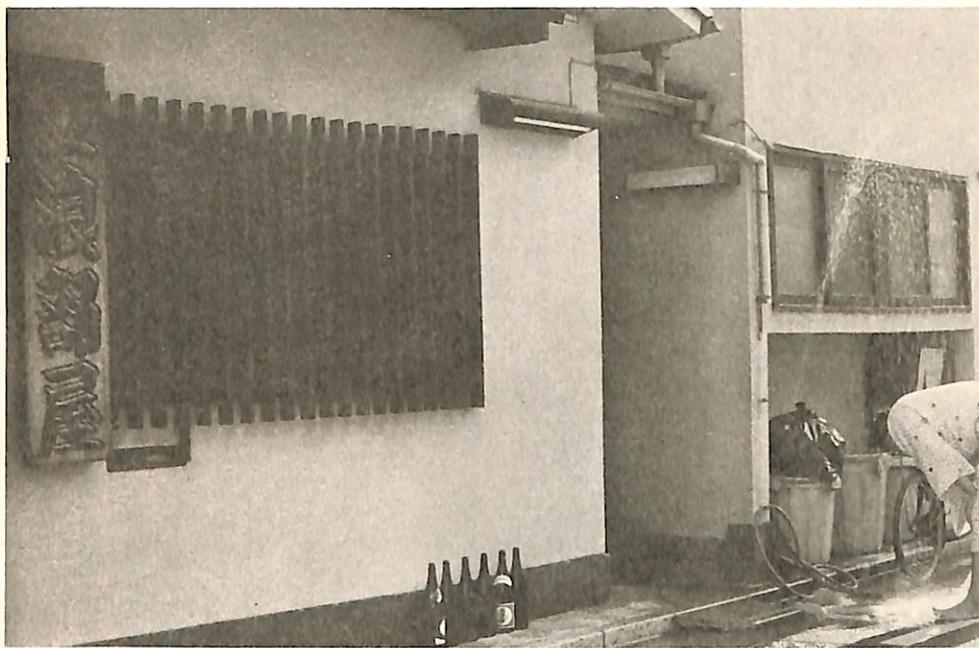
部屋をおこし、五十年三月には二所ノ関が急逝して部屋長老の湊川(元前頭十勝岩)が継いだ。部屋相続問題で押尾川(大関大麒麟)が力士十六人をつれて独立した。そして、故二所ノ関の次女と結婚した金剛が、五十一年九月引退して十代目二所ノ関を襲名し現在に至っている。

幕内	大徹	福井県大野市春日一十一二〇	南忠晃	昭三十一〇・二九
鳳凰	愛知県蒲郡市西浦町馬場二二二	壁谷友道	昭三十一・二八	
麒麟児	千葉県柏市豊四季七七四	垂沃和春	昭二八・三・九	
幕下	新井	京都市南区東九条御霊町	新井健一	昭三三・九・一
三役目	中野	愛知県知多郡武豊町長峰	中野伸治	昭三三・一・八
高橋山	大坂市浪速区元町四二二九六	高橋徳夫	昭二九・一二・一四	
土門	京都市中郡大宮町常吉	吉門美喜雄	昭三九・五・三〇	
序二役	飯室	山梨県南都留郡河口湖町能津	飯室 悟	昭四二・九・一二
二丈岳	福岡県糸島郡二丈町長石	猪口嘉平	昭三三・八・八	
白田山	新潟県豊栄市浦ノ入一三七六一	畠山由章	昭三三・八・二七	
峰乃郷	茨城県新治郡八郷町吉生	大沢 静	昭三三・一〇・三一	
倉地	東京都板橋区仲宿八十一	倉地隆之	昭四三・一二・一七	
序一口	谷村	富山県高岡市伏木湊町一八九	谷村栄治	昭四三・三・一〇
佐野	大坂府南河内郡狭山町菜葉木	佐野勝彦	昭四三・一〇・二六	
年寄	風(元宮柱)	千葉県船橋市松立一三二七	江口義雄	昭一一・一・二二

行司	式守慎之助	千葉県松戸市馬橋一四八四	桜井春芳	昭一一・三・二六	
	木村忠雄	千葉県松戸市馬橋一九七〇・一六	中島忠雄	昭一五・八・六	
	式守隆司	佐賀県三養基郡北茂安町	亀川 隆	昭四三・一二・一六	
	若者頭	佐賀光	千葉県市川市原木三六六二二	太田健吾	昭九・四・二九
	世話人	滝見山	東京都葛飾区亀有三四二八	藤江延雄	昭二・九・二九
	呼出	賢市	東京都江戸区平井七三三・一十	田村賢市	昭三・一二・九
		永男	東京都足立区大谷田三一九・九	福田永昌	昭五・三・一九
		政博	東京都墨田区立川二一・一五	佐藤政博	昭一一・一一・八
		安雄	東京都荒川区南千住六・五五・二	高沢安雄	昭一一・三・二八
		床山	東京都墨田区千歳三二五・二二	平島和之	昭三三・五・二六

(8) 立浪部屋

東京都墨田区両国三ノ二六ノ二
安念 治(元羽黒山)(昭9・2・23)



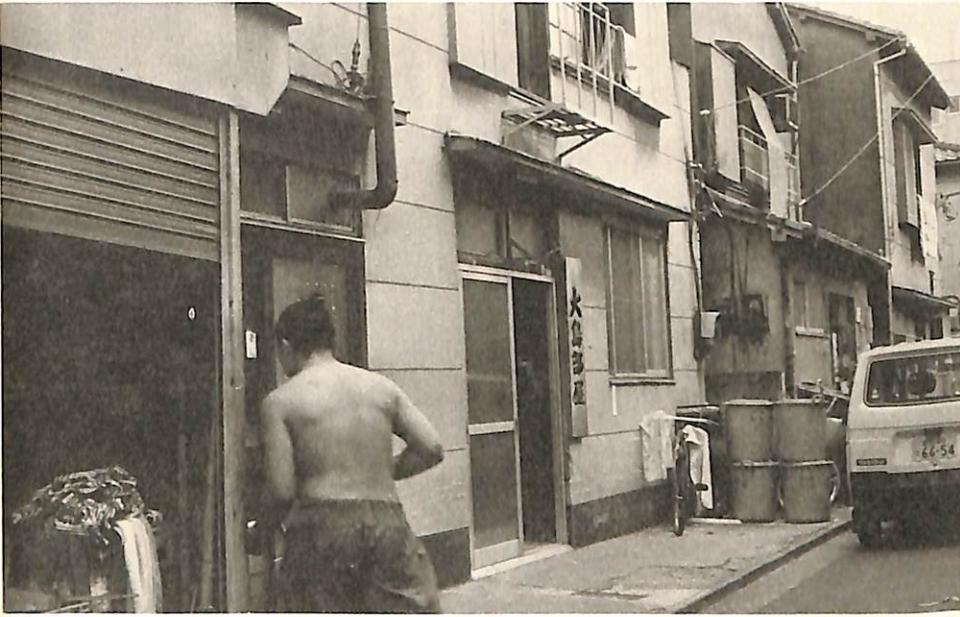
立浪の初代は明治初期に始まるが、現在の立浪部屋の実質的創立者は、小兵のわざ師であった小結緑島が大正四年に開いたものである。一代で双葉山・羽黒山の両横綱と、大関名寄岩の立浪三羽鳥を育てた。双葉山十二回、羽黒山七回も優勝している。双葉山は「双葉山道場」を名乗り、のち時津風部屋となり、緑島の立浪親方のおとは、横綱羽黒山が五代立浪となつて継いだ。現在の六代目は、安念山から関脇羽黒山となり、先代(横綱羽黒山)の長女と結婚し、引退後追手風を名乗っていたが、昭和四十四年立浪を襲名したものである。部屋は両国駅の真前で、ホームからも稽古風景がよくみえるものである。部屋の指導は元関脇北の洋の武隈親方と、その女婿の元関脇黒姫山の出来山親方などもあたり、北尾が目立って来ている。立行司木村庄之助もこの立浪部屋に属している。

幕内	北尾	三重県津市乙部二三	北尾光司	昭38.8.12
幕下	立富士	静岡県富士宮市青木五二〇	渡辺裕次	昭37.7.26
	立 緑	宮崎県延岡市中川原町	安藤克己	昭37.7.28
	北吹雪	北海道旭川市六条通り二五丁目左号	伊藤広泰	昭38.10.28
三役目	大獅子	大阪府南河内郡美原町阿弥	牧野耕蔵	昭38.12.13
	翠 鵬	北海道斜里郡清里町	住吉修一	昭37.10.12
	清の花	三重県尾鷲市向井町一九八	東 清孝	昭39.5.19
	立北見	北海道北見市桜町一二五	鈴木教一	昭39.12.31
序二役	轟天雷	東京都新宿区上落合三三〇	戸田政美	昭37.9.21
	高 虎	三重県津市柳山本町一四六二	小橋紀夫	昭40.6.24
	上 山	茨城県猿橋郡境町伏木	上山 進	昭42.11.2
	序ノ口			
	立吉田	横浜市南区芥ヶ谷一二二二	吉田春彦	昭40.5.14
	立田仲	大阪府高槻市緑ヶ丘一十二十	津熊憲二	昭41.4.22
岡 部		山形県鶴岡市大宝寺町四三三	岡部勝雄	昭43.7.6
年 寄				
中 川		(元清惠波)		
		東京都江戸川区東小岩六一五二八	大上戸清隆	大12.6.2

武	隈	(元北洋)		
	玉 垣	(元若浪)		
		東京都墨田区西新堀四八八四 オリエンタル新堀コーポ二〇二号	富山 順	昭16.3.1
	雷	(元羽黒岩)		
		東京都墨田区亀沢二八八四 ライオンビル二階西国二〇六	戸田智次郎	昭21.6.30
	追千風	(元追風山)		
		埼玉県草加市氷川町一〇五二一四	山口 貢	昭13.6.16
	出来山	(元黒姫山)		
		東京都墨田区西国三二五九九七〇二	田中秀男	昭23.11.12
行 司				
	木村庄之助	東京都中野区中央一二〇二九	熊谷宗吉	大14.12.3
	木村正三郎	千葉県鎌ヶ谷市中沢一四七九二三	阿部正夫	昭15.12.3
	木村城之介	千葉県市川市大和田四八八九	内田順一	昭21.10.29
	木村雅之助	千葉県船橋市習志野台三三五一	武田雅史	昭35.12.29
床 山				
	床 光	東京都墨田区本所三六六七 栄ビル四〇三	遠藤光雄	昭12.2.16
	床 辰	佐賀県杵島郡江北町八丁	淵上純一	昭37.12.9

(9) 大島部屋

東京都墨田区両国三ノ五ノ三
太田 武雄 (元旭国) (昭22・4・25)



立浪部屋の若乃森が襲名していた年寄名を、元大関旭国が継ぎ、部屋づくりをしたものである。旭国は大関二十一場所、関脇六場所、小結三場所を務めている。昭和五十四年九月場所で、新横綱三重ノ海との一戦で右肩を痛めて引退。引退して二代目年寄大島を襲名し、さっそく立浪部屋から独立して、新生大島部屋づくりにとりかかった。五十五年四月両国三丁目に部屋をつくり、土俵開きを行い、弟子も十二名になっていた。以来弟子の育成につとめた甲斐もあり、幕内旭富士等将来を期待される力士に富まれている。その数も三十名近くにもなり、建物の改築にとりかかり、仮部屋を九重・間垣部屋に近い亀沢にあげていたが、昭和五十九年暮れには、しょうしゃな四階建ての新部屋が完成した。

旭 湖	群馬県高崎市下豊岡町三二四	西田靖司	昭42.11.29
旭 晃	群馬県高崎市洪川町三三七六	小野関純也	昭43.5.28
旭 泰山	千葉県市川市中国分三四一八	木村泰山	昭43.9.18
旭 森	兵庫県西宮市石左町一六二八	森本孝彦	昭42.9.13
旭 堤	群馬県高崎市剣崎町二二一八	大竹信夫	昭40.10.20
序二致			
小 林	北海道室蘭市沃町三〇	小林 茂	昭41.7.11
旭 嶺	宮崎県北諸方郡山之口町富吉	柚木崎 茂	昭39.2.19
旭 鶴	東京都練馬区北町二二二七十一	本多 純一	昭39.8.5
旭 洋	東京都葛飾区青戸三六二七十一	高萩治郎	昭39.1.6
旭 島	東京都江東区白河三四一五二〇二	小沼竹生	昭39.2.18
旭 鷹	兵庫県姫路市城東町四八八	星野貴彦	昭41.3.12
三重旭	三重県鈴鹿市北若松町山中四九二	伊東照清	昭39.4.15
旭 浪	兵庫県西宮市二見町三二五	尾崎博史	昭40.5.7
三致目			
土佐旭	高知県幡多郡佐賀町市野之川	三浦富三郎	昭39.7.18
旭 山	鹿児島県大島郡徳之島町	波田和泰	昭39.10.14
旭 天佐	大阪府池田市兵服十一六	増田憲治	昭40.11.19
旭 風	栃木県小山市駅前通り一三三十一	佐藤 学	昭40.3.3
旭 桜	北海道旭川市錦町十二丁目	葛西一雄	昭39.12.28
旭 鵬	愛知県知多郡阿久比町	白土貴彦	昭40.11.3
幕 下			
旭 富士	青森県西津軽郡木造町曙	杉野森正也	昭39.7.6

旭 差	富山県魚津市神明町十二	岩田潤一	昭42.1.20
北斗旭	札幌市南区澄川一条四、五、七	平 鉄治	昭43.10.24
序ノ口			
忍 国	名古屋市中川区春田二三一	高橋 忍	昭43.4.25
江 戸 旭	東京都清瀬市旭谷五三三二一〇六	村田清司	昭42.10.25
安 芸 旭	広島県府中市須町四八一	四海雅士	昭39.6.11
旭 大 翔	北海道小樽市若竹町五一五	蝦名 大	昭43.4.7
秩 父 旭	北海道南竜郡秩父別町二六区	五十川健一	昭43.9.22
松 井	岐阜県本巣郡栗南町美江寺	松井和彦	昭42.6.17
米 山	新潟県北蒲原郡加治川村金塚	米山賢二	昭41.6.9
番付外			
千 葉 旭	千葉県市原市権津一三七三六	太田修一	昭43.4.21
行 司			
木村寿行	鹿児島県大島郡徳之島町	波田寿和	昭42.6.27
床 山			
床 幸	北海道上川郡愛別町旭山	太田孝幸	昭43.1.24



(10) 宮城野部屋

東京都墨田区緑四ノ一六ノ三
山村 泰三 (元広川) (昭12・5・28)

宮城野部屋の歴史も古く、江戸相撲が繁栄をきわめた、天明・寛政時代に創立した年寄名である。

しかし、部屋として栄えるのは天保の頃からといわれる。七代目宮城野は横綱鳳で、現役時代本所小泉町(現両国二)に鳳部屋をつく

っていたが、大正九年九月から宮城野部屋を継いだ。昭和二十九年春、横綱になった吉葉山は、本家の高島部屋をはなれて、横綱に「

吉葉山道場」をつくり独立する。三十三年引退後年寄として吉葉山を名乗るが、三十五年一月宮城野

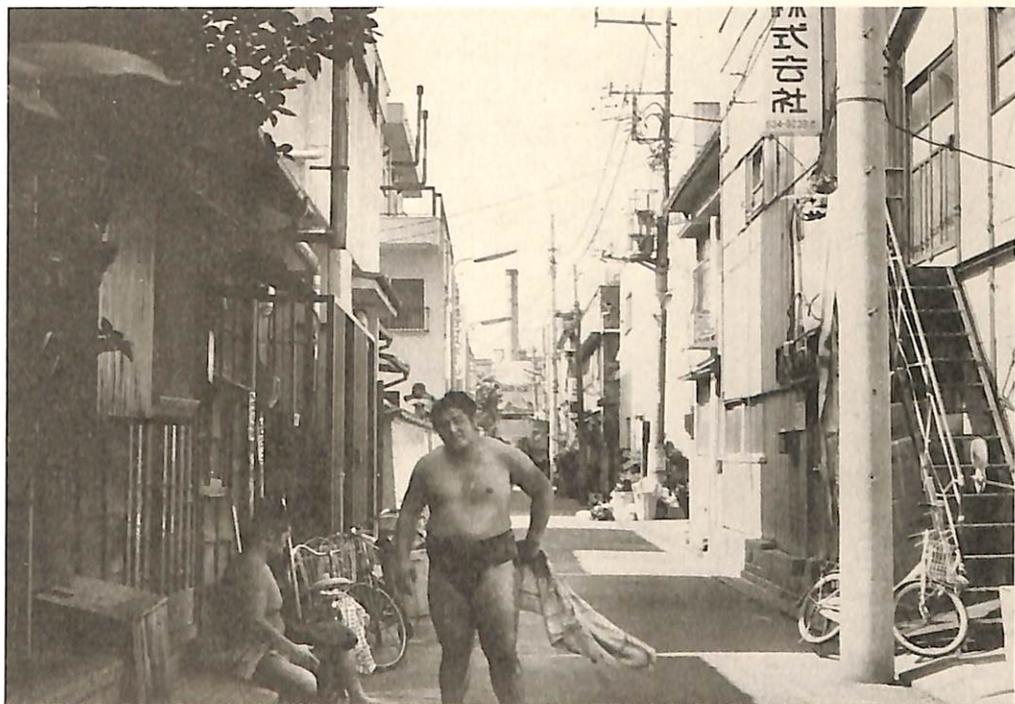
八代目を襲名した。八代宮城野(吉葉山)没後、元小結広川が九代目を継ぎ、部屋を緑四丁目に移している。先代の部屋の建物は、土俵をそのままに活した相撲料理「

吉葉」となって繁昌している。

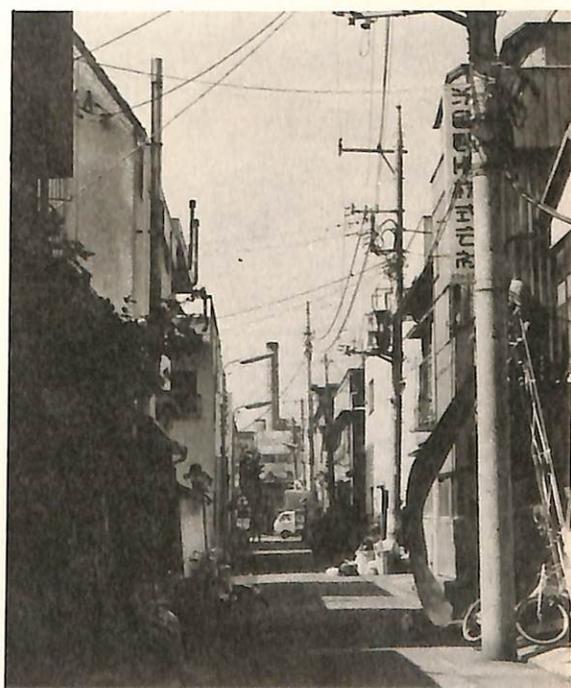
行司	赤城	赤城 雅規	昭40.6.25
番付外	茨城県下館市甲二七五		
序ノ口	田村	田村 竟	昭43.12.30
田村	徳倉市新浜町一四五四三九		
四介	一 東京都北区赤羽台九二〇一	四介 了	昭43.7.13
序二段	川 竜	川 植 一 政	昭39.2.28
川 竜	大板府堺市浜寺石津町西字二五		
岩 崎	横浜市南区清水ヶ丘一七九	岩 崎 悟	昭39.8.20
古河城	茨城県古河市中田二七七七八	後藤 祐司	昭42.8.27
三役目	大玄海	森山 秀志	昭28.3.1
大玄海	北九州市小倉区大正町一		
最上山	山形県東村山郡大石田町大浦	青木 正	昭38.1.4
日高山	北海道静内郡東静内町静内	滝川 喜代三	昭31.7.5
日高山	北海道静内郡東静内町静内		
沃 幡	茨城県常陸太田市金井町一九〇二	沃幡 美智浩	昭36.2.18
幕下	港 龍	沃原 安啓	昭36.9.12
港 龍	徳島県小松島市中田町千代原		
巴の洋	北海道函館市大町三二	沃崎 政実	昭32.4.5
王地海	北海道足寄郡足寄町中央五区	石 沢 美 三	昭34.4.5
竹葉山	福岡県浮羽郡浮羽町	田 崎 誠	昭32.8.21
十両			

木村吉之輔	大板府岸和田市神須屋町三三八二	野内 五雄	昭34.12.23
呼 出	勝 己	加藤 克 己	昭12.9.1
勝 己	東京都江戸川区端江三三〇		
床 山	床 蜂	加藤 章	昭29.8.17
床 山	横浜市戸塚区戸塚三四二〇		
床 宮城	東京都葛飾区堀切二六十二	熊西 一郎	昭41.9.24



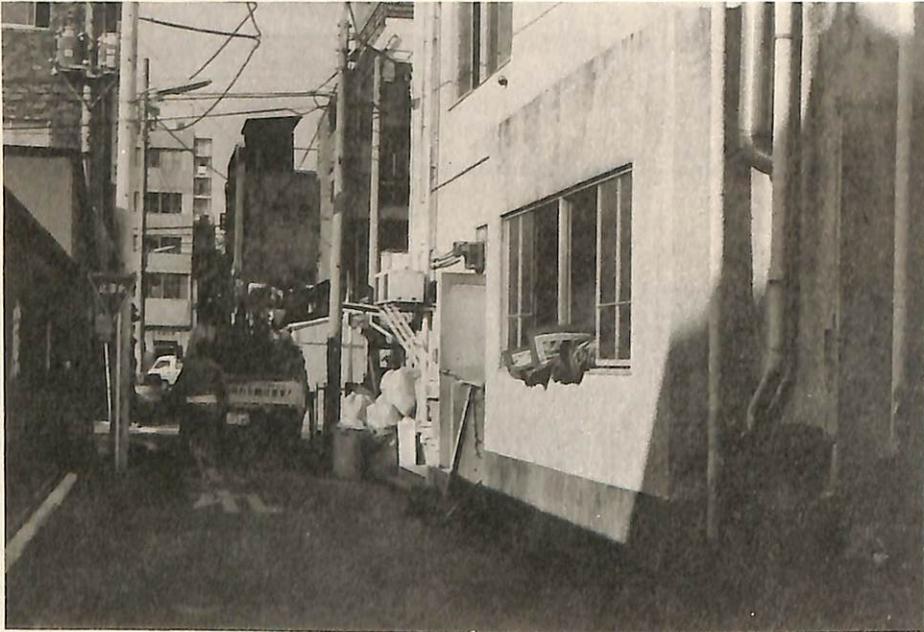


●昭和42年頃の宮城野部屋



(11) 時津風部屋

東京都墨田区両国三ノ一五ノ三
内田 勝男(元豊山)(昭12・8・18)



時津風部屋も大阪相撲の宝暦頃から続く由緒ある部屋であったが、昭和二年東京相撲に合流してからは、かつての大部屋も年寄名として名跡をとどめるにすぎなかった。この年寄名を譲りうけた、大横綱双葉山は、現役中の昭和十六年夏場所前、立浪部屋から別れて、両国三丁目の糸川部屋に「双葉山道場」を開いた。のち、荒汐、甲山、二十山の三部屋が合流した。昭和二十一年正式に時津風部屋を名乗り、鏡里・大内山・北葉山・豊山などの力士を育成した。昭和四十四年十二月、双葉山の時津風親方が没すると、立田川を襲名していた鏡里が、時津風を継ぐが、豊山の引退によって四十三日間で交代し、豊山が十四代時津風を襲名し、今日に至っている。

幕内	蔵間	十両	大豊	大朝	凱皇	市ノ渡	幕下	天ノ山	松浦河	三般目	蒼龍	松龍山	葛ノ花	雷峰	片山	園	浜錦	大乃島	海松山	代々ノ花	柴田	横江	三惠山
	滋賀県野洲郡野洲町野洲		新潟県北魚沼郡堀之内町吉永	北九州市八幡東区前田三〇〇二	新潟県十日町市馬場丁一四五二	青森県上北郡天間林村天間館		佐賀県多久市多久町二二七四	佐賀県東松浦郡鶴西町		新潟県中魚沼郡中里村貝野	米國ワシントン州シアトル市一三、九一九	東京都葛飾区白鳥一、七九九	大分県玖珠郡九重町田野	京都市伏見区深草西伊達町八八八	大分県中津市小祝二九九	横浜市南区永田町一〇八三	広島県東広島市西条岡町四三三	大坂市西成区萩之茶屋三、五一六	東京都渋谷区代々木一、一七一	静岡県浜松市美万原町一七八六	新潟県草津市北山町七三五、五	大坂府東大坂市吉松一、〇九八二
	蔵間龍也		鈴木栄二	波多野兼二	上村仁	市ノ渡三四四		尾形静雄	牧山浩嗣		山田昇	末次口バートン 万作應	川畑誠	宇野博	片山周三	園 和高	佐々木義信	大島修	田中秀俊	梅原義和	柴田広宜	横江英樹	大島智之
	昭27.12.16		昭30.3.29	昭23.1.4	昭32.4.12	昭34.4.2		昭29.1.1	昭33.3.9		昭34.3.1	昭34.12.27	昭35.8.14	昭37.4.23	昭38.2.24	昭39.10.29	昭36.3.20	昭37.1.18	昭38.7.24	昭37.11.11	昭38.8.16	昭40.4.14	昭40.10.16

若鬼竜	序二般	福嶋	石川	総ノ国	久保山	荒川	井川	増子	序ノ口	喜田	寺木	番付外	東山	喜多	番付外	年寄	勝ノ浦	荒川	
青森県八戸市鍛冶町日之出町		新潟県松浜町三三三五	広島市安佐北区高陽町中深川	千葉市寒川町三五四	大坂市西成区天下茶屋三、一七	新潟県上越市中央五、九、一六	福岡県粕屋郡久山町山田	新潟県北蒲原郡黒川村黒川		三重県四日市市日永二七、一	滋賀県彦根市後三茶町五五一		東京都杉並区阿佐谷北二六二三	愛知県犬山市大宮大山宇西吉春			大坂市城東区東中浜三、五、九	東京都江戸川区元一色町六七二	横浜市鶴見区下末吉三七、三〇
笹川勝平		福嶋隆浩	石川清文	市川泰治	久保武文	荒川武士	井川忠之	増子潤		喜田 寺	寺木良友		朝倉 章	喜多 温		龜山直樹	今川光雄	大見芳光	
昭35.11.7		昭40.4.30	昭41.10.21	昭41.12.17	昭40.7.8	昭41.9.16	昭40.10.17	昭40.1.17		昭42.11.6	昭42.12.1		昭38.10.26	昭43.9.24		昭42.7.1	大12.12.2	大12.6.5	

枝	川(元北葉山)	東京都墨田区千歳一七二	山田英俊	昭10.5.17
条	川(元双ッ龍)	東京都中野区野方四一七、九	荒木徳義	昭5.3.3
富士ヶ根	(元特葉山)	東京都江東区森下四二五、二	春木敏男	昭19.5.5
錦	島(元双津竜)	東京都墨田区東五反田五二一、六 池田山コナ、ハ〇一	山本順一	昭29.2.28
行司	式守伊三郎	千葉県印旛郡八街町八街	松井利雄	天14.2.13
呼出	吉	東京都江東区高橋二、九	飯田寛吉	昭5.12.7
兼	三	東京都墨田区西国四二七、九 山治マニヤン、四〇二	上田兼三	昭9.7.24
忠		東京都江戸川区船堀七二、五	上田 忠	昭12.1.28
床	山			
床	治	東京都北区塚船三七、五、四〇七	森 鉦男	昭11.1.17
床	好	新潟県十日市市高島一五七、三	涌井好三	昭39.11.29



●昭和42年頃の時津風部屋土俵づくり

(12) 立田川部屋

東京都墨田区両国四ノ七ノ十一
奥山喜世治(元鏡里)(大12・4・30)



行司	式守喜治 青森県八戸市青葉二二二九	伊調百寿 昭43.10.23
立田山 (元大内山)	東京都墨田区両国二九九六	大内平吉 大15.6.19
鍛山 (元若葉山)	名古屋市中村区宿跡町一四五	青山貞雄 大11.11.9
二十山 (元青ノ里)	千葉県八千代市萱田町二八〇六	小笠原盛 昭10.11.13
式年寄 秀(元潮輝)	東京都江東区平野一〇一〇	村上義秋 大13.9.25
土田川	青森県上北郡六戸町上吉田	新戸部幸夫 昭42.5.4
序ノ口		
引地改 若信夫	福衛市東沃町六一九	引地政志 昭42.4.1
高橋洋	千葉市白旗二二九〇八	高橋洋一 昭42.2.10
序二役		
若天山	千葉県印旛郡白井町白井	木村勝広 昭37.6.30
三役目		
福ノ里	岩手県九戸郡軽米町晴山	福田邦男 昭36.6.4
高道	北海道茅渚郡森町字本町	高道治 昭38.7.26
幕下		

元横綱鏡里が親方の部屋で、昭和三十三年初場所、東張出横綱鏡里は十四日目同僚の千代の山、千秋楽に栃錦に勝ったが、九勝六負で、場所後に引退した。吉葉山の引退につづき、同じ場所で二人の横綱が引退した。

時津風部屋の基ともなった、糸川部屋出身もあって年寄糸川を継ぐが、三十六年一月年寄等の定年制の発足によって、立田川（元二十一代庄之助）を襲名する。そして、四十三年十二月時津風理事長（元双葉山）の死去にともない、時津風を襲名するが、二ヶ月後同部屋の豊山が引退し、錦島を継ぐが、時津風を譲り、立田川に戻った。しかし、四十六年十一月時津風部屋から独立して、立田川部屋を両国四丁目に創設した。



〈一門別各部屋図〉

〔出羽海一門〕

出羽海 春日野 武蔵川

三保ノ関（別系）

〔二所ノ関一門〕

二所ノ関 佐渡ヶ嶽 大鵬

〔花籠一門〕

花籠（二所ノ関から分離）

二子山―藤島 間垣

片男波（二所ノ関から分離）

押尾川（二所ノ関から分離）

放駒

〔時津風一門〕

時津風（立浪から分離）

立田川

湊

（別系）伊勢ノ海―鏡山

（別系）井筒―陸奥

〔高砂一門〕

高砂 若松

大山

高田川

九重（出羽海から分離）

〔立浪・伊勢ヶ浜一門〕

立浪―春日山

大島

朝日山―大鳴戸

伊勢ヶ浜―木瀬

宮城野 友綱―熊ヶ谷―安治川

(13) 井筒部屋

東京都墨田区両国二ノ二ノ七
福園 昭男 (元鶴ヶ嶺) (昭4・4・26)



序二枚			三枚目			幕下			幕内						
山岸の里	大塚府岸和田市東大路町一六〇	田村喜一	昭41・9・8	滝の嶺	大塚府岸和田市東大路町一六〇	田村真一	昭36・10・20	貴ノ嶺	福岡県遠賀郡水巻町吉田	岡田明彦	昭34・1・23	逆鉾	鹿児島県姶良郡加治木町	福園好昭	昭36・6・18
好の里	奈良県北葛城郡香芝之町閑屋	今西好考	昭39・1・5	大田村	鹿児島県曾於郡財部町南俣	田村正二	昭39・1・19	福ノ園	鹿児島県姶良郡加治木町	福園好政	昭34・11・24	霧島	鹿児島県姶良郡牧園町	吉永一美	昭34・4・3
笹平	鹿児島市上福元町四一三四	笹平利浩	昭42・12・27	薩摩錦	鹿児島県姶良郡蒲生町上徳久	上野浩治	昭36・2・23	若薩摩	鹿児島市若菜町三八一八	野平武志	昭39・5・25	陣岳	鹿児島県曾於郡志布志町	中山隆	昭34・12・24
川崎	鹿児島県熊毛郡上屋久町宮浦	川崎利	昭34・7・7	大田中	宮崎県湯郷郡高鍋町上江	田中幸一	昭38・11・1	伯山	福岡県三ツ井	ハスコアル・ボスキ	昭31・11・28	寺尾	鹿児島県姶良郡加治木町		
紫筒山	東京都葛飾区有田二八・一三	嶋津慎司	昭35・11・10	川崎	鹿児島県湯郷郡高鍋町上江	嶋津慎司	昭35・11・10					十両			
薩洲洋	鹿児島県指宿市東方二二九九七	吉崎克幸	昭32・6・7	好の里	奈良県北葛城郡香芝之町閑屋	今西好考	昭39・1・5					薩洲洋	鹿児島県指宿市東方二二九九七	福園好文	昭38・2・2

大島山	東京都杉並区西荻南三二〇四	大島啓統	昭38.6.27
天竜川	長野県飯田市山本六七三六九	金田純元	昭43.2.11
薩摩竜	鹿児島市伊敷町五〇六六	坂元正志	昭40.7.31
梶ヶ山	鹿児島県垂水市二川五六八二	梶ヶ山高広	昭42.5.31
桜島山	鹿児島県鹿児島郡桜島町小池	萩原正乙	昭40.9.25
原田	鹿児島県薩摩郡赤郷町鳥丸	原田寿直	昭44.4.1
川窪	鹿児島県国分市清水町東一五七四、五	川窪幸治	昭41.10.24
序ノ口			
宮園	奈良県大和高田市池田二八六四	宮園 誠	昭42.10.20
今田	広島市中区富士見町一三〇一	今田賢二	昭44.1.17
行司			
式守與之吉	東京都中央区日本橋浜町 三二二、三二八、三二七、三三〇	五反田文男	昭41.1.2
式守敏広	東京都江戸川区西一之江二四五六八	山崎敏広	昭23.5.16
呼出			
鶴土	東京都墨田区西国二二七	佐藤佳弘	昭42.2.11
床山			
床鶴	長野県松本市埋橋二一六三三	鍋島光男	昭35.7.22

初代は寛延の勸進元井筒伴五郎から始まる。しかし、年寄名だけになっていたので、初代西ノ海が六代目となって中興し、緑町一丁目に部屋を開いた。九代目が先々代の鶴ヶ嶺で、亀沢一丁目にも部屋を移し、先の鶴ヶ嶺は12代君ヶ浜をつぎ、十代目は陸奥（星甲）が名乗った。しかし、十一代目は九重

部屋の横綱北の富士が襲名し、江戸川区春江に部屋を作るが、元千代の山の九重親方の死去により、北の富士が九重部屋をつぎ、先の鶴ヶ嶺の君ヶ浜が、十二代目井筒となり、両国二丁目にも部屋を開き、実子である逆鉾・寺尾などを育て、活気に満ちている。



(14) 九重部屋

東京都墨田区亀沢一ノ一六ノ一
竹沢 勝昭（元北の富士）（昭17・3・28）



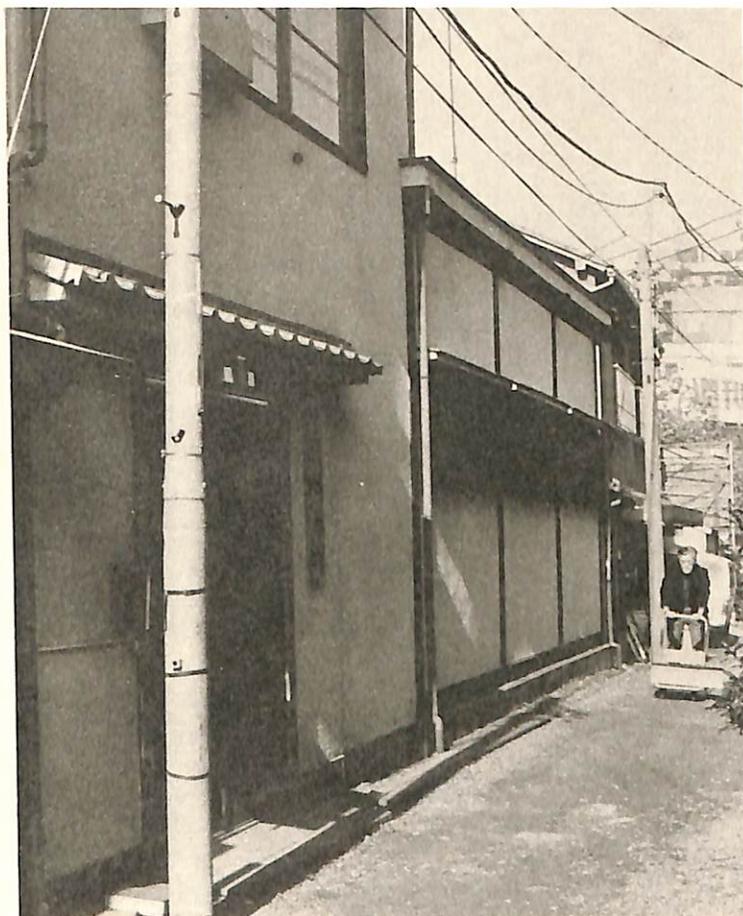
九重部屋も現在十三代目となり、江戸時代より継ぐ名称で、嘉永六年（一八五三）の相撲細見では、「本郷大根畑、浦風門人大幸山改め、九重武次衛門」ともみえている。昭和四十二年一月、元横綱千代の山が、大関北の富士以下十人の力士を連れて出羽海部屋から独立し、高砂一門に移り、十二代目九重を襲名した。九重部屋で横綱になった北の富士は、優勝十回を記録し、四十九年名古屋場所を最後に引退し、十一代井筒を襲名し、江戸川に部屋を作るが、元千代の山の九重親方の死去にともない、十二代目九重を継ぎ、部屋を新国技館に近い亀沢一丁目^{関脇}に新築し、横綱千代ノ富士^{関脇}、関脇保志等をかかえ、活気に満ちた部屋となっている。

横綱	千代の富士	北海道松前郡福街町塩釜	秋元 貞	昭30.6.1
幕内	保志	北海道広尾郡広尾町東一条	保志信芳	昭38.6.22
幕下	富士光	千葉県船橋市高根台六四五-四	矢木哲也	昭35.11.6
	孝の富士	東京都大田区羽田六ノ六ノ三	安田忠夫	昭38.10.9
	峰の富士	横浜市新奈川區金港町二八	今関俊明	昭35.4.7
	千代桜	大阪市西成区津守二四二	鈴木 茂	昭38.5.23
	富士の里	北海道瀬棚郡今金町今金	流 文彦	昭34.10.23
	嵐富士	福岡県柳川市本町四六一	岩本秀之	昭33.7.8
三銃目	千代の花	青森県弘前市境関字富岳	阿保久章	昭37.7.10
	大富士	東京都大田区大森東四三六九〇	伊藤敬司	昭33.8.26
序二銃	千代東	東京都江川区龜戸五三六二	工藤大洋	昭38.8.21
	千代嵐	山形県酒田市新塩字豊森	長谷川晴重	昭42.2.25
	千代錦	北海道札幌市本町内町大平	三浦敏美千	昭41.10.22
	千代の海	北海道函館市宝来町二七〇	市川智久	昭39.6.4
	千代光	東京都墨田区両国四ノ十二二	白根 正一	昭40.2.27
	元 木	青森県弘前市青樹町二二三	元木隆夫	昭43.2.13
鈴 木	鈴木	東京都大田区蒲田五ノ六ノ八	鈴木貴雄	昭44.2.1

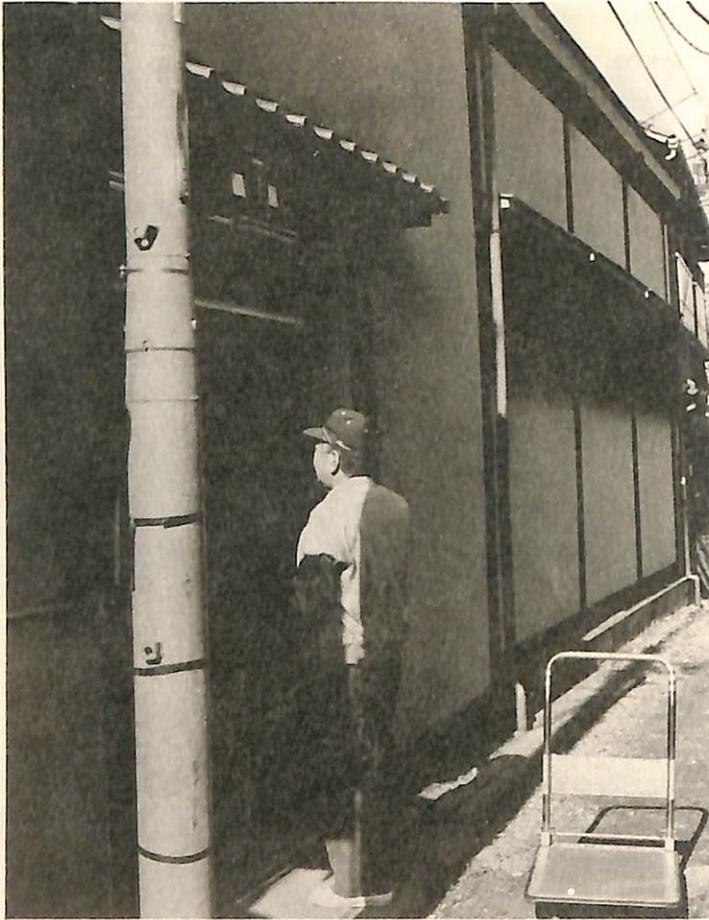
序ノ口	千代剣	東京都台東区根岸五ノ八十一	木村 卓	昭41.8.13
	荒 谷	神奈川県茅崎市鶴ヶ台二ノ四〇六	荒谷信孝	昭43.3.7
	千代の里	北海道函館市上湯川町五ノ二ノ四〇二	杉 潤 崇	昭41.11.11
	塩 田	埼玉県羽生市牛子林一九四	塩田東洋	昭40.12.18
年 寄	君ヶ浜元北瀬海			
	東京江川区南小岩二ノ一ノ十	土谷 孝	昭23.7.2	
行 司	木村恵之助	東京都府中市武蔵台一四ノ八	洞沢裕司	昭36.10.30
	木村俊明	岩手県一関市地主町二一四	小島俊明	昭40.4.21
呼 出	重 夫	東京都墨田区亀沢一ノ六ノ一	谷口卓美	昭41.1.25
	床 山			
	床 岳	栃木県鹿沼市龜和田町一九五	増山岳生	昭42.2.10

(15) 若松部屋

東京都墨田区両国二ノ十ノ八
 松崎 正勝 (元房錦) (昭11・1・3)



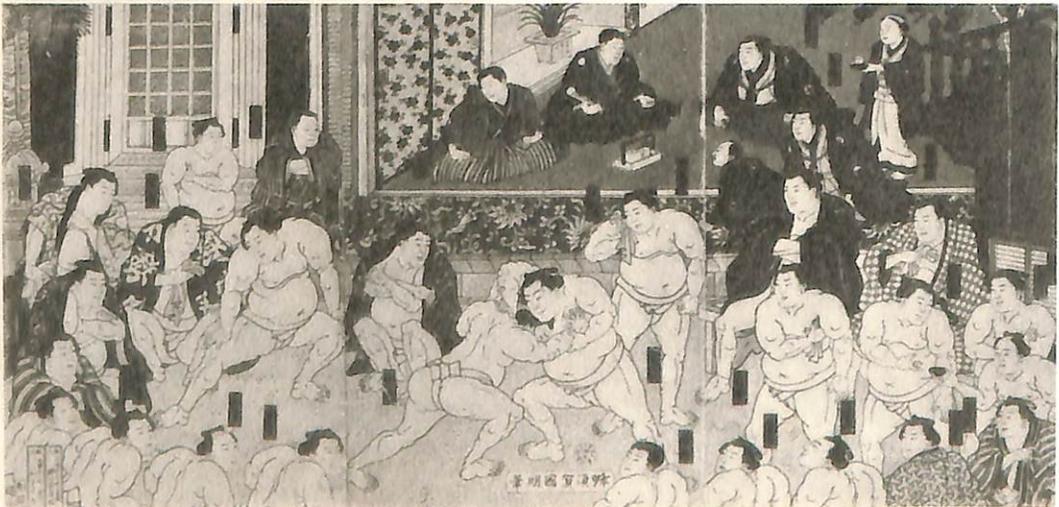
三役目		翔 飛	兵庫県尾崎市東灘波町三二二四	清水一秀	昭49・9・8
安芸東		広島市西区広瀬北町五一	東 直樹	昭49・7・22	
都 龍		宮崎県都城市上川東四一五三	岡元克己	昭41・11・8	
序二役		山 嵐	大阪府守口市金田町二二四	石原良房	昭39・5・2
房 井		秋田県平鹿郡十文字町仁井田	永井幸治	昭41・10・17	
房ノ瀨		神奈川県中原通り一五二	浅田康裕	昭42・3・15	
徳ノ島		鹿児島県大島郡徳之島町徳和瀨	松田哲広	昭39・12・28	
小 桜		大阪市東住吉区今川五五三〇	高坂欣司	昭40・11・13	
序ノ口		房乃龍	愛知県宮市大江三十二	加藤佳保	昭43・11・1
房乃富士		愛知県宮市富士一七	市瀨 洋	昭44・3・16	
番付外		鹿 島	愛媛県北條市辻一三四一	大堀敦志	昭41・4・10
世話人		宮 坂	東京都江東区東砂二二二一九	宮坂 清	昭49・9・5
床 山		床 義	宮崎県都城市平江町一二	板坂義隆	昭49・2・28



若松部屋の名称も古く、初代は宝暦初年（一七五一）といわれている。嘉永六年（一八五三）の相撲細見起解には、「宿所稽古場本所相生町、秀の山門人大江山改、若松源治」ともみえている。高砂部屋の射水川が十代目若松を継ぎ、高砂一門の補佐役を果していた。昭和三十六年頃は、褐色の弾丸房

錦が活躍し、引退後年寄山響を襲名し、次いで鯨ノ里の若松を継ぎ、十二代目若松親方として、角界唯一の国立大理科系出身の徳の島等を育てている。

● 高砂稽古場之図 蜂須賀国明画…明治9年



相撲部屋一覽表

※電話番号が2とおりある場合
下にあるのが力士専用

団体 法人	日本相撲協会	〒130 東京都墨田区横網1丁目3番28号	☎03 (623) 5111
春日野部屋	〒130 東京都墨田区両国1丁目7番11号	☎03 (631) 1871	(634) 9828
出羽海部屋	〒130 東京都墨田区両国2丁目3番15号	☎03 (631) 0090	(632) 4090
三保ヶ関部屋	〒130 東京都墨田区千歳3丁目2番12号	☎03 (631) 3007	(632) 4767
武蔵川部屋	〒135 東京都江東区平野3丁目2番9号	☎03 (643) 9383	(641) 0947
二子山部屋	〒166 東京都杉並区成田東3丁目25番10号	☎03 (317) 0018	(316) 5939
藤島部屋	〒164 東京都中野区本町3丁目10番6号	☎03 (372) 7756	
間垣部屋	〒130 東京都墨田区亀沢3丁目8番1号	☎03 (623) 8865	(623) 8726
放駒部屋	〒166 東京都杉並区阿佐谷南3丁目12番8号	☎03 (392) 5010	
花籠部屋	〒166 東京都杉並区阿佐谷南3丁目10番22号	☎03 (398) 7788	(398) 9625
片男波部屋	〒130 東京都墨田区石原1丁目33番9号	☎03 (625) 6087	(622) 8001
大鵬部屋	〒135 東京都江東区清澄2丁目8番3号	☎03 (641) 4007	(643) 4027
佐渡ヶ嶽部屋	〒130 東京都墨田区大平4丁目18番13号	☎03 (626) 2875	(625) 6951
二所ノ関部屋	〒130 東京都墨田区両国4丁目17番1号	☎03 (631) 7502	(631) 0179
押尾川部屋	〒135 東京都江東区木場2丁目17番7号	☎03 (643) 9797	(643) 8156
立浪部屋	〒130 東京都墨田区両国3丁目26番2号	☎03 (632) 1138	(631) 2434
春日山部屋	〒135 東京都江東区佐賀1丁目10番14号	☎03 (630) 4322	(630) 2870
大島部屋	〒130 東京都墨田区両国3丁目5番3号	☎03 (632) 0240	
伊勢ヶ浜部屋	〒112 東京都文京区白山5丁目7番14号	☎03 (945) 0150	(947) 8389
木瀬部屋	〒113 東京都文京区本郷2丁目35番21号	☎03 (815) 2771	(811) 6635
宮城野部屋	〒130 東京都墨田区緑4丁目16番3号	☎03 (632) 6635	(634) 0291
友綱部屋	〒135 東京都江東区毛利1丁目20番7号	☎03 (631) 1335	(631) 6639
安治川部屋	〒135 東京都江東区毛利1丁目7番4号	☎03 (634) 5115	(634) 5514
熊ヶ谷部屋	〒133 東京都江戸川区南小岩1丁目6番28号	☎03 (658) 2465	(671) 8951
朝日山部屋	〒132 東京都江戸川区北葛西4丁目14番21号	☎03 (687) 8321	(686) 4950
大鳴戸部屋	〒272 千葉県市川市北方2丁目22番14号	☎0473(35) 3169	
時津風部屋	〒130 東京都墨田区両国3丁目15番3号	☎03 (635) 0015	(634) 8549
湊部屋	〒333 埼玉県川口市芝中田2丁目20番10号	☎0482(65) 1500	
鏡山部屋	〒133 東京都江戸川区北小岩8丁目16番1号	☎03 (673) 5358	(673) 3474
伊勢ノ海部屋	〒132 東京都江戸川区春江町3丁目8番80号	☎03 (676) 3396	(677) 6860
立田川部屋	〒130 東京都墨田区両国4丁目7番11号	☎03 (631) 9336	
井筒部屋	〒130 東京都墨田区両国2丁目2番7号	☎03 (633) 8920	(634) 9827
陸奥部屋	〒132 東京都江戸川区平井3丁目13番14号	☎03 (637) 3434	
高砂部屋	〒111 東京都台東区柳橋1丁目22番5号	☎03 (861) 4600	(861) 3210
九重部屋	〒130 東京都墨田区亀沢1丁目16番1号	☎03 (621) 1800	(621) 0404
高田川部屋	〒132 東京都江戸川区一之江2丁目1番15号	☎03 (656) 0015	(656) 5604
若松部屋	〒130 東京都墨田区両国2丁目10番8号	☎03 (635) 1044	(631) 6250
大山部屋	〒133 東京都江戸川区東小岩5丁目35番13号	☎03 (673) 5603	

(昭和60年1月現在)

七、墨田区内の相撲 史跡めぐり

回向院

両国二一八一〇



回向院は江戸の過半を灰と化した。明暦三年（一六五七）の大火いわゆる振袖火事による死者を合葬し、その冥福を祈るために幕府が建立した寺院である。大火のあと約百年を経た明和五年九月（一七六八）に、始めて回向院境内で勧進相撲が興行された。両国橋をはさんで、江戸第一の繁華な盛り場となり、様々な掛小屋があったが、その中でも回向院の大相撲が最大規模であった。また、有名寺院の出開帳も人々を参集させた。春夏の興行ごとに開催場所を変え



てきた江戸勧進相撲は、初期の深川八幡宮から次第に本所回向院が多くなり、回向院で初興行があったから六十五年目の天保四年十月（一八三三）からは、回向院が定場所となったのである。そして、江戸、明治と櫓太鼓の音を両国の川面に響かせて来た。回向院には相撲関係諸碑墓は多いが、その他に、明暦大火災死者供養塔（都指定）、海難者供養碑、橋千蔭、山東京伝、鼠小僧の墓及び、平田禿木、植草甚一の墓などがある。

力塚

昭和十一年一月に相撲協会が、歴代年寄慰霊のため、および相撲道の高揚のために建立した巨碑である（昭和二十八年修復）

回向院相撲記

昭和十四年に建立されたものであるが、蔵前国技館完成を期して大相撲回向院時代を偲ぶため、昭和二十八年表面の文面を再刻したものである。相撲小史といえる碑である。

法界萬霊塔

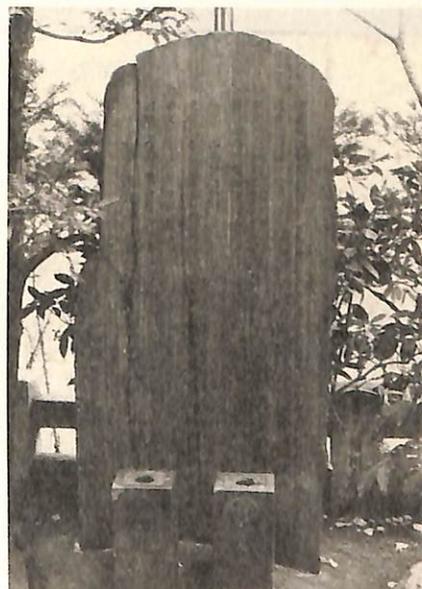
「角力記」を建立した時に同時に、物故記者の供養のため建てたものである。



●回向院相撲記



●法界萬霊塔



●角力記



●東京相撲記者碑

角力記

初代横綱梅ヶ谷の大雷といわれる七代目雷権太夫が物故記者慰霊のため、大正五年五月に建立したものである。現在、国民・山口昇一郎からNHK・和田信賢まで三十九名追刻されている。

東京相撲記者碑

「角力記」の碑で記載できなくなったので、続きとして建立されたもの。昭和五十九年十二月現在報知・水谷竹紫から、毎日・相馬基まで二十三名記されている。建立は三十八年九月。

無縁塔（墓域右側北面）

直接相撲とは関係ないが、明治四十二年に国技館を建設する時、敷地内から出た遺骨類を合祀したものである。

呼出先祖代々之墓（太鼓塚）

（墓域奥手前三列左）

通称太鼓塚と呼ばれ、呼出連中の墓であり、記念碑でもある。昭和六年五月に旧墓碑が建立されたが、戦災で破損し、昭和三十四年九月に再建されたものである。



●呼出先祖代々之墓



●無縁塔

野見宿弥神社

亀沢二一八一〇

相撲の元祖といわれる野見宿弥を祭した社である。野見宿弥は出雲国飯石郡能見の産で、垂仁天皇の七年、当麻蹶速との相撲に勝ち、相撲の元祖とあがめられて来た。明治十七年高砂浦五郎の尽力により、津軽藩上屋敷の一部に建設され、その後震災で炎上し仮社殿となっていたが、昭和二十年三月の大空襲で再び炎上し、二十八年六月再建したものである。社殿は三間四方出雲式檜造りである。

東京場所二日前の金曜日毎に、出雲大社（麻布）から宮司がみえ、協会関係者も参列し「宿弥神社例祭」がとり行われる。境内には、穴守稻荷社と歴代横綱の名を刻んだ「歴代横綱之碑」二基が建てられている。一基は昭和二十七年十一月建立し、初代明石志賀之助から四十六代朝汐太郎、もう一基は、四十七代柏戸剛から五十七代隆の里まで追記されている。



●明治の頃の宿弥神社

●宿弥神社例祭



●歴代横綱之碑

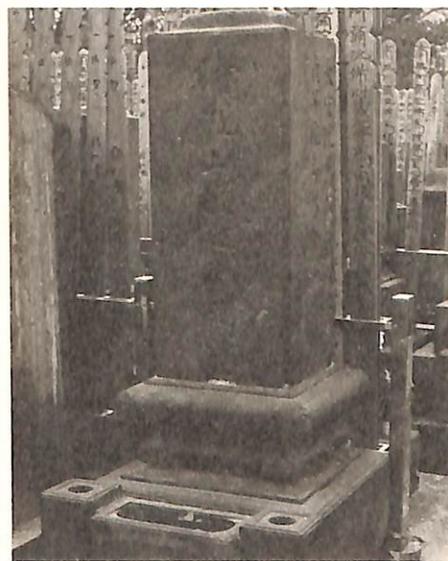


墨田区内力士墓所一覽

入幕場所	力士名	本名	最終場所	最高位	年寄名	歿年月日 △印現歿	享年	戒名	墓所
寛政6 11	大空源太夫		寛政11 11	2		△寛政12 3 26	62	大雲乘空信士	東京都墨田区両国 回向院
寛政9 11	鯨和三郎		文化元 3	3	常盤山	天保4 2 9		盤光常山信士	東京都墨田区両国 回向院
天保11 10	相生松五郎	北代庄太郎	弘化2 3	2	春日野	嘉永3 10 26		相生院玄修日行信士	東京都墨田区両国 回向院
天保15 10	生月鯨太左衛門	要作	嘉永3 3	外		△嘉永3 5 24	25	晴光院巨海生月居士	東京都墨田区吾妻橋 勝福寺
安政3 11	鷺ヶ浜音右衛門		明治2 4	関	常盤山	△明治2 8 27	44	常歡院千峰遊戯居士	東京都墨田区両国 回向院
明治3 4	鷺ヶ浜音右衛門	柳沢	明治9 4	4	常盤山	明治30 8 30	60	常喜院松山音楽居士	東京都墨田区両国 回向院
明治4 3	勝山岫芳藏	小松芳五郎	明治10 6	5	尾車	明治29 1 26	56	覚岸浄遊信士	東京都墨田区向島 弘福寺
明治15 1	西ノ海嘉治郎	小園嘉次郎	明治29 1	横	井筒	明治41 11 30	54	嘉光院清山日道居士	東京都墨田区太平 法泉院
明治18 5	司天竜政吉 (鶴ヶ浜)	勇川政吉	明治28 1	小	中立	大正6 9 25	58	善勇院楽山中立居士	東京都墨田区両国 回向院
明治20 1	鬼ヶ谷才治	鈴木才治	明治40 1	小	田子浦	昭和6 2 2	77	顯誉鬼才居士	東京都墨田区両国 回向院
明治24 5	大戸平広告	太田広告	明治32 1	大	尾車	大正5 3 13	49	円証院泰岳全勇居士	東京都墨田区向島 弘福寺
明治25 1	高ノ戸大五郎	市瀬大五郎	明治32 1	3	楯山	明治42 7 31	44	楯山高道信士	東京都墨田区両国 回向院
明治25 6	大砲万右衛門	角張万次	明治40 5	横	待乳山	大正7 5 27	48	楯山院蓮乘信士	東京都世田谷区烏山 妙寿寺
明治27 1	大見崎八之助	原卯三郎	明治36 1	2	阿武松	昭和14 10 9	73	大宏院万誉徳円居士	東京都墨田区両国 回向院
明治27 1	海山太郎	笠井外之助	明治42 1	関	二所関	昭和6 6 6	61	本関院法軍海山日衛居士	東京都墨田区吾妻橋 清雄寺
									高知市 泰泉寺



●春日野代々の墓…回向院



●大砲万右衛門の墓…回向院



●呼出し太郎の墓…回向院

昭和30 5	昭和16 5	昭和6 5	大正15 1	大正14 1	大正4 5	大正3 5	大正3 5	大正3 5	明治41 5	明治40 5	明治39 1	明治36 1	明治30 1	
栃光正之	双見山一夫	錦華山大五郎	玉錦三右衛門	出羽ヶ嶽文治郎	九州山十郎	釈迦ヶ嶽庄太郎	国ヶ岩卯八	真砂石長七	鏡川正光	紫雲竜吉之助	浪ノ音建藏	甲吾郎	松ヶ関文藏	
中村有雄	大星一夫	浜野平藏	西内弥寿喜	斎藤文次郎	中西十郎	川緒庄太郎	山本宇八	千葉長七	大野正光	斎藤吉次郎	鎌田健藏	五味安吉	柴田文藏	
昭和41 1	昭和22 6	昭和15 1	昭和13 5	昭和14 5	大正11 1	大正11 1	大正8 1	大正7 1	大正3 1	大正6 1	大正3 5	大正2 1	明治38 5	
大1	1	2	横	関	大3	外3	小	2	1	関	4	2		
千賀浦	錦戸	小野川	二所関	田子浦	稲川	山響	稲川	鳴戸	阿武松	振分	立川	常盤山		
昭和52 3 28	昭和49 3 5	昭和42 10 21	△昭和13 12 4	昭和25 6 9	昭和2 1 7	昭和41 7 18	昭和7 2 17	△大正7 4 6	昭和16 4 20	昭和21 4 28	昭和42 11 25	大正12 1 9	明治42 5 2	
43	58	65	35	47	37	77	57	26	61	64	85	54	41	
雅亮院积有正	瑞輪院猷徳式道居士	謹嚴院華岳日平居士	大法院宝玉錦光日寿居士	正覚院金剛日文居士	大勇院直道日信居士	夏岳浄庄居士	积行海信士		正光院荣照日鏡居士	清涼院法得日吉居士	勇海院浪音日慈居士	勇岳院剛誉浄安居士	真覚浄明信士	
東京都墨田区千歳	東京都墨田区立川	東京都墨田区駒形	高知県香我美町岸本	東京都墨田区吾妻橋	東京都墨田区两国	東京都墨田区两国	東京都墨田区两国	東京都墨田区两国	東京都墨田区太平	東京都墨田区駒形	東京都墨田区两国	山梨県若草町藤田	東京都墨田区千歳	東京都墨田区向島
西光寺	龍光院	本久寺	清雄寺	力塚(納髪)	清雄寺	回向院	回向院	回向院	法恩寺	本久寺	回向院	泉能寺	西光寺	弘福寺



●海山太郎：清雄寺



●西ノ海嘉治郎：法泉院



●玉錦三右衛門：清雄寺



●式守伊之助：法泉院



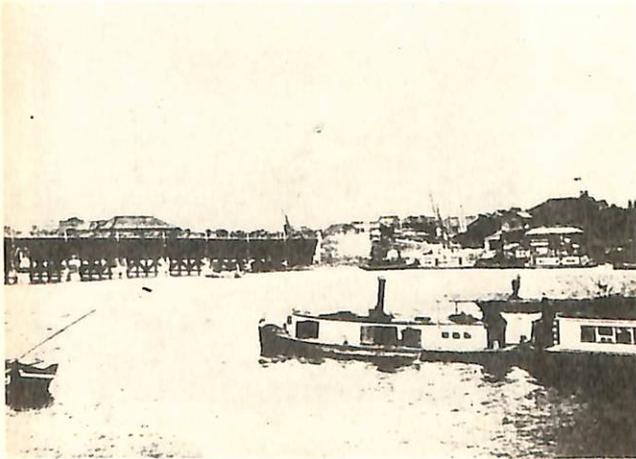
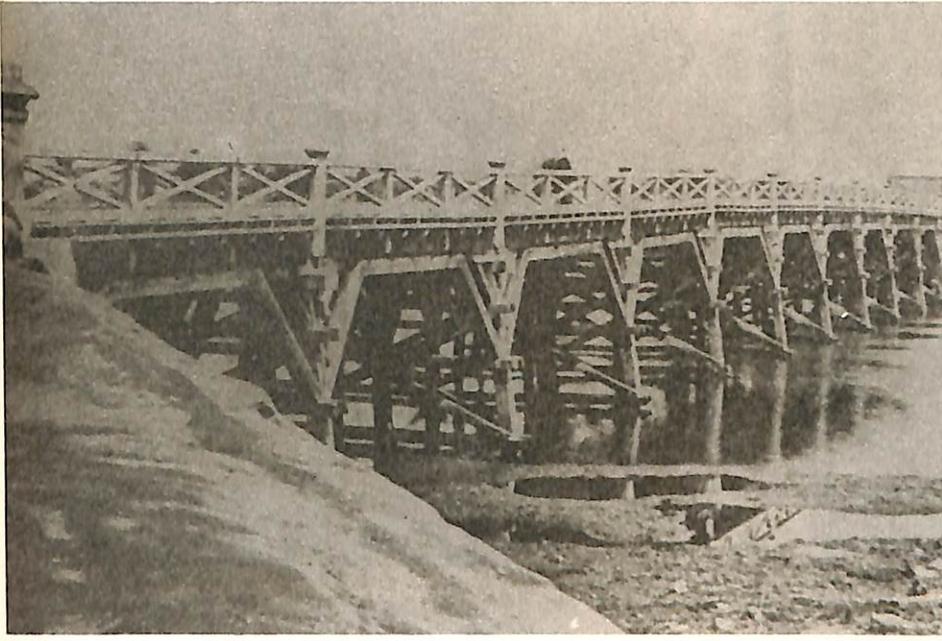
●生月鯨太左衛門：天祥寺



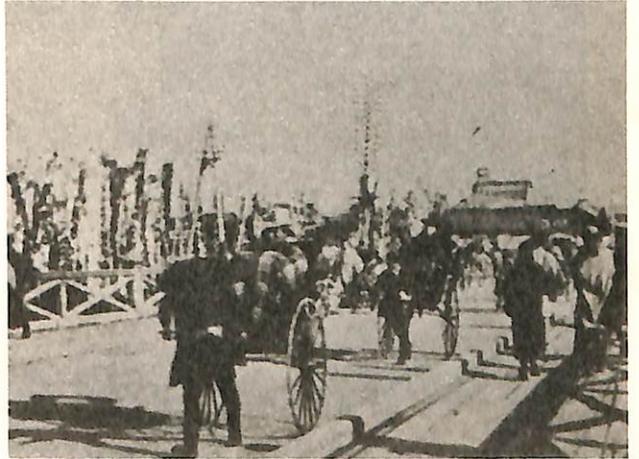
●勝山・大戸平：弘福寺

八両国界限今昔

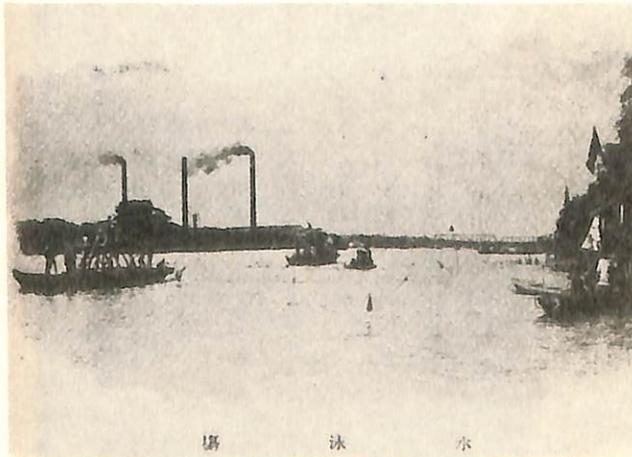
●最後の木橋は明治八年に架けられた：明治20年頃



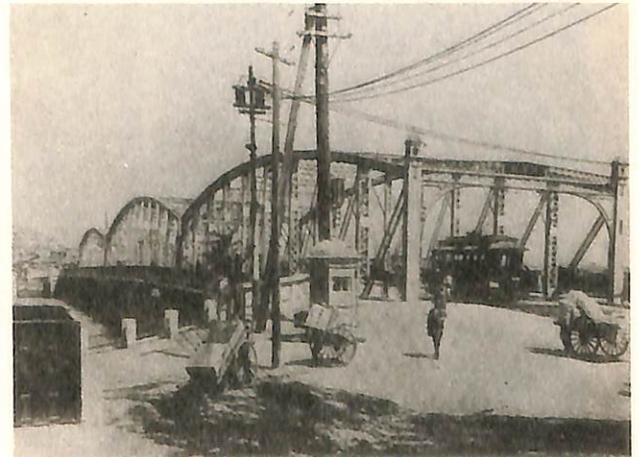
●一銭蒸気船・相撲のぼりのみえる両国辺…明治30年頃



●賑わいをみせる両国橋上…明治30年頃



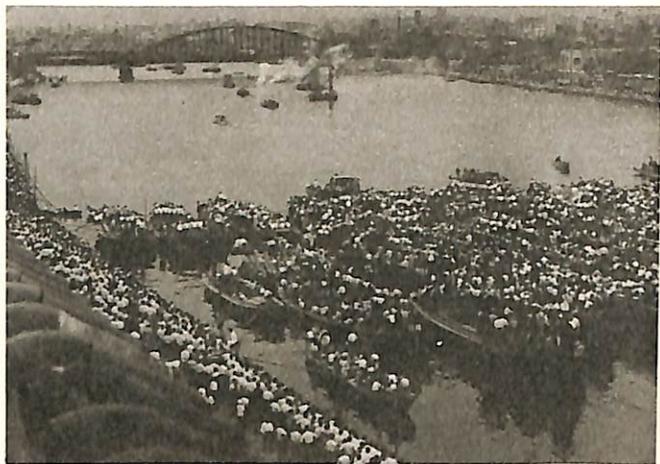
●上流に厩橋を見る両国の水練場…明治40年頃



●遠く国技館もみえる、鉄橋(明治37年)になった両国橋…明治45年頃



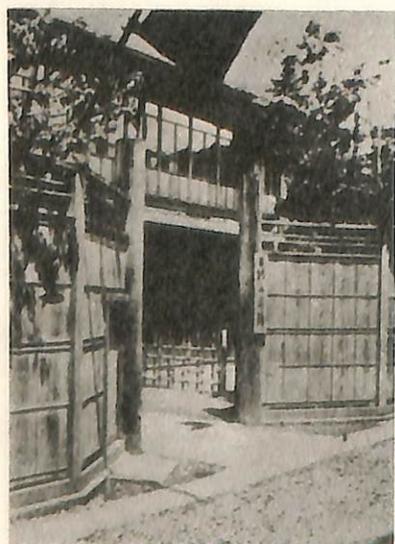
●紫鯉の釣り場で有名だった両国百本杭
…明治30年頃



●江戸時代から花火も両国の名物であった
…昭和32年



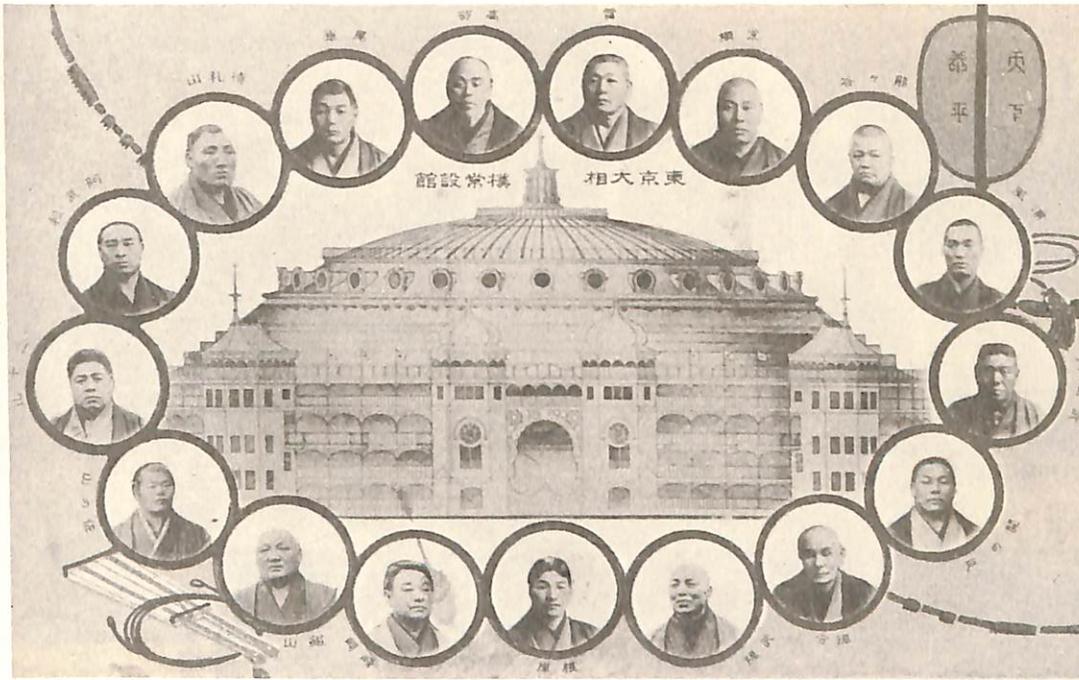
●相撲のぼりも賑かな回向院：明治30年頃



●両国・与兵衛ずし…昭和4年



●供養碑の並ぶ回向院境内…昭和55年

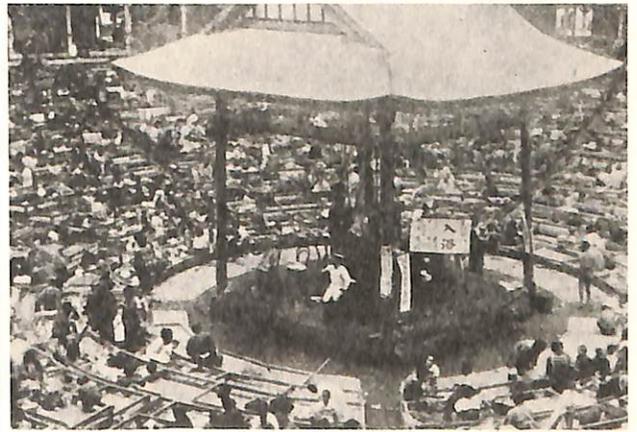


●東京大相撲常設館開館記念絵ハガキの一枚：

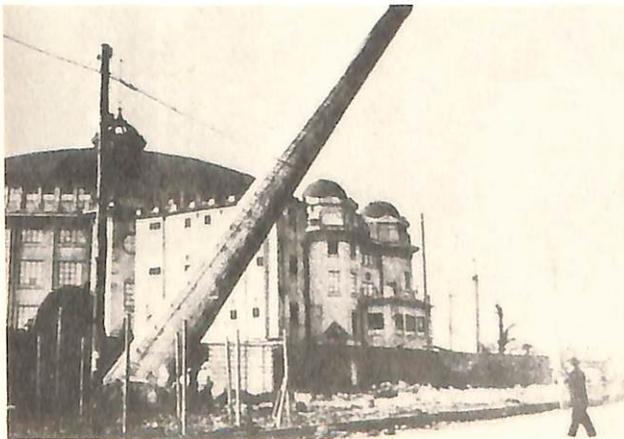
明治42年6月



●国技館での菊花大会…明治45年頃



●明治43年8月の大水に避難者でいっぱい
の国技館内



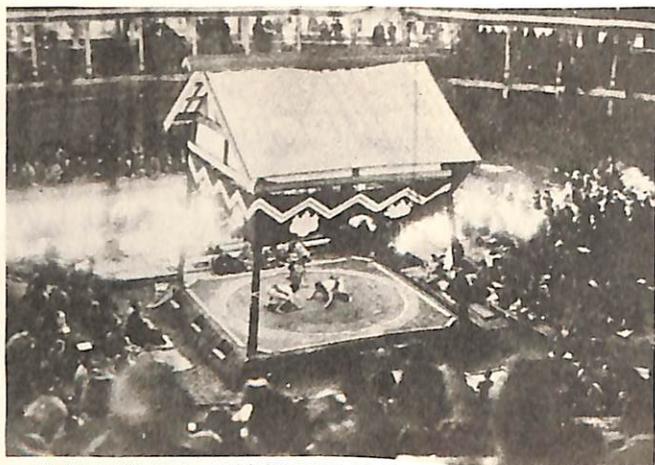
●戦災にあった国技館、東側から…昭和20年頃



●博覧会の会場ともなった国技館…昭和7年



●京葉道路ごしにみる雪の国技館…昭和31年頃



●戦災で焼けた国技館での最後の場所…
昭和20年11月



●明治二十七年、総武鉄道本所（現錦糸町）市川間が開通し、明治三十七年兩國橋まで延長された。兩國橋停車場側面：明治40年頃



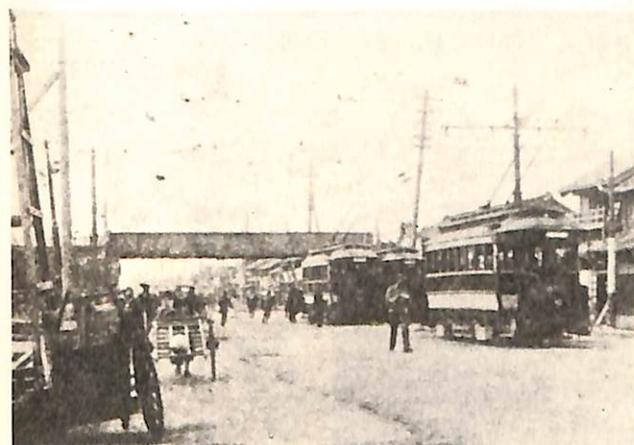
●兩國橋停車場正面。三枚の写真をみると駅の全容がわかる…明治40年頃



●震災後の両国駅仮駅舎…大正12年



●震災で焼け曲ったレール。遠く国技館がみえる…大正12年



●亀沢町大通り(現・緑1丁目交差点)…明治40年頃



●昭和五年一月に新駅舎が完成し、十二月両国駅と改称。

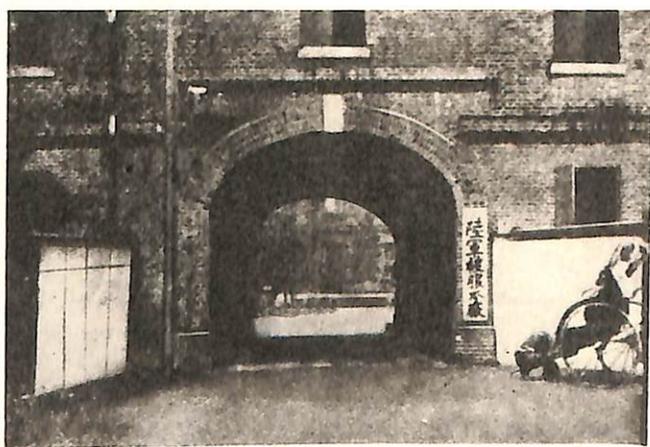


●日本通運の事務所のあたり一帯が、新国技館の敷地となったもので、右に慰霊堂、中央に旧安田庭園の森と両国会堂がみえる。都電操作場があり、両国駅—新宿駅が通っていた
 …昭和32年

● 新国技館東側にあった江東青果市場（昭和59年江戸川区に移転）、震災後区内の三ヶ所と浜町の市場を集めて作られた。大八車が運搬の主力になっていた。左に国技館がみえた：昭和4年頃



● 被服廠跡地での、多数の震災被災者のため慰霊堂が建てられた…昭和59年



● 本所御蔵跡にできた陸軍被服本廠…明治40年頃



● 赤穂浪士討入りの、吉良邸跡で、松坂町公園となっている…昭和55年



● 江戸からの大名庭園の名残りとどめる旧安田庭園潮入の池…昭和55年

この小冊子を作るあたり、多くの方々のご協力をいただき、有難とうございました。

ただそのご協力、ご期待にどれだけそえたのか、はなはだ心もとないしだいです。

最後にご協力下さいました各位を列記させていただきます、お礼にかえさせていただきます。

日本相撲協会、市川国一（相撲博物館長・元武蔵川理事長）、泉林八（二十二代木村庄之助）、木村庄二郎、工藤明（工藤写真館）、今田富士雄（ライオン株式会社）、下家義久（九代目井筒子息・ベースボールマガジン社）、小泉国太郎（元与兵衛ずし）、榎戸隆（朝日新聞社）、相撲史跡研究会、望月良晃、御蔵前書房、墨田区役所広報、常泉有利、山崎章三、村瀬誠。

なお、編集は小島惟孝・池田厚子が担当した。



「相撲・両国・国技館」

発行

昭和六十年一月十日

発行者

墨田区立緑図書館

墨田区緑二―二二―三

電話(六三一)四六二一

印刷・一力印刷所





墨田区立図書館叢書 4



墨田区立
緑図書館